三重県埋蔵文化財調査報告237

北門遺跡（第3次）発掘調査報告

2004（平成16）年3月

三重県埋蔵文化財センター

序

今日、経済活動を支える重要な要素である流通は、その大半を自動車に依存しています。日本で暮らす我々の移動の手段も、自動車に頼る割合が増えてきています。こういった現実のなか、自動車道の整備は県内各地で行われています。そして、これらの整備予定地には、いくつかの埋蔵文化財包蔵地が発見されています。これらの埋蔵文化財は、私たちの先祖が、その時代を生きた証であり、先人の文化や教訓等を今に伝えてくれる貴重な財産ともいえましょう。三重県埋蔵文化財センターでは、この様な埋蔵文化財を開発行為から守り、後世に伝える努力を続けているところです。

しかし、これらは、土木工事等により破壊されると、二度とその実態を把握することが不可能になる性格のものでもあります。三重県政においても、埋蔵文化財のこうした特性を踏まえ、その保護に勤めているところではありますが、どうしても現状保存困難な部分については、発掘調査を行い、記録として保存せざるを得ない場合もあります。

北門遺跡の発掘調査は、こうした経緯で行われたものです。本書が消滅した遺跡に代わり、先人の文化や教訓後を後世に伝える一助となることを願うものであります。

なお、文化財保護法の精神を尊重され、協議から発掘調査に至るまで多大のご理解とご協力をいただいた各関係機関や地元自治会の方々には、ここに心からのお礼を申し上げます。

２004年３月

三重県埋蔵文化財センター

所　長　　吉　水　康　夫

例　　言

1　本書は、三重県上野市大谷に所在する北門（きたかど）遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2　調査は下記の体制で実施した。

・　調査主体　　三重県教育委員会

・　調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査研究グループ

主　査　　森川常厚

研修員　　五十棲孝子（四日市市立内部小学校）

水谷隆広　（三重県立菰野高校）

野田有美　（三重県立名張西高校）

小倉　整　（鈴鹿市立神戸中学校）

3　本書の執筆・編集は、調査担当が分担して行ない、文責は目次及び文末に明記した。写真撮影は、各執筆者が担当した。

4　本書が対象とした調査面積は、736㎡である。

5　本書が対象とした現地調査期間は、平成14年11月６日～平成14年12月27日である。

6　本書で示す方位は、国土座標第Ⅵ系を基準とする座標北を用いた。なお、磁北は約６°５0′西偏（平成９年、国土地理院）している。

7　本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。

ＳＡ：柵　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝　　ＳＫ：土坑　　ＳＨ：竪穴住居　　ＳＺ：不明遺構

8　本書で表記する色調は、小山・竹原編『新版標準土色帖』（９版　1989）を使用した。

9　発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々のご指導・ご協力をいただいた（敬称略）。

上野市教育委員会文化課　　伊賀県民局伊賀建設部　　地元地権者各位

伊藤裕偉　榎村寛之　笠井賢治　竹内英昭　東野治之　福田典明　和気清章

10　本書が扱う発掘調査の原因事業は、国道422号（三田坂バイパス）国補道路改築事業である。

11　発掘調査の経費は、三重県県土整備部が負担した。

12　本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、当三重県埋蔵文化財センターが保管している。

目　　次

Ⅰ　前言 ……（森川） 1

Ⅱ　位置と環境 ……（水谷） 2

Ⅲ　遺構 …… 7
1　層序 ……（小倉） 7
2　古墳時代の遺構 ……（水谷） 7
3　飛鳥時代から奈良時代前半の遺構 ……（五十棲・水谷・野田・小倉） 10
4　平安時代前期の遺構 ……（五十棲・水谷・小倉） 16
5　平安時代後期の遺構 ……（　〃　） 19

Ⅳ　遺物 …… 21
1　古墳時代初頭の遺物 ……（小倉） 21
2　飛鳥から奈良時代前半の遺物 ……（野田・小倉） 27
3　平安時代前期の遺物 ……（　〃　） 30
4　平安時代後期の遺物 ……（　〃　） 30
5　ＳＺ１９出土遺物 ……（　〃　） 31
6　包含層出土遺物 ……（　〃　） 31

Ⅴ　自然化学分析 ……（パリノサーヴェイ株式会社） 41
1　試料 …… 41
2　方法 …… 41
3　結果 …… 41
4　考察 …… 42

Ⅵ　結語 …… 43
1　ＳＤ２１について……（水谷） 43
2　文字資料について ……（小倉） 46
3　掘立柱建物群について ……（小倉） 47

挿　図　目　次

Ⅱ　位置と環境

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　調査区位置図 …… 2
第３図　遺跡地形図 …… 4

Ⅲ　遺構

第４図　調査区遺構平面図……５・６
第５図　調査区土層断面図 …… 8
第６図　ＳＤ21遺物出土状況図・土層断面図 … 9
第７図　SH26･29･31･ＳＢ50･ＳＡ56実測図… 11
第８図　ＳＨ2･９･11･43･ＳＢ55実測図 …… 13
第９図　ＳＥ35･38実測図 …… 14
第10図　SA57･SB49･51･52実測図 …… 11
第11図　ＳＢ44～48実測図 ……17
第12図　ＳＢ54実測図 ……18
第13図　ＳＺ19実測図 ……19
第14図　ＳＫ59･７･27･58実測図 …… 20

Ⅳ　遺物

第15図　ＳＤ21出土遺物実測図…… 22
第16図　ＳＤ21出土遺物実測図…… 23
第17図　ＳＤ21出土遺物実測図…… 24
第18図　ＳＤ21出土遺物実測図…… 25
第19図　ＳＤ21出土遺物実測図…… 26
第20図　SE35･38･SH2･43出土遺物実測図 …28
第21図　遺構出土遺物実測図…… 29
第22図　SZ19出土遺物実測図 …… 32
第23図　包含層出土遺物実測図 …… 34

Ⅴ　自然科学分析

第24図　炭化材組織図 …… 42

Ⅵ　結語

第25図　時代別遺構変遷図１ …… 44
第26図　時代別遺構変遷図２ …… 45

写　真　図　版

ＰＬ　１…… 調査前風景
…… 調査区全景
ＰＬ　２…… SD21出土状況
ＰＬ　３…… SD21出土状況
ＰＬ　４……SB46･47･SH9･11
…… SH26･29･31･SB50･SA56
ＰＬ　５…… SH29
…… SB45
ＰＬ　６…… SZ19
ＰＬ７ …… 出土遺物
ＰＬ８ …… 出土遺物
ＰＬ９ …… 出土遺物
ＰＬ10…… 出土遺物
ＰＬ11…… 出土遺物
ＰＬ12…… 出土遺物
ＰＬ13…… 出土遺物
ＰＬ14…… 出土遺物

表　目　次

出土遺物観察（表１～６）……35～40
放射性炭素年代測定および同定結果（表７）… 41

Ⅰ　前　　言

国道422号の道路改良事業である三田坂バイパスの建設予定地には多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されており、これらの一つに北門遺跡がある。

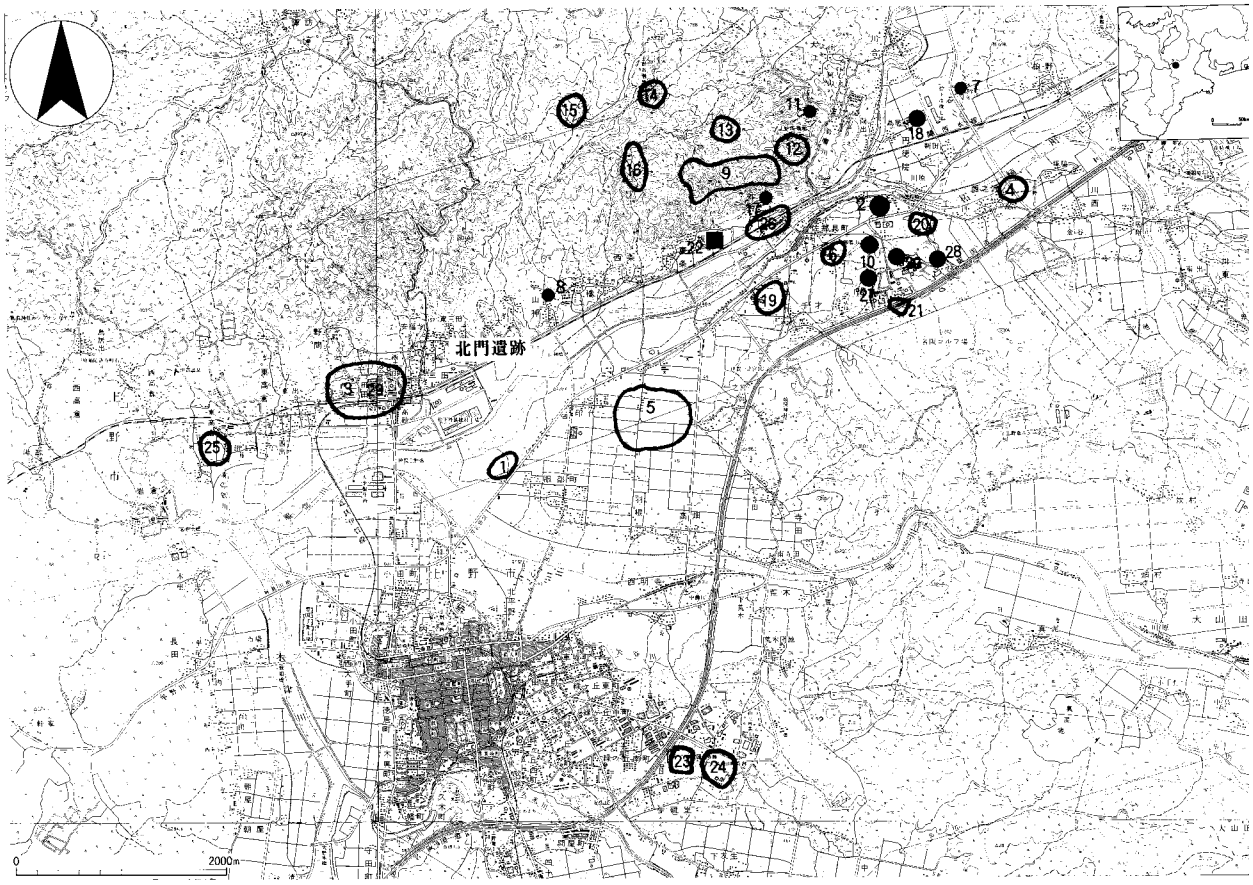
平成13年度、県土整備部から取付道路部分について埋蔵文化財の範囲確認調査の依頼を受けた。三重県埋蔵文化財センターでは、平成13年4月11日に2200㎡、平成13年10月25日、11月20・21日及び平成14年2月22日の3回には14,700㎡を、延べ5日間にわたり範囲確認調査を行った。その結果、台地上から遺物包含層や土坑等の遺構が確認され、対象範囲のうち800㎡に北門遺跡が及んでいることが確認された。この結果は、平成13年4月19日付教埋第32号及び平成14年6月3日付教埋第59号で県土整備部へ通知され、この取扱について両者で協議が重ねられた。その結果、発掘調査により記録として保存し、発掘調査終了後に事業を行うこととした。

発掘調査は、三重県埋蔵文化財センター調査研究グループが担当し、平成14年11月6日に開始した。

文化財保護法第58条の2第1項の規定により平成14年11月6日付教埋第215号で「発掘調査の報告」を三重県教育委員会教育長へ行った。

調査の進展に伴い、飛鳥～平安時代の集落跡が姿を現したが、調査終盤になって、多量の古式土師器と共に古墳時代初頭の環濠が検出されるという大きな成果を得た。このため、調査予定期間をやや延長し、歳も押迫る12月27日に調査を終了した。

なお、出土遺物については、三重県教育委員会から平成15年2月18日付教委第12-6-15号で上野警察所長宛発見認定が通知されている。　（森川常厚）



第1図　遺跡位置図『この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図（上野・島ケ原・伊勢路・月ケ瀬）を掲載したものである。』

Ⅱ　位置と環境

北門遺跡は三重県上野市に所在する。当遺跡は、上野市の北東部を西流する柘植川北岸の段丘上に位置する。そして、北には信楽高原に連なる丘陵が迫り、南には柘植川によって形成された小扇状地が開け、盆地中心域である上野市街地が南西に続く。

上野市とその周辺域を合わせた三重県西部は伊賀地域と呼ばれ、律令下においては伊賀国に属した。

伊賀国は、東に鈴鹿・布引山系が縦走し、西に大和高原、北に信楽高原が周囲を取り囲む盆地地形である。上野盆地の地形は複雑で、不規則に山地・丘陵・台地が入り組み、盆地内盆地を形成している。当遺跡の南西近辺で木津川・柘植川・服部川の３河川が合流し、上野市付近で最も広い平坦面を形成する。これが狭義の上野盆地である。一方、名張川とその支流は名張市付近で小盆地を形成する。これが名張盆地であり、双方あわせて広義の上野盆地となる。いずれの河川も木津川に合流し、最後は淀川として大阪湾へ注ぐ。

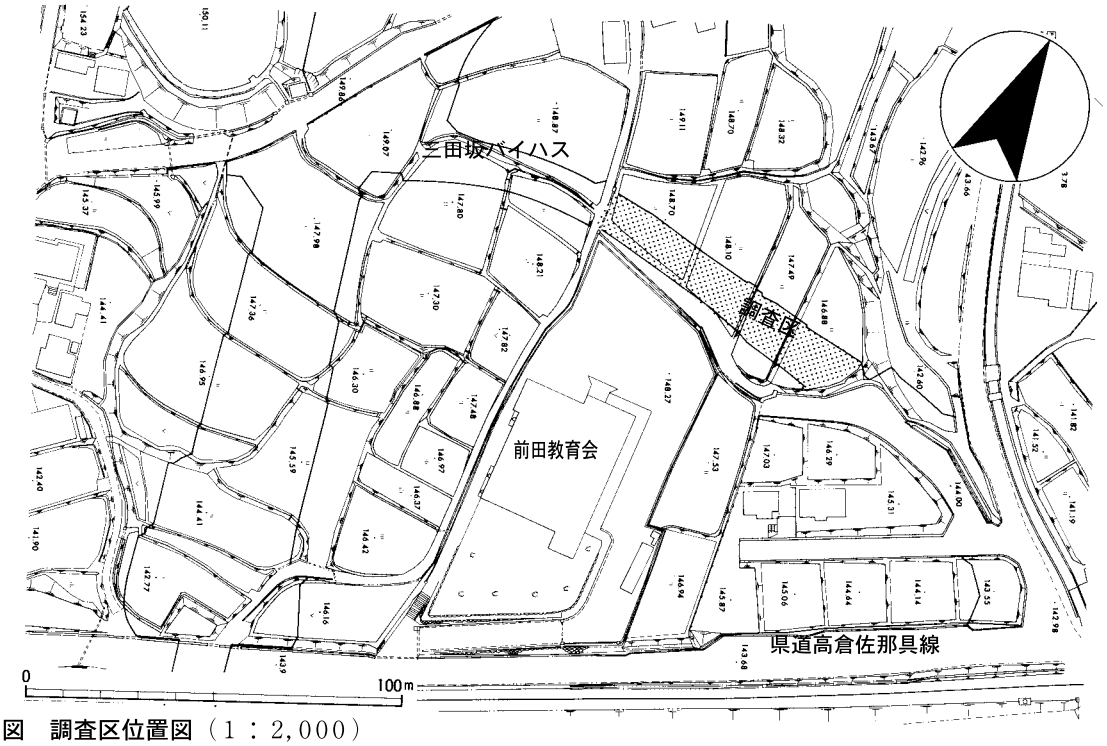
東に位置する鈴鹿・布引山系が伊勢湾岸地域と厳しく隔て、県内の同地域よりも、むしろ関西地域の影響をより強く受けてきた。

旧石器・縄文時代　当遺跡周辺域における旧石器時代の遺跡は報告されておらず不明である。縄文時代の遺跡としては、小芝遺跡（１）（註１）で溝状の落ち込みから縄文後期の土器片が出土し、高野遺跡（２）（註２）からは中期から後期にかけての土器片を含む小土坑が検出されている。しかし、同時代に関する遺跡・出土遺物は少なく、今後の調査による解明が待たれるところである。

弥生時代　小芝遺跡では前期新段階の壷が出土しているが、前期にまでさかのぼる遺跡は稀である。また、三田遺跡（３）・天道遺跡（４）（註３）・高野遺跡・印代東方遺跡群（５）（註４）からは中期の土器が出土しているが、遺構はほとんど検出されていない。後期以後、徐々に遺跡が増加する。三反田遺跡（６）（註５）・印代東方遺跡群においては方形周溝墓が検出されている。

また、上野市千歳地区で出土したとされる銅鐸の耳飾部分が梅原末治氏により報告されているが、厳密に出土地を確定するのは困難である。（註６）

古墳時代　柘植川中流北岸に位置する丘陵上は、4世紀半から古墳がたびたび築造された地域である。



第２図　調査区位置図（１：2,000）

前期では東山古墳（７）・山神寄建神社古墳（８）、中期では４基の前方後円墳を盟主とする外山・鷺棚古墳群（9）が築造された。また柘植川の左岸には、御墓山古墳（10）が存在する。同古墳は、全長188mを擁する三重県下最大の前方後円墳である。後期になると、柘植川右岸丘陵上にキラ土古墳（11）が盟主墓として築かれる。しかし、後期古墳の規模は円墳を中心として縮小化し、源六谷古墳群（12）・奥弁天古墳群（13）・西元谷古墳群（14）・波敷野古墳群（15）・石打古墳群（16）などの群集墳が確認されている。巨石を用いた横穴式石室を有する勘定塚古墳（17）は7世紀前半に築造されたものと思われるが、この地域における最後の盟主墓となる。

また集落遺跡としては、北中溝遺跡（18）・宮ノ森遺跡（19）（註７）・大多田遺跡（20）（註８）・小芝遺跡などで竪穴住居等が検出されている。喜春遺跡（21）においては、初期須恵器の杯蓋が出土している。

飛鳥・奈良時代　当該期の当遺跡周辺における支配体制については判然としない。しかし、当遺跡の西に接する三田地区に、朝廷の直轄領である屯倉が設置されていたとする説がある。屯倉に伴って租税を貯蔵した倉庫施設を想起させる字名が「北門」をはじめとして紹介されており（註９）、当地域と朝廷の関係を検討する際に興味深い。

律令下において、伊賀国は阿拝郡・山田郡・伊賀郡・名張郡の４郡からなり、当遺跡の周辺域が属する阿拝郡は柘植・川合・印代・服部・三田・新井の６郷に分かれる。（註10）

国司が駐在する国府は地方統治の要である。伊賀国府跡（22）（註11）は柘植川北岸に位置している。北に丘陵が迫る段丘上面の平坦地に所在していたと考えられる。国分寺跡（23）と国分尼寺に比定される長楽山廃寺（24）が、そのほぼ真南５kmに位置しているのは、これらの関連を考える際に注目される。

また、東国と都を結ぶ交通路が整えられ、この地域に古代の官道である東海道が貫くことになる。皇位継承権をめぐる戦乱である壬申の乱（672年）において、大海人皇子が吉野を脱し、伊賀国内から伊勢平野に向かった際に通ったのも東海道であろうと考えられる。名張から木津川上流に沿って北上し、上野市荒木を経て、当遺跡が位置する丘陵地を北方にかすめる。さらに柘植川を東に向って加太峠を越え、伊勢の鈴鹿（関）に至るルートである。

そして、駅制も整えられる。和銅４年（711）には阿拝郡に新家駅（上野市新居）が置かれ、ルートが変更される。官舎遺跡（25）はこの新居の駅家に比定されている。（註12）ほぼ、木津川に併走する関西本線に沿うルートで、当遺跡南側に接しつつ、伊賀国府跡周辺で旧道に合流すると考えられる。

当該期の遺跡も柘植川北岸の段丘上を中心として分布する。古代の東海道が想定されるこの地域に、伊賀国府跡をはじめとする遺跡が濃厚に分布している。また、外山大坪遺跡（26）（註13）では、何棟もの大規模な掘立柱建物が検出され、有力豪族が居を構えていた可能性がある。７世紀後半には御墓山窯跡（27）・備後坂窯跡（28）で須恵器生産が開始される。特に御墓山窯跡では古代仏教に関わる陶製宮殿（厨子）が出土している。また、伊賀国内各郡に白鳳寺院が設けられ、阿拝郡内の三田廃寺（29）からは、白鳳前期の軒丸瓦などが出土している。

当遺跡周辺域の全体像を描く場合に、これら個々の事象が有機的に結びつき、この地域を古代の地域拠点として捉えることができる。

平安時代　律令制の衰退とともに、伊賀国府の政庁としての機能は弱体化していくが、11世紀代までは中心的建物が存在していたようである。

また、公地公民制の崩壊とともに、広大な土地を所有した領主が出現する。藤原清兼・実遠父子は、伊賀地域の南部一円と阿拝郡・山田郡で散在地を領し、この地域で権勢を誇った最大の在地領主であった。（註14）

当該期の遺跡としては、堂垣内遺跡（30）・三反田遺跡などがあるが、集落跡等の報告例は少ない。

平安京遷都後、東海道は近江国経由になり、さらに仁和2年（886）に鈴鹿峠越えの阿須波道が開通し、現在の国道１号線ルートへ移ることとなる。

鎌倉・室町時代　11世紀以降になると、実遠領は東大寺・興福寺・摂関家領に分割される。徐々に在地の領主層が成長し、土塁や堀をめぐらした城館が600ちかくも築かれる。その分布は伊勢地方と比べ濃厚であり、強大な勢力が存在せず、小領主が割拠

する伊賀地域の状況を反映するものと考えられる。これらの小領主層は国人と呼ばれ、互いに連携し「伊賀惣国一揆」といわれる地域連合を組織する。しかし織田信長によって国人衆も攻め滅ぼされる。（天正伊賀の乱）これにより、国人衆による伊賀支配は終焉を迎え、近世的封建社会へと移行していくこととなる。

［註］

（1）中浦基之『小芝遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会1993

（2）福田典明・豊岡勇『高野遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会2000

（3）服部久士・平子弘・山田猛『天道遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会1989

（4）服部久士『伊賀国府跡（第４次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター1992

（5）増田博『昭和63年度三反田遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会･上野市遺跡調査会1999

（6）梅原末治1927『銅鐸の研究　資料篇』木耳社1985年再版

（7）山本雅靖『宮ノ森遺跡発掘調査概要』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会1979

（8）笠井賢治『大多田遺跡発掘調査報告（２次）』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会1993

（9）早瀬保太郎『伊賀史概説』上巻1973『日本書紀』宣化紀に「伊賀国ノ屯倉」の記載がある。伊賀国内の屯倉の所在地を、「屯倉・屯田（みやけ）」が「御田（みた）」に転化し、さらに「三田」になったとする岡田栄吉氏の説を紹介している。

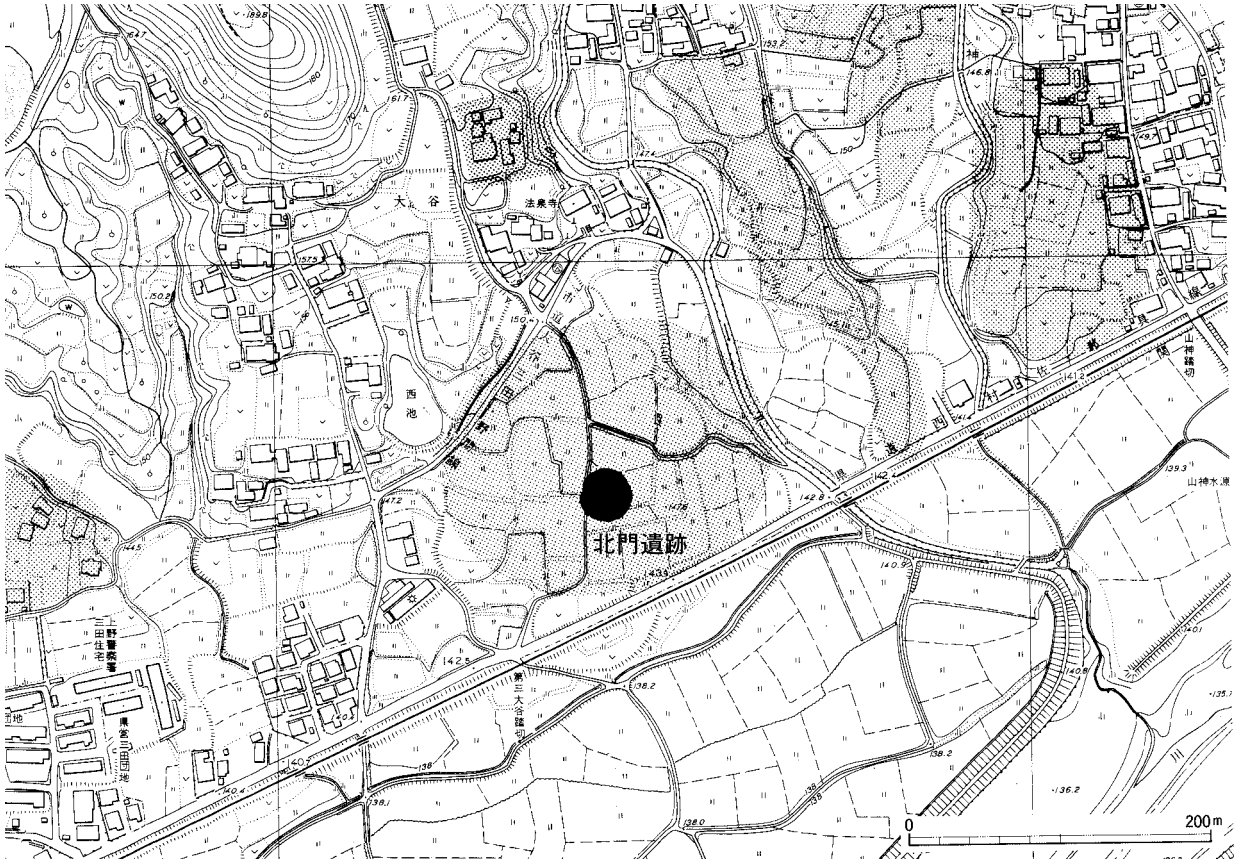
（10）『倭名類聚鈔』

（11）泉雄二『伊賀国府跡（第４次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター1992

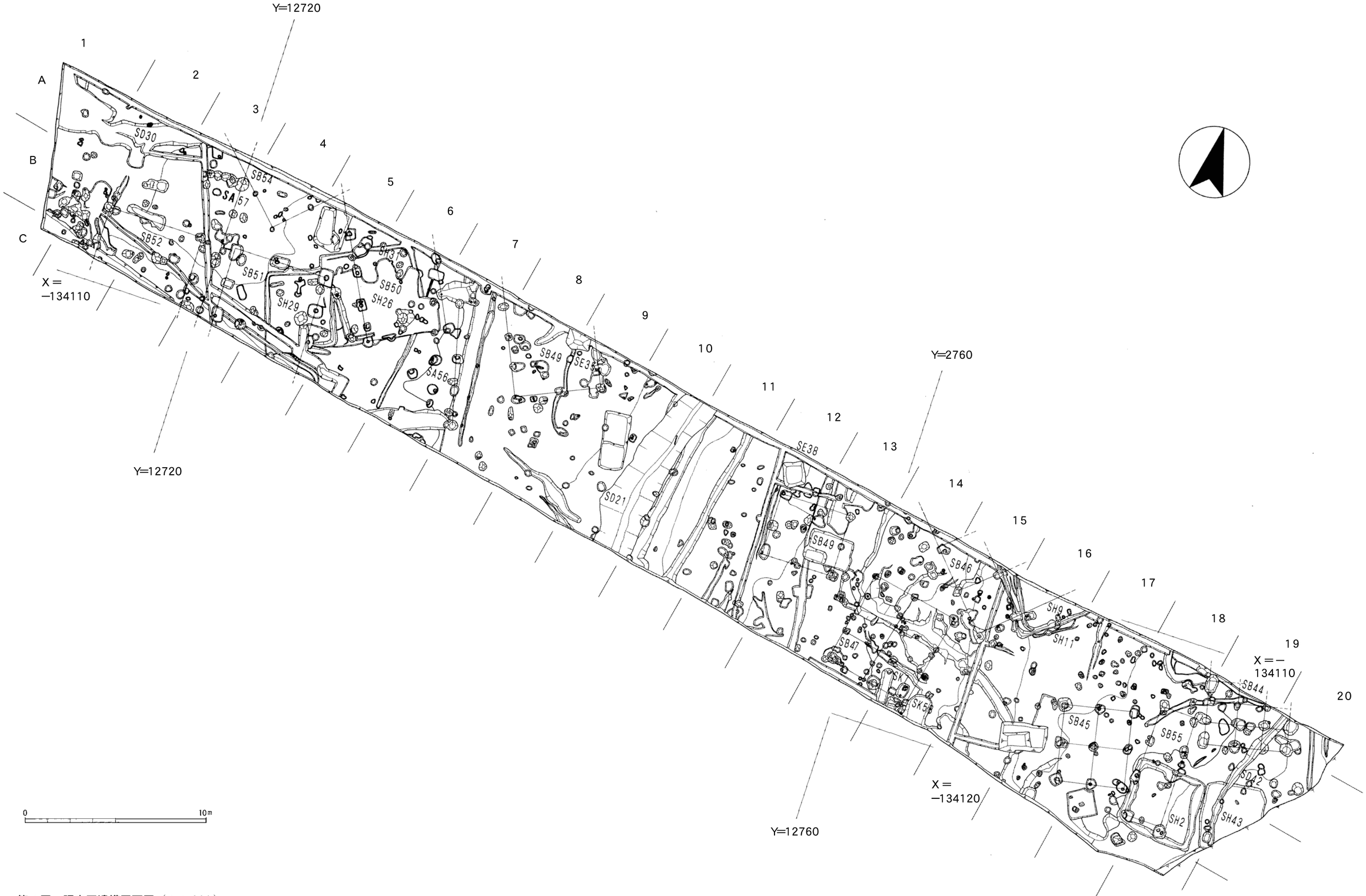
（12）（9）と同じ藤堂元甫『三国地誌』上野市立図書館復刻1763

（13）川戸達也『平成３年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告　第１分冊』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1992

（14）（9）と同じ『図説　伊賀の歴史』上巻　郷土出版社1992



第３図　遺跡地形図（１：5,000）



第４図　調査区遺構平面図（１：200）

Ⅲ　遺　構

1　層　序

調査区は、西から東に緩やかに傾斜し、調査区中央より東は傾斜がきつくなっている。そのため水田一筆ごとに西側は削平され、東側は盛土されて棚田となっている。基本層序は、地表から16cmが現在の耕作土（第１層）、その下８cmが床土（第２層）、さらに２層の旧耕作土がその下に形成され、地表から60cm程度で地山に達する。全体的には、後述の環濠以西は削平が大きく、包含層はほとんど残っていなかった。環濠以東は、東にいくにつれ残存状況が良好で、調査区東４分の１では安定した層が確認された。包含層は地表から60cm程度に形成され、もっとも残存している部分では厚さ50cm程度で多量の土器を含んでいた。その下層は基本的に明黄褐粘質土で、東にいくに従い砂質が、西にいくに従い粘性が強まっていく。検出はこの層の上面で行った。　（小倉　整）

2　古墳時代の遺構

溝３条と土坑１基を検出した。ＳＫ28は不整形の土坑で性格は不明である。また、溝２条は環豪を形成するものと思われる。その場合に併存すべき竪穴住居跡等の遺構が検出できなかった。推測の域を出ないものの、本来は当遺跡の盛行期の一つとして位置づけられる可能性がある。

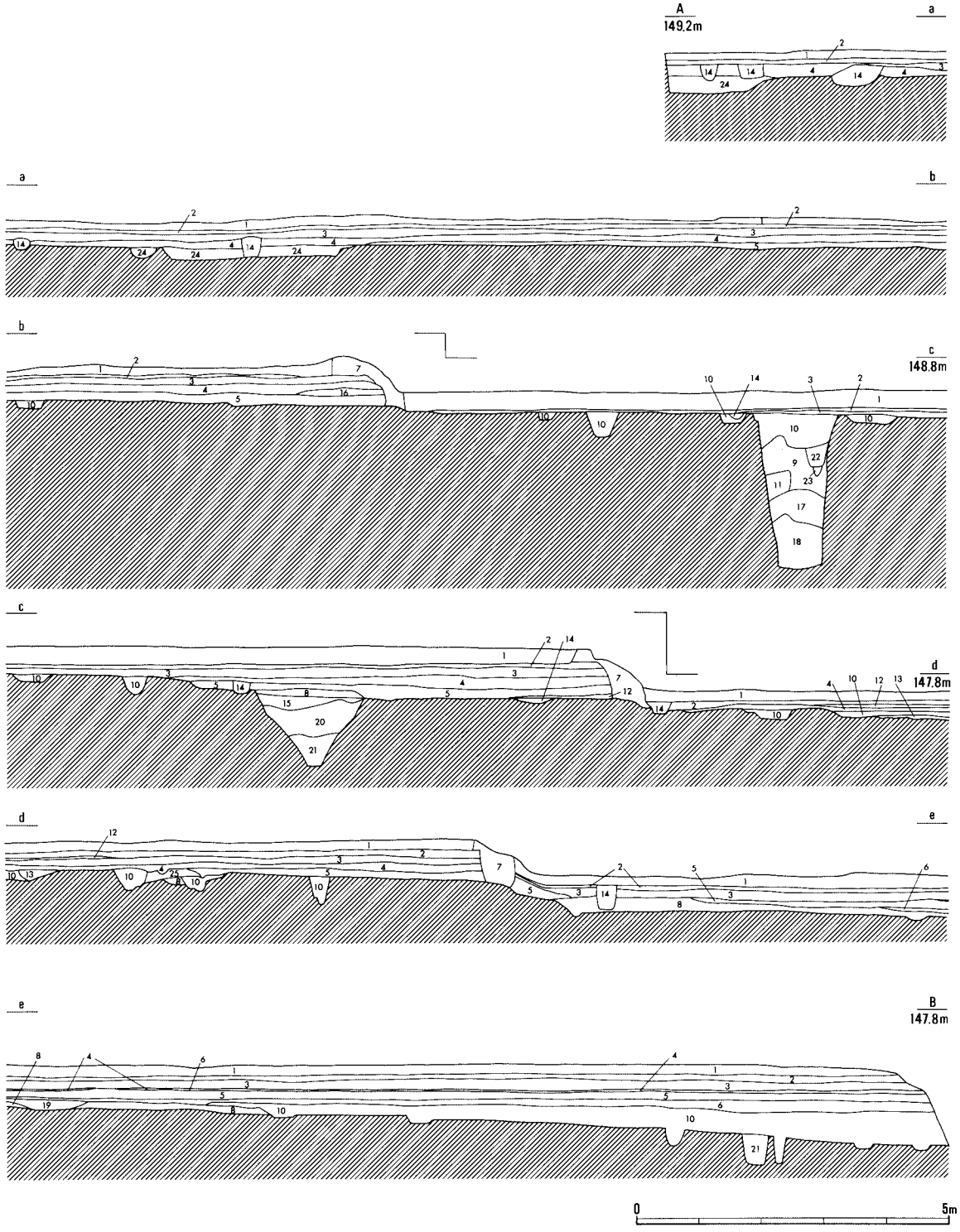
ＳＤ21　調査区中央を南北に貫く環豪と思われる溝である。幅約1.9～2.8mで、検出面からの深さは約80～125cmである。断面はV字形をしており、傾斜は約40～50度となる。溝底部の床幅は35cm内外である。溝の勾配は、若干の起伏があるもののほとんど認められなかった。

調査区北壁から南に5.5mほどの溝の底近くで、南北の溝に沿うような方向に木片を検出した。長径約50cm、短径約5cmの棒状の木片であるが、腐食が激しく、加工痕などの判断もできなかった。

また、溝内で古式土師器を中心とする土器群を検出した。溝内の南・北側で出土状況が大きく異なる。北側に、土器群の大部分が集中しており、土器片が数cmの厚さで折り重なるように一群の土器群として検出された。一方、南側では壺・高坏などの土師器類が、本来の器形を比較的よくとどめつつ、数点が横倒し状で点在しており、とりわけ南端に位置する壺（48）は、ほぼ完形であった。また、木片と思われる炭化物を伴うものも２点あった。南･北側いずれも、溝底面から約45～95cmの高さに位置しており、底面より第２層の明黄褐色粘土層とともに埋没したものである。南側は器物を意図的に置き、一方、北側では投棄されたというように、南・北側でそれぞれ異なる状況・過程で埋没したのかもしれない。しかし、これらの土器群が溝内に埋没した積極的理由を見いだすには至らなかった。

ＳＤ42　調査区東端で検出した。緩やかな曲線を呈し、両端は調査区外に続く。幅は約45cm、深さは約20～45cmを測り、勾配はほとんどない。遺構上部は削平により、失われているおそれがある。

ＳＤ30　調査区西端北壁寄りに位置する溝で、緩慢な弧を描き、両端は調査区外に続く。平面は不整形で、幅約1～2m、深さは約10～20cmである。削平・撹乱により元の形態をとどめていないと考えられるが、その形状から古墳周溝の一部である可能性がある。なお、調査区南側に隣接する地域で行われた上野市教育委員会の北門遺跡第２次調査では、古墳が検出されている。　（水谷隆広）



1. 灰色土N4／(耕作土)
2. 明褐色土7.5YR5／6(床土)
3. 灰オリーブ色土5YR6／2(旧耕作土)
4. にぶい黄橙色土10YR6／4(旧床土)
5. オリーブ黄色土5Y6／4(旧耕作土)
6. にぶい黄色土2.5Y6／3(旧床土)
7. 灰色土7／5Y6／1
8. 暗褐色土10YR3／4(包含層)
9. 13に橙色混礫粗砂7.5YR6／6混じり(SE35埋土第Ⅱ層)
10. 褐灰色土7.5YR4／1(包含層)
11. にぶい褐色7.5YR6／3(SE35埋土第Ⅱ層)
12. 灰黄色土2.5Y6／2
13. 褐灰色土10YR6／1
14. 明黄褐色混礫土(暗渠埋土)
15. 黒褐色土10YR7／6(SD21埋土第Ⅰ層)
16. にぶい黄橙色土10YR7／3
17. 黄灰色混礫粗砂7.5YR4／1(SE35埋土第Ⅲ層)
18. 灰色混礫砂7.5Y5／1(SE35埋土第Ⅳ層)
19. 暗灰黄色土2.5Y5／2
20. 明黄褐色土10YR7／6(SD21埋土第Ⅱ層)
21. 褐灰色土10YR5／1(SD21埋土第Ⅲ層)
22. 褐灰色土7.5YR5／1(SE35埋土第Ⅱ層)
23. 灰褐色土7.5YR5／2(SE35埋土第Ⅱ層)
24. 黒褐色粘質土7.5YR3／2(SD30埋土)
25. 灰黄褐色混礫土10YR6／2

第５図　調査区土層断面図（１：100）

第６図　ＳＤ21　遺物出土状況図（１：50）

3　飛鳥時代から奈良時代前半の遺構

竪穴住居８棟、掘立柱建物４棟、柱列１条、井戸２基等を検出した。竪穴住居の内、SH2・26・29・31・43の５棟は飛鳥時代、ＳＨ５・９・11の３棟は、奈良時代と考えられる。竪穴住居のほとんどが、周溝だけの検出ということもあり、の時期決定については、疑問も残る。

ＳＨ２　調査区東側南部で検出した。一辺４ｍの方形を呈している。周溝は、幅50cmで、深さ5cm程度である。北側中央部に焼土が検出された。竈は見つかっていないが、この部分にあったのではないかと思われる。主柱穴は、検出できなかった。

周溝西側中央部から土師器の小形甕が、出土している。口縁部は欠損しているが、底部は完形であるので、これは削平時に削られたのではなかと考えられる。正立状態で周溝の底に接して出土している。周溝北側の東から1mの位置でも、土師器の小形の甕がやや東に傾き同様な状態で出土している。この甕は、口縁が４分の１残存し、底部はほぼ完形である。どちらも正立して出土していることから、竪穴住居の使用時に置かれていたのではないかと考えられる。しかし、周溝の上であるので、竪穴が埋められるときに埋納されたのではないかと考えることもできる。

ＳＨ５　調査区東側北端で検出した。北側は調査区外でごく一部の検出のため全体の形態は不明であるが、方形を呈するものと思われる。ＳＨ９と並んで東側に位置することと周溝と思われる幅40cmの溝が検出されたことから竪穴住居と考えられるが、疑問も多い。

ＳＨ９　調査区東側北端でＳＨ５の西で検出した。ＳＨ11と重複している。北側は調査区外のため、全体の形態は不明であるが、一辺４ｍ以上の方形を呈するものと推測する。周溝は、幅20～50cm、深さ10cm程度である。主柱穴、焼土ともに検出できなかった。須恵器の蓋が出土している。

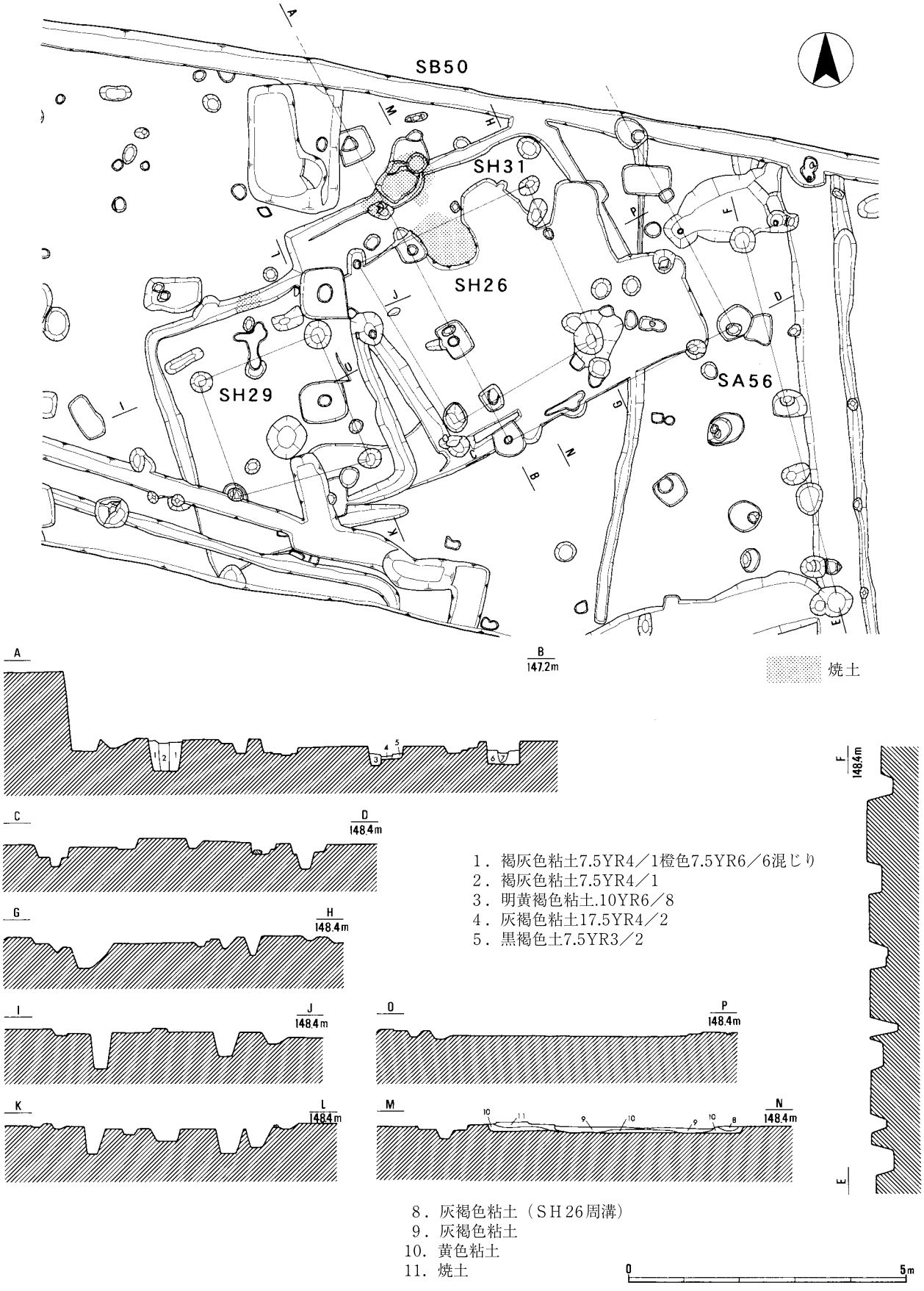
ＳＨ11　調査区東側北端でＳＨ９と重複して検出した。北側の部分が調査区外であることやＳＨ11との重複のため全体の形態は不明であるが、方形を呈するものと考えられる。周溝は、幅15～25cm、深さ10cm未満である。南西側の周溝と南東側の周溝とがうまく連続しないことから、一つの竪穴の周溝とすることに疑問が残る。もう一棟建て替えがされていた、と考えることもできるかもしれない。ＳＨ９とＳH11の前後関係は、精査を重ねたが、はっきりさせることができなかった。

ＳＨ26　調査区西側中央部で検出した。ＳH31を１ｍほど小さくして建て替えたものと思われる。一辺４ｍの方形を呈していたと考えられるが、北東側が他の遺構と重複しており東端部分は検出できなかった。西側と南側に周溝と思われる溝を検出しており、幅35～40cm、深さ10cm程度の周溝がめぐっていたようだ。北部の中央に竈があったかと思われる焼土が検出された。しかし、竈と主柱穴は検出できなかった。土師器の長胴甕、須恵器の蓋・高杯・甑が出土しているが、いずれも小片である。

ＳＨ29　調査区西側中央部、SH26の西側で検出した。長辺4.5m、短辺４ｍの長方形を呈している。周溝は、幅30cm、深さ10cm程度である。主柱穴は、4基検出した。掘形は、直径40～50cmの不整円形を呈している。北側中央部に焼土を検出しているが、竈は検出できなかった。暗文のある土師器皿（96）が北側周溝から出土している。ＳH26との前後関係は明らかでない。

ＳＨ31　調査区西側中央部で検出した。一辺５ｍの方形を呈していると考えられるが、南側のSH26との重複や東側の他の遺構との重複で明らかでない。周溝は、幅25cmで、深さ5cm程度である。主柱穴は、4基検出した。掘形は、30～50cmの不整円形で、深さも一様でないことから、疑問も残る。北側に竈跡と思われる焼土が検出されている。竪穴の大きさが大型であるため、SH26より古い竪穴住居であると考えられる。北側の周溝からは、土師器椀（90・91）、土師器小型甕（92）須恵器蓋（93）が出土している。北側周溝からの土器の出土が多い。しかし、いずれも破片であったことから、埋納ではないと考える。

ＳＨ43　調査区東端で検出した。南側は、調査区外にあたるため、全体の形態は不明である。一辺3.5ｍの方形を呈していたのではないかと考えられる。周溝や主柱穴・竈は検出できなかった。



第7図　SH26・29・31・SB50・SH56　実測図（1：100）

西壁に沿って長胴甕を10～25cmの方形に割ったものが甕の内面を下にして南北に細長く並べられており、床面との間に隙間をあたえている。ほぼ20cm幅で長胴甕片を置き、幅がたりない場合は、二片を組み合わせて下に隙間ができるように並べられていた。したがって、周溝が検出されていないものの、暗渠のような役目をしていたのではないかと想定される。これらのものは接合の結果2個体の長胴甕（86・87）に復元できた。長胴甕をわざわざこれらの大きさに割って並べたようである。　　（五十棲孝子）

ＳＢ44　調査区北端の検出のため全体の規模は定かではないが、棟方向はＮ12°Ｗで、桁行３間×梁行3間以上の東西棟と推定した。桁行は東から1.8m＋1.5m＋1.5mの不等間、梁行が1.2mの等間の総柱建物である。柱掘形は直径60～80cmの方形または円形を呈し、大きさが一様ではないが深さは検出面から40～80cm程度としっかりとしている。

ＳＢ45　調査区東部で検出した2間×2間の南北棟（Ｎ11°Ｗ）で、桁行2.1ｍ梁行1.95ｍのほぼ等間の総柱建物である。柱掘形は形の乱れたものもあるが、もとは1辺が60～80ｃｍの方形を呈するものと考えられる。その多くで柱痕跡が検出され、特に西南隅の柱穴や東側柱列の柱穴３基にはしっかりとした柱痕跡が残存していた。南側の妻柱には柱の残存もあり、直径はほぼ20ｃｍであった。また中央の柱穴は1辺が50cm程度とやや小ぶりで直径40cmを超える根石も検出された。位置から束柱と考えられ、一定の重量に耐えられるその構造から倉庫であった可能性がある。他の柱穴からは根石の検出はなく、断面から10cm程度の柱の不等沈下が認められた。

（小倉　整）

ＳＢ49　調査区中央部西寄りで検出した。3間以上×2間の南北棟であり、棟方向はN23°Wである。北端部は調査区外になるため全体の規模は確定できない。柱間は、桁行1.65m、梁行2.4mで、それぞれ等間の側柱建物である。検出できた堀形は、約30cm～70cmの楕円形や円形を呈する。柱穴の検出面からの深さは、妻柱が17cmと最も浅く、その他のものは約30cm～50cmである。確認できた柱痕跡は直径約15cm～30cmであった。棟方向が、約3.6m西に位置するSB50とほぼ方位を揃える。このことにより、SB49・SB50は同時存在したものとして考えたい。　（水谷隆広）

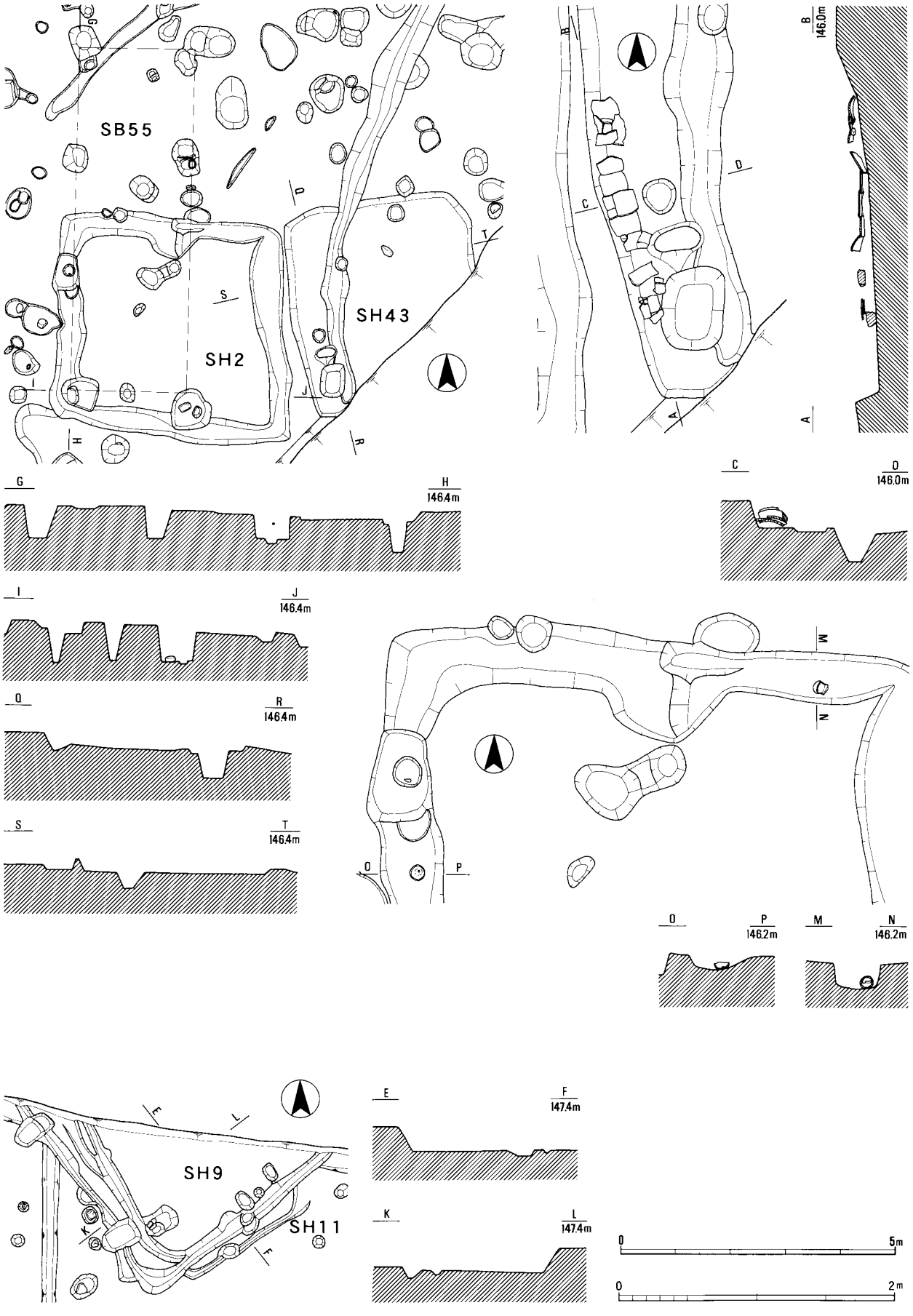
ＳＢ50　調査区西側で検出したSH26・31と重複して検出したことと、北端部は調査区外のため全体の規模は不明である。

ＳＨ26の焼土除去後に1基の柱穴が検出されたことから、この掘立柱建物がＳＨ26より先行することは明らかである。

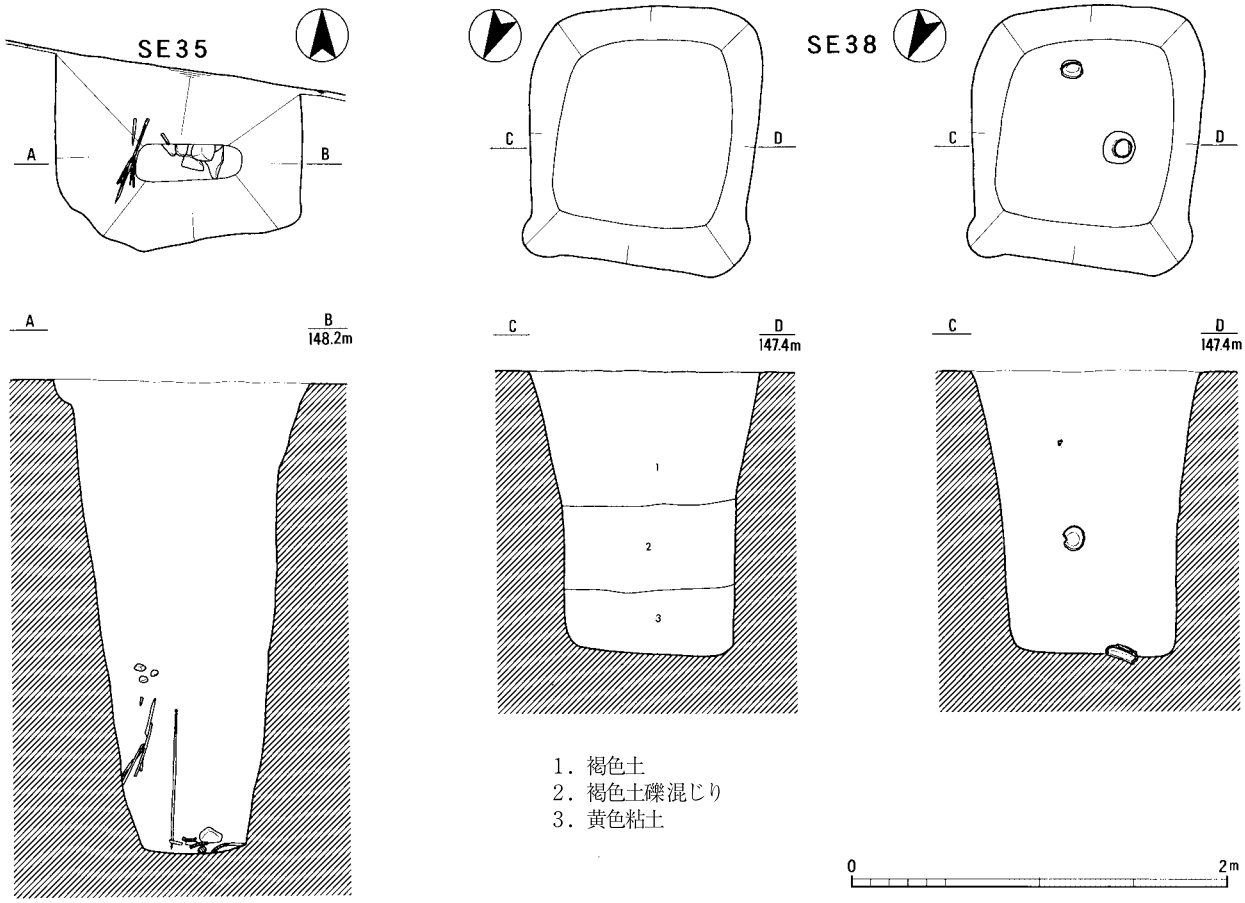
桁行４間以上×梁行２間の南北棟である。棟方向は、Ｎ27°Ｗで、柱間は、桁行2.1ｍ＋1.8ｍ＋2.1ｍで不等間である。梁行は4.5mであるが、梁行南妻柱は検出できなかったので柱間は不明である。柱掘形は、50cm～75cmの長方形を呈するものや円形に近いもので、不整形である。柱痕跡の直径は25cmである。西側桁行では比較的よく柱痕跡が残存しており、抜き取り痕も２基残っている。東側北端の柱穴には柱が残存していた。しかし、腐食が激しく、直径等は不明である。

ＳＡ56　ＳＢ50の東側で4間分を検出した柱列である。柱間は1.5m＋1.5m＋1.8m＋1.8mである。柱掘形は、直径50ｃｍの円形を呈するものと考えられるが不整形のものが多く、柱列とするに疑問もある。土師器長胴甕、須恵器蓋が出土しており、8世紀初頭のものと考えられる。

ＳＥ35　調査区中央部西寄りの北壁に接して検出した井戸である。平面形は東西1.2m、南北は70～80cmで北壁にいたる。北側部分は調査区外のために確認できていない。調査区外北側を含めた遺構全体の平面形は、ほぼ方形となると考えられる。深さは、検出面より2.5ｍを測る。埋土は4層から成る。最上部の第1層は褐灰色土、第2層は褐灰色に橙色がまじる混礫粗砂、第3層は黄灰色の混礫粗砂、最下層の第4層は灰色の混礫砂となる。底面から約50～80cmの高さで板状木片が３点、それぞれ長辺を横にして北壁断面にいたり調査区外に続く。また、長辺約80cmの板状木片が縦状に底面から北壁に接して検出された。いずれの板状木片も損傷、腐食が激しく加工痕も確認できず、井戸の部材として使用されていたと断定するにはいたらなかった。底面より拳大の石数個とともに土師器の杯身（79）や甕（80）と須恵器の甕（81）が出土した。いずれも破片であり、埋納とは考えにくい。



第8図　SH2・SH9・SH11・SH43・SB55実測図（1：100、1：40）



第９図　ＳＥ35・ＳＥ38　実測図（１：40）

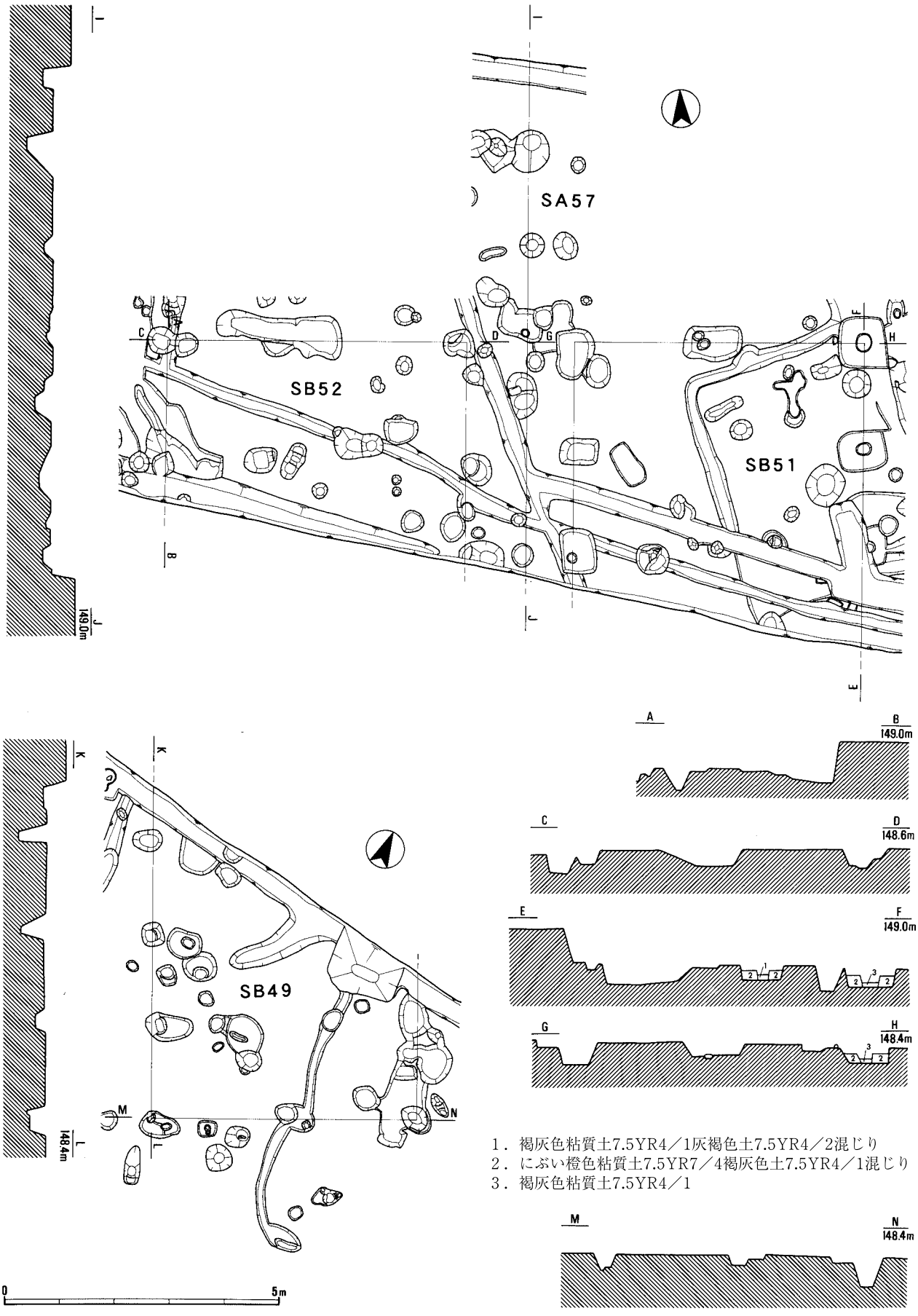
ＳＥ38　調査区の中央部、SB48の北側で検出した井戸である。掘形は、南北2.8m東西2.2mの長方形を呈し、深さは検出面から150cmを測る。壁は、検出面下60cmで垂直に底部にいたる。この部分の平面形は、90cmの方形を呈し、これが、井筒の規模を表すものと考えられる。埋土は３層に分かれる。最上部の第１層は褐色土、第２層が褐色土礫混じる、第３層は黄色粘土である。底部に接して、完形の須恵器の鉢が倒立した状態で、検出面から90cm下の第2層から須恵器の杯がほぼ完形で、それぞれ出土している。共に完形に近い状態で出土していることから埋納された可能性もある。　（五十棲孝子）

溝　ＳＤ13は、調査区の東部分、ＳＤ12の南側で検出した。幅3m、深さ20cm程の溝である。南端は調査区外のため確認できていない。自然石が多数あり、流れ込んだものと思われる。ＳＤ12と北側で交わっているが、出土遺物から飛鳥時代に属すると考えられるので、SD12との関連はないと思われる。

調査区を南北に延びている溝ＳＤ15・16・17・18を中央部で検出した。SD16は南側3mの長さで消滅するが、他の溝は両端が調査区外へ続く。これらの溝は、2～5mの幅で並んでいる。溝の幅は30～50cmで、深さは5～10cmである。これらの西に15m離れた所では、ＳＤ24を検出している。

調査区中央部西寄りの位置でＳＤ20を検出した。SE35に北端を切られ、緩く蛇行しつつ北から南にのび、約2mで東方向に湾曲するような形で収束する。幅は６～８ｃｍ、深さは検出面から２ｃｍ程である。深さがわずかなことから、遺構上部が削平されて本来の形状をとどめていない可能性もある。SE35と北端が接することによりＳＥ35に伴う排水溝として使用されていたとも考えられる。しかし、直線的ではないその形状から、自然流水路の可能性も残る。

SD36は調査区中央部で検出した。調査区北壁から東西約60cm、南北は約2mで消滅する。平面形は不整形をしており、深さは約10～15cmと浅く、数基のピットと重なって検出された。その形状から、溝とするには疑問が残る。　（水谷隆広）



第10図　ＳＢ49・52・ＳＡ57　実測図（1：100）

調査区東端では、SD40とSD41が並んだ状態で検出された。北端は調査区外へ続き、南端は調査区の終わりのところで消滅している。幅20cm、深さ5～10cmである。　（五十棲孝子）

土坑　ＳＫ１は、調査区東南部で検出した、一辺75㎝の方形の土坑である。検出面からの深さは全体的に30㎝程度で、南部分にやや深みを増す。須恵器蓋・杯片等が出土しているが、埋納されたものではない。当初から、有機質の埋土の方形遺構を明らかに検出できたものの、掘削過程において、無機質の、地山と酷似する埋土がその周りに広がっていることがわかり、掘削範囲が広がることになった。この経緯と、中央部からは腐食した板材が、西部分角からも角材片が直立して出土していることから考えて、井戸とその堀であった可能性が高い。北角をSB45の柱穴に切られていることから、これに先行すると考えられる。　（野田有美）

調査区中央部東寄りの南壁に接する位置でSK27を検出した。その検出位置から全体像は不明であるが、調査区内では南北160cm東西120～130cmの方形を呈する。土層断面から調査区南壁以南でも同じ幅で遺構が伸びていくと推測されるため、全体像としてはやや細長い方形を呈する可能性もある。深さは25cm程度であるが検出面が傾斜しているために東にいくにしたがい浅くなっている。土坑の中央西寄りから完形の粗製椀が底から15cmほど浮いた状態で出土した。　（小倉　整）

それ以外の土坑は７基検出している。これらは、幅80～120cmの不整円形で、深さは20～50cmである。不定形な土坑であってその性格は不明である。

（五十棲孝子）

4　平安時代前期の遺構

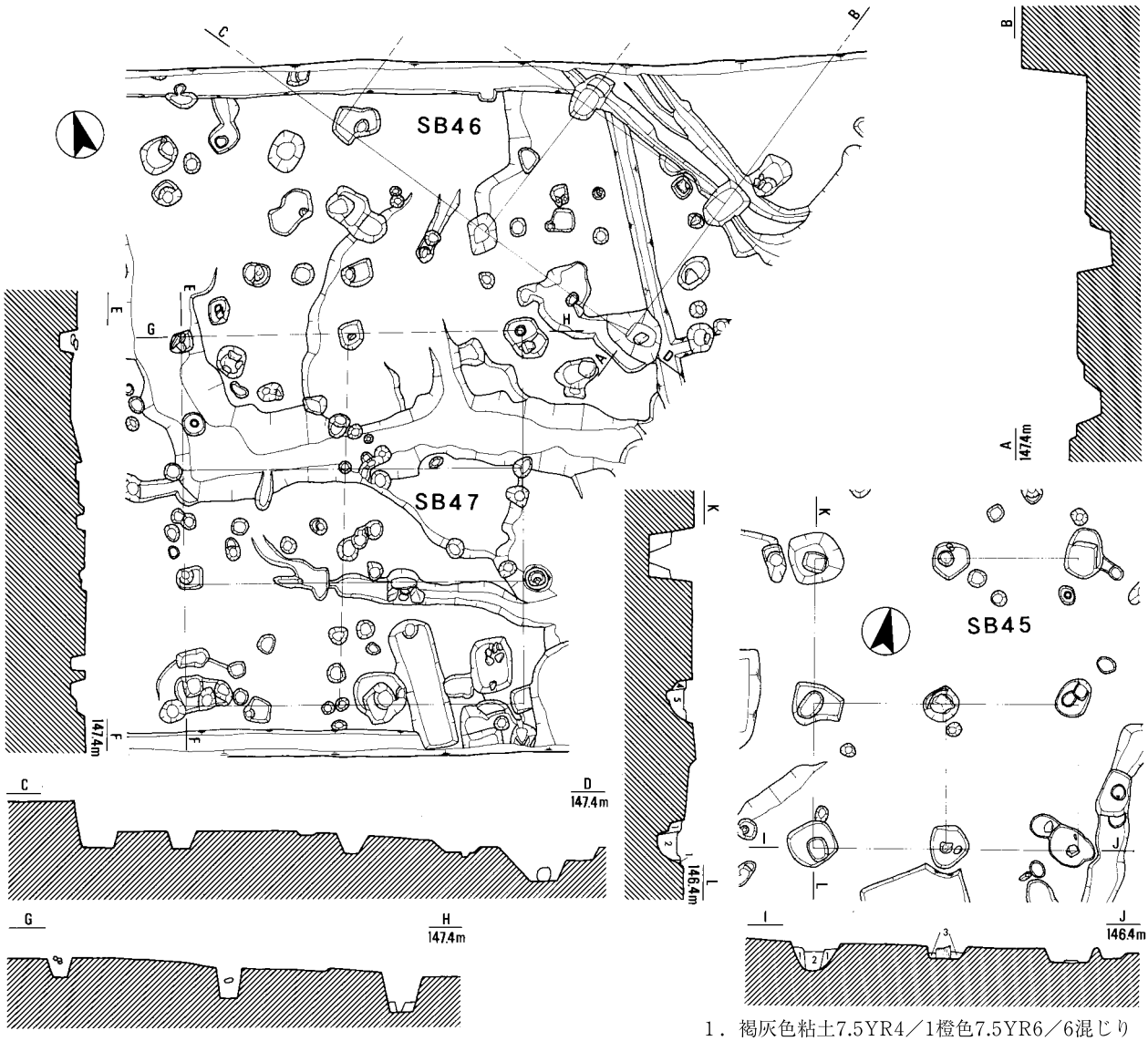
掘立柱建物６棟と柱列１条、溝１条及び多数の土師器片などの遺物を伴う流水路等を検出した。特に掘立柱建物4棟、柱列1条がともに方位を揃えており注目される。南北に狭隘な調査区のため即断はできないが、少なくとも調査区に限る限り、本遺跡の盛行期の一つになると考えられる。　（水谷隆広）

ＳＢ46　調査区の北端で検出したために全体の規模は不明であるが、桁行２間以上×梁行１間以上、棟方向N41°Wの東西棟と推定した。桁行は2.55mの等間、梁行は１間分しか検出できなかったが、２間以上と推定した。掘形は乱れたものもあるがほぼ1辺が40～50cmの長方形を呈する。深さも検出面から30cm程度あり、その位置と並びから調査区外に続く総柱建物と仮定した。ただ、側柱１基の深さが他の柱穴よりも浅いことから１間×１間の建物の可能性もある。また南隅の1基から石が検出されている。根石・根巻き石のいずれかの可能性があるが出土状況からは判断できなかった。

ＳＢ48　２間×２間の東西棟で棟方向はほぼ真西の方向となる。桁行2.1m、梁行1.8mのほぼ等間の側柱建物であると思われる。掘形は乱れたものもあるが1辺50～70cmの方形を呈し、深さも概ね揃っている。南東隅の１基からは拳大の石が検出され、状況から根巻き石と考えられる。直径20cm程度の柱痕跡を認められる例もあった。時期決定の根拠に乏しいが、ＳＢ51、ＳＢ52の２棟と方向が揃うためこの時期と推定した。　（小倉　整）

ＳＢ51　調査区西側で検出したが、南端部は調査区外になるため、全体の規模は不明である。２間以上×２間の南北棟と仮定した。柱間は、東側桁行が1.95m＋1.8mの不等間、西側桁行が1.95mの等間、梁行が2.85m＋2.4mの不等間となるが、側柱建物であると考えられる。方位は、棟方向がほぼ南北に沿っている。柱掘形は約60cm～95cmの長方形ないしは方形を呈する。検出できた柱痕跡の直径は約20～25cmでほぼ揃う。柱穴の検出面からの深さは約20～40cmであった。特に北側妻柱の柱痕跡1基がやや浅いが、根石として用いられたと思われる15cmほどの石が検出されている。

ＳＢ52　調査区西側で検出した。調査区南壁以南に遺構が続くと考えられるため、全体の規模は確定できないが、２間以上×２間の南北棟として仮定した。棟方向がほぼ南北に沿う側柱建物であると考えられる。柱間は、桁行が2.4m、梁行が2.7mの等間となる。検出できた柱掘形は、やや不整形のものもあるが、直径約40～55cmの円形ないしは楕円形を呈す



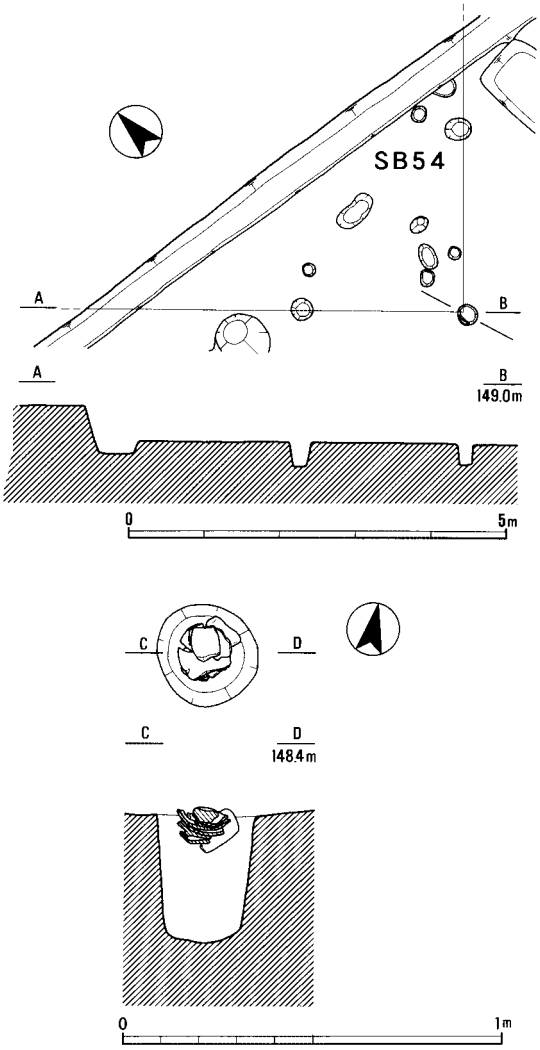
第11図　ＳＢ44～ＳＢ48　実測図（1：100）

る。東側に近接するSA57やSB51と、調査区中央より西側に位置するSB48やSB55とともに方位に合わせて配され、梁行がSB51と同一線上に並んでいる。しかし、隣接するSB51と柱掘形の形状・大きさが異なり、柱痕跡も判然としなかった。また、検出面からの柱穴の深さが15～45cmと差がある上に、北面妻柱が検出できず、疑問の余地もあることを指摘しておく。（水谷隆広）

ＳＢ54　調査区北端で検出されたため、全体の規模は不明である。掘形は30～40cmの円形を呈し、いずれも30cm程度の深さであった。柱穴のの検出がわずか３基に過ぎないために棟方向も推定できず、建物とするには疑問が残る。ここでは、３基の柱穴から推測される柱間が2.1mと2.4mで直交することや尺法の道理に無理のないこと、それぞれの掘形・深さが一様で揃っていることを考え併せ、建物の可能性を指摘しておく。

建物と仮定した場合、南東隅にあたる柱穴で５点の土器が正立で重ねられ出土した。上から重ねられた順に、土師器杯（107）、土師器杯（106）、黒色土器A類椀（110）、黒色土器B類椀（108）、黒色土器A類椀（109）で、最上部の土師器杯（107）の直上に直径12cm程度の石が置かれた状態で検出した。5点のうち土師器の杯2点（106･107）は完形で出土したが、黒色土器3点はいずれも完形ではなかった。３枚目に重ねられた黒色土器A類椀は高台がほとんど欠損し、口縁部も約４分の３の欠損、全体としては２分の１程度の残存状況である。上から４枚目に重ねられた黒色土器B類椀は底部を残して口縁部を打ち掻いたような状態で、底部は高台も含め完全な形であったが、最も下に重ねられた黒色土器A類椀は底部をほとんど欠き、口縁部も２分の１程度の欠損であった。この黒色土器椀３点が底部をもしくは底部を残して打ち掻いたような状態であることが、ほぼ完形の土師器２点を含む５点がより密着する要因となっている。このことから５点を安定して重ねる目的で黒色土器３点を打ち掻いて埋納した可能性や、土師器２点を埋納時に、欠損した黒色土器３点を台座の目的で据えた可能性が考えられる。

（小倉　整）



第12図　ＳＢ54　実測図（１：100）
遺物出土状況図（１：20）

ＳＢ55　調査区東側で検出した、ほぼ真北に桁行の長い３間×１間の南北棟である。柱間は、桁行・梁行とも2.1mの等間である。柱掘形は、40～70cmの不整円形を呈している。柱穴の深さは、検出面より40～60cm程度でほぼそろっているが、東側の柱穴が１基検出できなかった。出土遺物は、飛鳥時代から奈良時代に属するものばかりであるが、SB51･52などと揃うことから、平安時代前期に属するものと考えた。（五十棲孝子）

ＳＡ57　調査区西側において検出した5間分の柱列である。柱間は120～180cmの不等間であり、南北の調査区外に続く可能性もある。柱掘形はやや不整形になるものもあるが、おおむね直径40～70cmの円形となる。検出面からの深さは約10～45cmである。柱列は、SB51･SB52を東西に分かつ位置にある。SA51の西側桁行までは85cmを測り、SA52東側桁

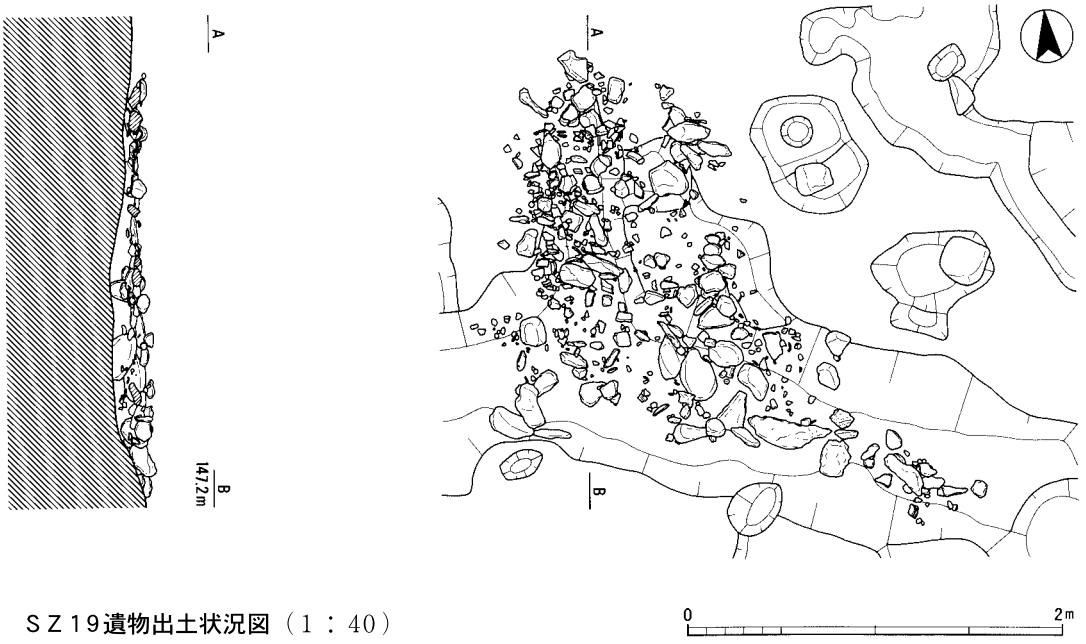
行までは1.1mとなる。これら相互の位置関係から、SA51あるいはSA52に付随する柱列であることが考えられる。また、柱列の方向がほぼ南北になることから、SA57と同様の方位のSB48・51・52・55は一連の併存する遺構と考えたい。　（水谷隆広）

ＳＫ59　調査区中央部やや西寄りで検出した柱穴状の土坑であるが、建物としてはまとまらなかった。直径30～40cmの楕円形を呈し、深さは20cmで安定しており、中央の柱穴から粗製椀が底から15cm程浮き上がった状態で出土した。土器はほぼ完形で正立状態であることから埋納であると考えられる。

（小倉　整）

ＳＺ19　調査区の中央西側で遺物群を検出した。検出当初、SD4・10・12は異なる遺構として扱ったが、精査後にこれら遺構群は連続する一連の自然流路と判断したので、ここで一括して述べることとする。SD10は調査区北壁より発し、南方に下った地点で東に向きを変える。同様に南方に下がるSD12と合流し、幅を狭めた後にSD4として南東に緩い弧を描きつつ消滅する。検出した遺構からの深さは5～20cmで、北壁から南東端に至る高低差は55cmほどになる。SD10とSD12の合流域で、小石から人頭大ほどの礫石とともに多数の遺物を検出した。ほぼ流路に沿って位置し、南東に下るにしたがい疎となる。遺物群は土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・土錘などであるが、残存度は低く、ほとんどは小片であった。その多くは土師器で、器種は杯や皿が多数を占める。なお、礫石群は特に人為的に配された様相を呈しない。削平によって遺構本来の形状を如実に表していないと思われものの、流路のよどみに礫石とともに破損した器物が投棄された可能性が考えられる。

ＳＤ22　調査区中央西寄りで検出した幅が1mほどの溝である。調査区南壁から北東に約3.5mの地点で消滅する。約5～15cmの深さを測るが、舌状を呈する平面形から、削平により遺構本来の形態をとどめていない可能性が高い。　（水谷隆広）



第13図　ＳＺ19遺物出土状況図（１：40）

5　平安時代後期の遺構

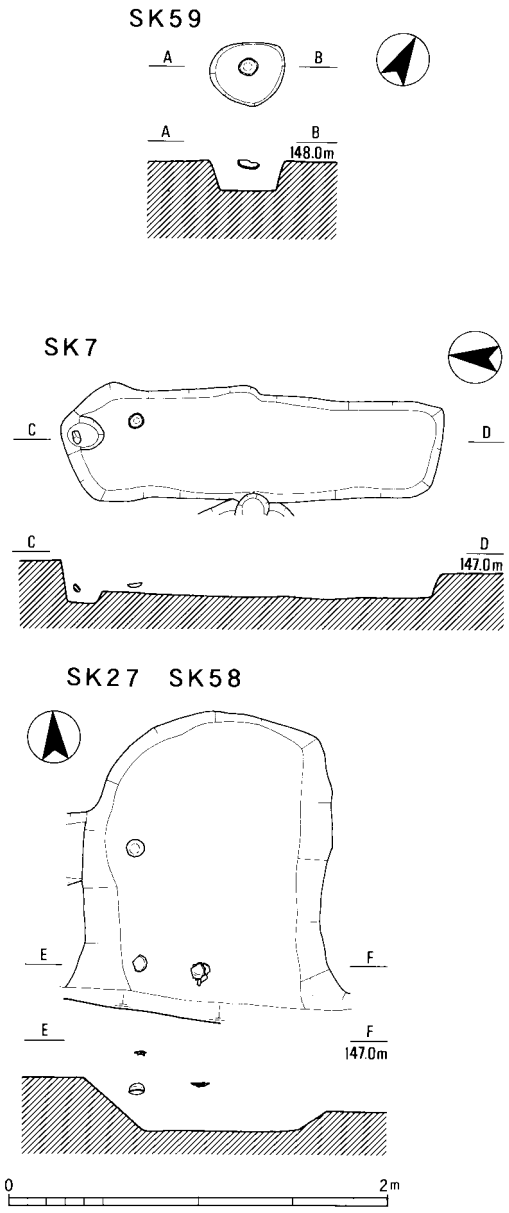
掘立柱建物１棟と墓と考えられる土坑２基を検出した。その他、SK14とSD23も同時期の遺構と考えられるのでここで述べておく。

SK14は、調査区東寄りで検出された不定形な土坑であってその性格は不明である。黒色土器Ａ類椀が出土している。SD23は、調査区中央部南端で検出された。黒色土器Ｂ類が出土しているが、小片のためにその器種は不明である。

ＳＢ47　調査区中央部東寄りで検出した掘立柱建物で、3間×2間の南北棟（N12°E）と考えられる。しかし、桁行柱間が南から1.8m＋1.8m＋1.95mと不揃いで、柱通りもわるく、掘形・深さも一様ではないため建物とするには疑問も多い。ただ多数のピットから複数もしくは単数の石が検出され、その状況から根巻き石と考えられることや梁行柱間がほぼ2.4mの等間であることから建物の可能性を指摘しておく。その場合、柱穴からの出土遺物は黒色土器A類などがあるが、建物全体の形状からこの時期に取り扱うこととした。

ＳＫ7　調査区中央部東寄りの南壁に接する位置で検出した、南北200cm東西60～70cmの長方形を呈し、深さは20cm程の土坑である。北端に直径15～20cmの楕円形を呈した5cm程度の落ち込みが見られるが、状況から見て別遺構が切りあっているものと考えられる。土坑底から北側東壁に沿うように土師器皿（122）と瓦器皿（123）それぞれ1点が正立状態で並んで出土した。土器は双方ともほぼ完形で、埋納されたものと考えられる。土坑の形や土器出土状況から中世墓と推定され、南北方向に200cmもの大きさを持つことから伸展葬の可能性が高い。土器が土坑底から浮いた状態で出土していることから、木棺上に土器を埋納したと推定される。

ＳＫ58　ＳＫ27調査中、完形の粗製椀出土位置から50～60cmほど南の調査区南壁に沿って2点の土器が出土した。台付き皿（127）と黒色土器A類（126）がそれぞれ1点ずつ正立状態での検出であった。この2点が前出のSK27出土の椀からかなりの時期差を持った土器であり、かつ検出レベルがＳＫ27の底から30cm近くも上面であることから、SK27内部に別遺構が切りあって存在していた可能性が考えられる。検出時、台付き皿の出土状況が埋納された様相を呈していたことから精査を重ねたが埋土が酷似していたため重複関係を確認できなかった。ただ以上の状況を鑑みてこの時期の土坑ＳＫ58が存在すると仮定した。　（小倉　整）



第14図　ＳＫ59・ＳＫ7・ＳＫ27・ＳＫ58遺物出土状況図（１：40）

Ⅳ　遺　物

遺物編の構成は、まず遺物を遺構出土遺物と包含層出土遺物とに分類し、つぎに遺構出土遺物のうち一括性の高いSZ19出土遺物を除いたものを時代別に記述した。時代区分は古墳時代初頭、飛鳥～奈良時代、平安時代前期、平安時代後期の4時代とした。これは、遺物によって時期決定された遺構の時代区分と対応する。

1　古墳時代初頭の遺物（第15～19図）

古墳時代の遺物は、ほとんどすべてが環濠SD21出土であり、１点の石包丁を除いてすべて古式土師器である。遺物量も豊富で残存度も高いため良好な資料と言える。

Ａ　ＳＤ21出土遺物（第15～19図）

壺（１～１０）　　１～11は壺で、１～3と5～7は加飾されている。９～11は壺の底部である。

１は二重口縁壺で、口縁端部には等間隔に竹管文を施した円形浮文が貼付されている。外面に、同一原体と見られる板状工具によって直線文と波状文・刺突文が頸部から施され、頸部には突帯が巡る。２の口縁部には、波状文の上に竹管文を施した円形浮文が３個５対貼付されている。頸部には刺突が施されている。３は頸部に突帯が貼り付けられ、以下には櫛描横線文が施される。４は、内外全面にハケメを残す。体部外面のハケメは深く、体部内面はハケメの後にヘラケズリされている。５は口縁端面に櫛描横線文が巡り、頸部に櫛描横線文、体上部に波状文が施される。６・７は、頸部に突帯が貼付された後に刻目が施される。６は、体上部上半に櫛描横線文と連孤状の波状線文や櫛描横線文が施文され、さらに刺突列がなされている。８は口縁の内弯するいわゆる瓢壺で、頸部に刻目のある突帯が巡る。9～11は壺底部であるが、摩滅が激しく調整は不明確である。11にのみ、外面ハケメと内面の工具によるナデが確認できる。

高坏（12～19・25～30）　１２の杯部内面は、横方向と縦方向のヘラミガキで仕上げられている。脚部には３方向の円形透孔が１段見られ、縦方向のヘラミガキを残す。13は脚部が大きく外弯して、杯部上半分が欠損するが、脚部内面を除いていずれも縦方向のヘラミガキで仕上げられ、脚柱状部に櫛描横線文を施す。14は脚部にわずかに柱状部分の名残をとどめ、杯部も緩やかな膨らみを残している。15は直線的な器形を呈し、短脚で加飾も見られない。脚部内面を除いて、全面縦方向のヘラミガキで仕上げられている。

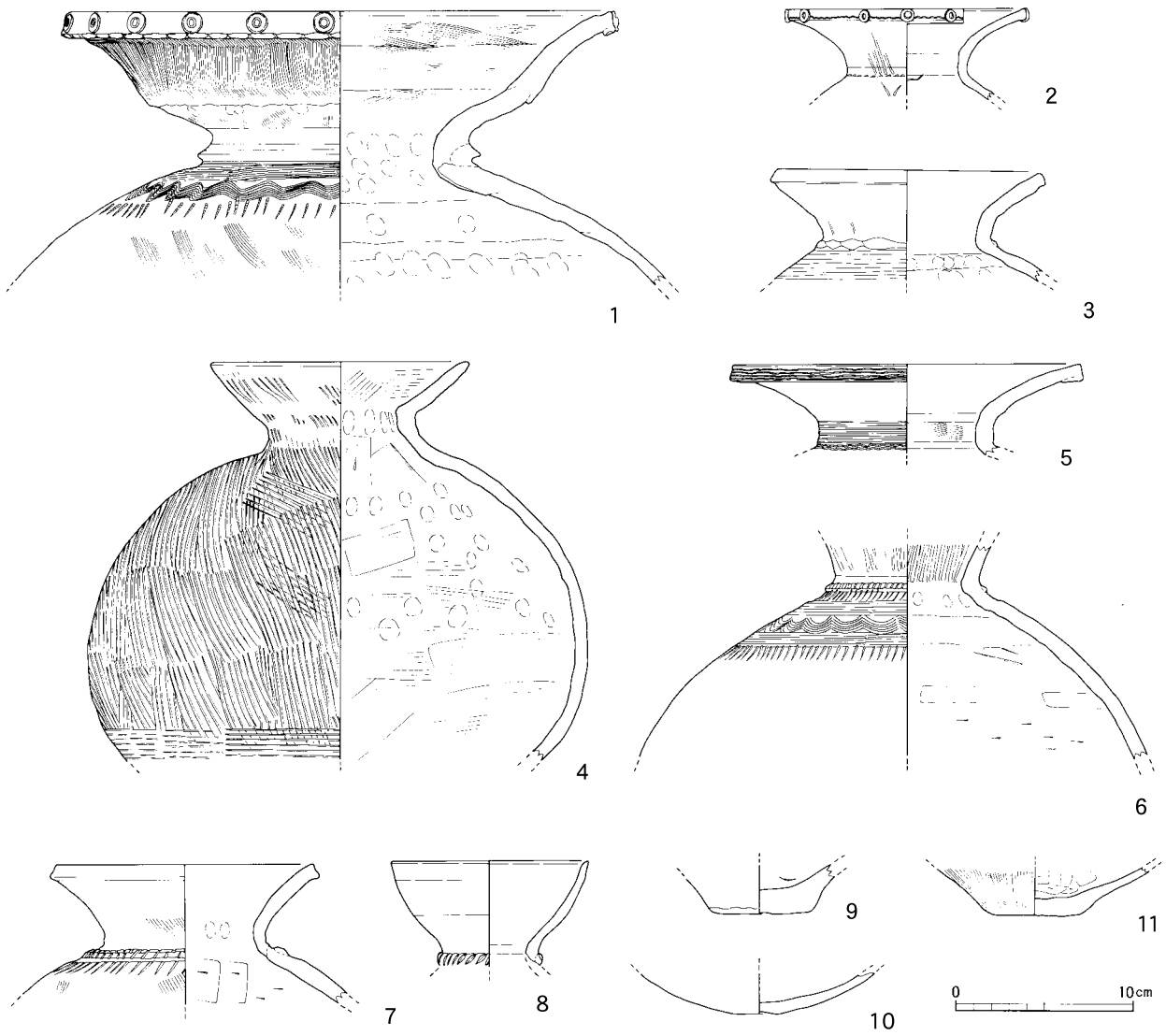
１６～19は杯部のみ残存である。16～18は、内外面ともに縦方向のヘラミガキで仕上げられている。19のみ摩滅が激しく、調整不明確ながら口縁部外面にハケメの痕跡が見られる。

２５～30は高杯脚部で、いずれも3方向透孔があり、25のみ2段、他は1段である。26･28には柱状部に櫛目があり、外面ヘラミガキで仕上げられている。２９も器形的には前2点に近いが、柱状部に櫛目はなく、外面はハケ調整の後にヘラミガキされている。30は小型で直線的な短脚で、摩滅が激しく調整は不明確であった。

器台（20～24）　　２０～23は3方向に透孔があり、20～22は外面が縦方向のヘラミガキで仕上げられている。23は脚部が欠損していて、内外面ともハケ調整されていた。24は脚部で内外面にハケメを残す。他の個体と異なり透孔はなく、直線的な脚である。

「く」字状口縁甕（31～43）　　３１～40は「く」の字状に口縁が外反する甕である。40はタタキ甕、41～43は壺とも考えられるが甕とした。

３１は比較的大型で、体部外面ハケメ、体部内面は上半が未調整で下半がハケメ、他はナデ調整である。32も比較的大型で、体部最大径が体部中央よりやや下よりにあるために下膨れの器形で、33や40に近い。調整は31と同様に、体部外面と体部内面下半分にハケメ、他はナデ調整であるが、頸部内面にもハケメが残る。33は体部内外面ともハケメで、頸部内面にもハケメ、他はナデである。34は外面をハケメの後、



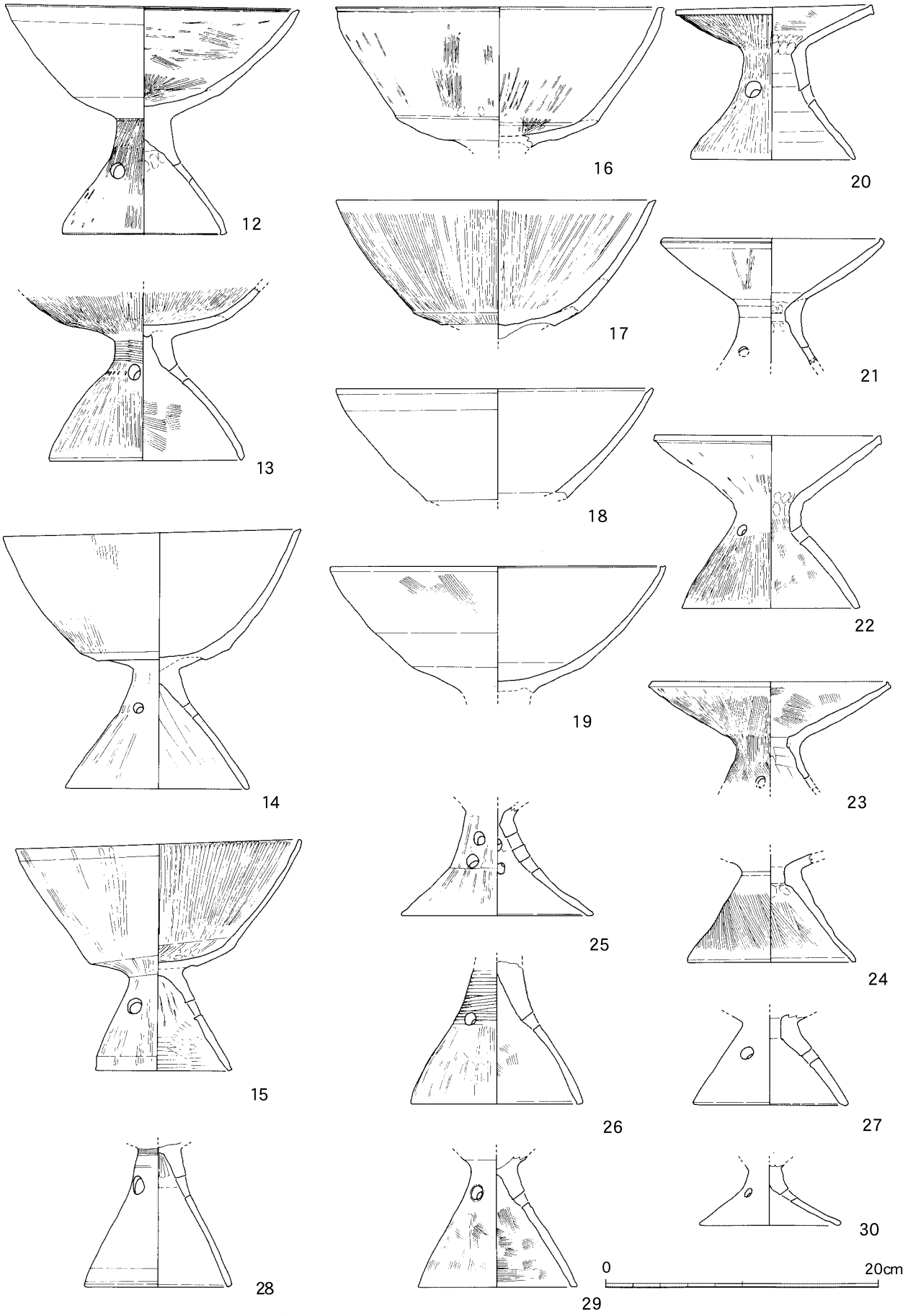
第15図　ＳＤ21　出土遺物　実測図（１：４）

体部に二股工具による沈線が縦方向に施されている。内面は頸部にハケメ、他は未調整となっている。

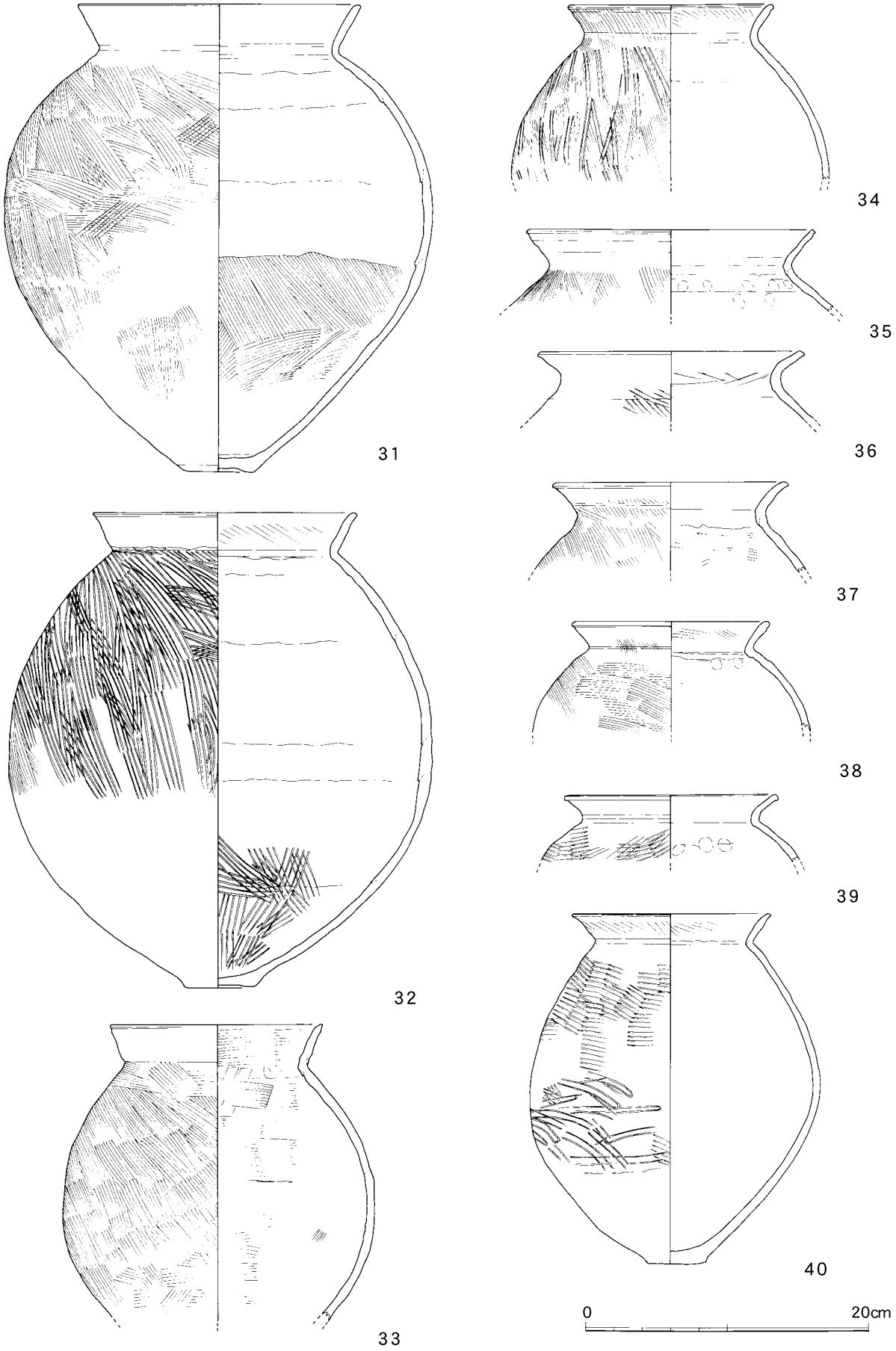
３５～39の甕は、いずれも体部外面にハケメ、内面は未調整であるが、36と38には頸部内面にもハケメ、39は、体部タタキの後ハケ調整を行っている。40は体部外面上半をタタキ、下半分を二股工具による沈線を斜めに施している。頸部から口縁部にかけては内外面ともハケ調整しているが、体部内面にはケズリの痕跡は見られなかった。

４１～43は甕としたが壺かもしれない。いずれも口縁端部が、立ちあがり面を持つ受口口縁に似た要素を見せる。３点とも、体部外面はハケメ、体部内面は未調整である。ただし、41は、ハケメの後二股工具による沈線が縦方向に施され、43には頸部内面にもハケメがある。45は口縁端部が外反し、46は口縁端部が内傾する。48は体部･底部外面をハケ調整し、他はナデで仕上げられている。摩滅が激しく調整は不明確ながら完形であった。53は、頸部に横線文と刺突文を施す。体部外面はヘラミガキで仕上げる。

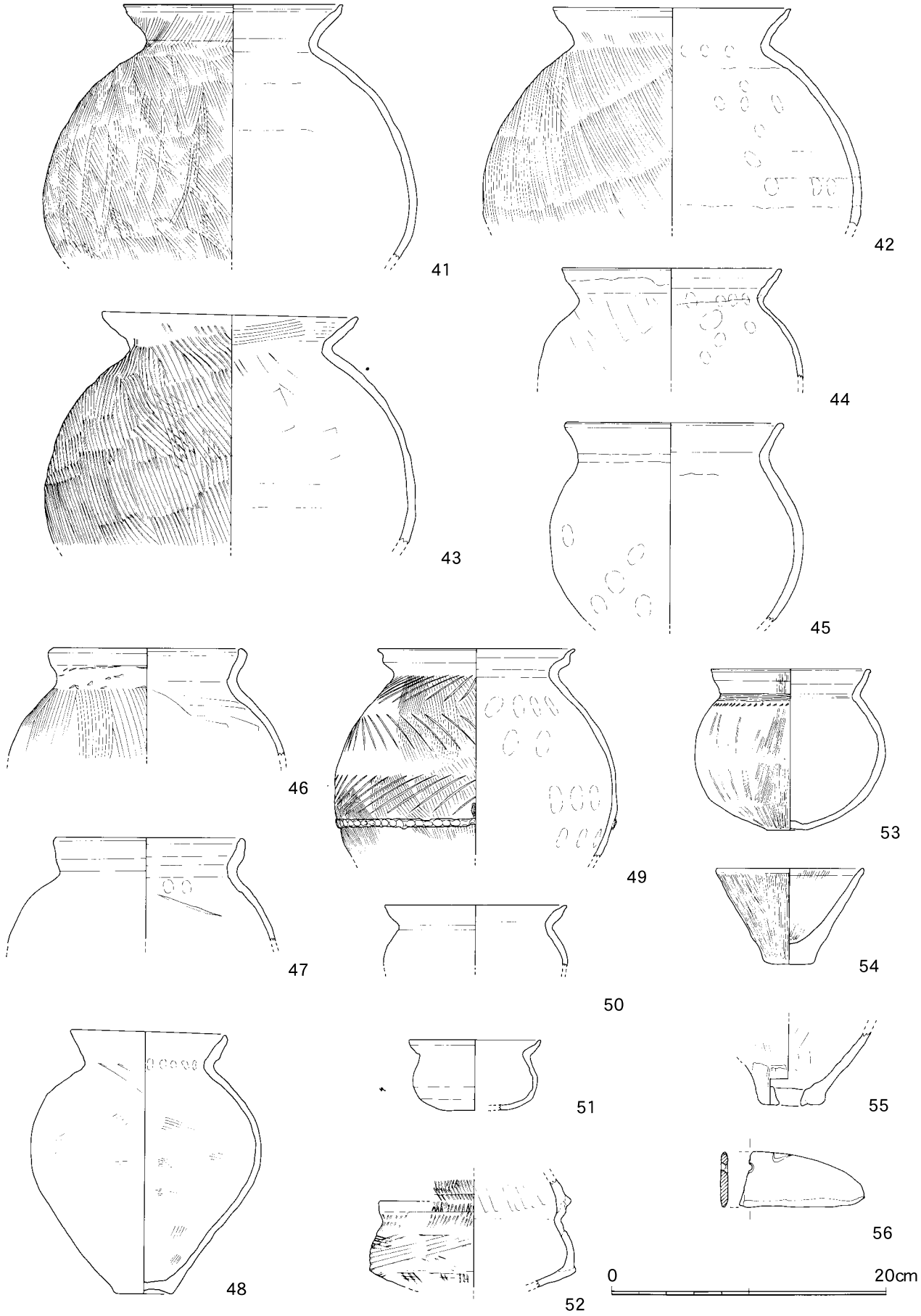
受口状口縁甕（49・57～73）　５７～63は口縁部断面が比較的しっかりとした受口状口縁を呈し、体部外面ハケメ内面未調整他はナデによる仕上げとなっている。61の外面にはハケ調整の前にタタキが施されている。64は小型であり、口縁部の内外面がハケ調整で仕上げられている。49・65～69は加飾されている。49は受口口縁で、体部に突帯が貼付された後、指圧されている。体部外面には、ハケ調整の後に３段の斜行沈線が、綾杉文状に施されている。65は小型で、口縁部内面の受口の立ち上がりがやや緩やかである。外面はハケ調整の後、体部上半に斜行沈線が１段・沈線１条・波状文・横線文と施文されている。66も同様に外面ハケ調整の後、体部上半に斜行



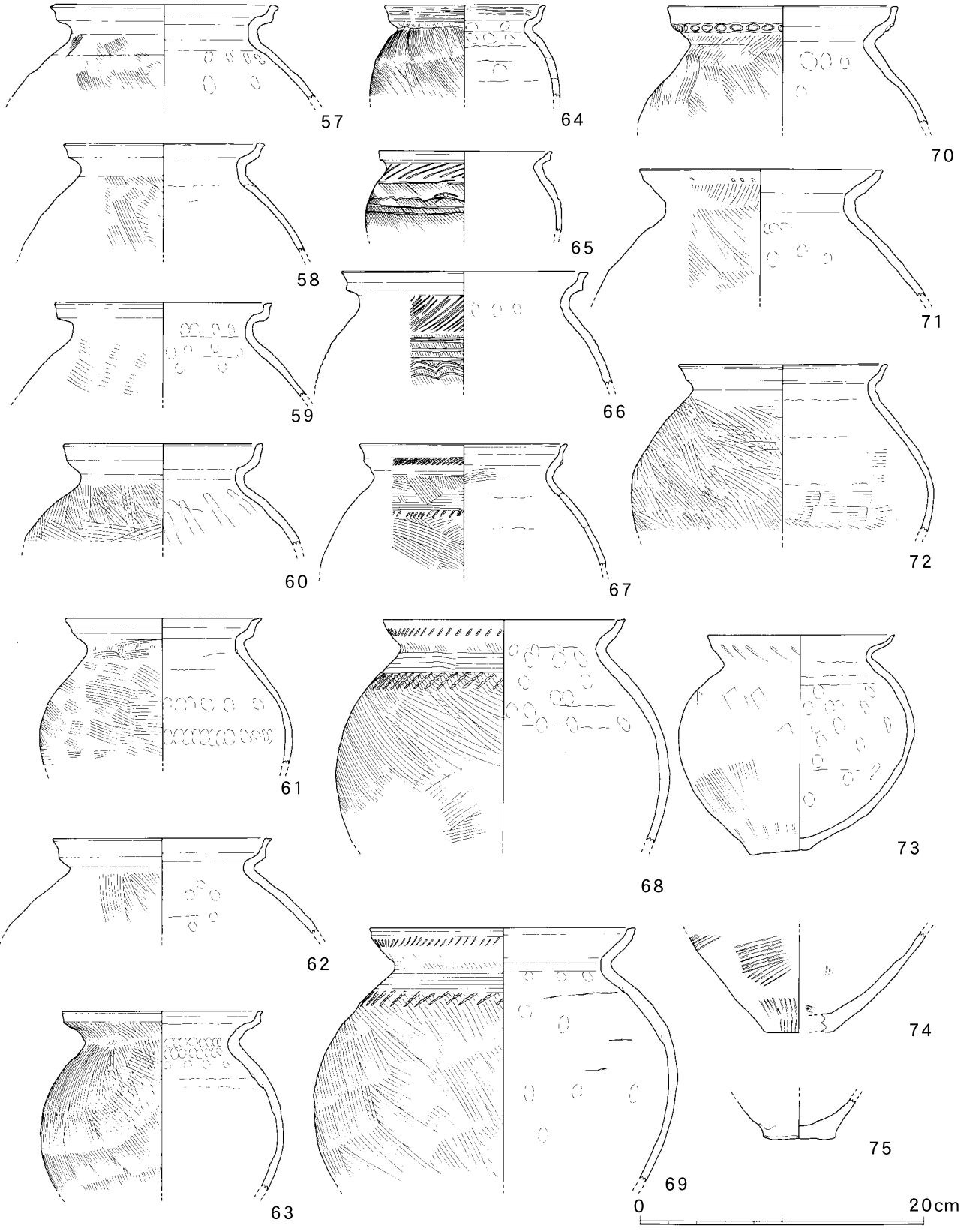
第16図　ＳＤ21出土遺物　実測図（１：４）



第17図　ＳＤ21出土遺物　実測図（1：4）



第18図　ＳＤ21出土遺物　実測図（１：４）



第19図　ＳＤ21遺物実測図（１：４）

沈線、横線文、波状文が施されている。67は、頸部外面から口縁部にかけて刺突が施され、体上部には櫛描横線文が巡り、さらに同一原体によると思われる刺突文が施されている。口縁部内面にはハケメも認められる。68･69も、外面ハケ調整の後、67と同様に口縁部外面に刺突、体部には櫛描横線文、さらに刺突が施される。しかし、67の体部の刺突単位は短く、68･69は長い。70は、頸部に突帯が貼付された後に指で押圧されている。71･72は口縁部の受けが不明瞭であり、いずれも外面ハケ調整であるが、71は内面未調整、72は内面下半を板状工具で調整している。73は摩滅により不明瞭であるが、口縁部外面に板状工具による刺突痕がある。体部外面はハケメ、体部内面は未調整で、底部内面はナデとなっている。

手焙形土器（52）　52は、低い受口口縁を持つ鉢に覆部を付加している。口縁部・体部・底部外面はハケによって施文され、口縁部と体部には貼付突帯が巡る。

甕底部（74・75）　　75は残存状況がよくないが、74は体部外面タタキ、底部外面ハケメである。

鉢（54・55）　　54は「逆八の字」状に開く形状の小型の鉢で、内外面はヘラミガキで仕上げられ、内面には赤色顔料が付着していた。

55は小型有孔鉢で、体部外面をハケメ、底部外面をヘラケズリする。底部は焼成前に外側から穿孔された後に粘土を追加して埋め、径を整えている。

石包丁（56）　　56は石包丁で、残存部の全長は9.1cmを測る。背部が孤を描き、刃部が直線の半月形を呈する。残存部に孔が認められるが、欠損のため孔の個数は不明である。　　（小倉　整）

2　飛鳥から奈良時代前半の遺物（第20･21図）

量的にはそれほど多くはないが、井戸、竪穴住居から、比較的まとまって出土している。

A　ＳＥ38出土遺物（第20図）

76～78は、高台をもつ須恵器であるが、76は広口壺で、口縁部がＳ字に屈曲し、内面には炭、あるいは漆かと思われるものが付着している。77の高台径は、底部径よりもやや内側に付くが、78の高台径は底部径に近い。

B　ＳＥ35出土遺物（第20図）

79は土師器の杯、80は土師器の甕、81は須恵器の甕である。79は、外面をヘラミガキ、内面に斜放射暗文１段とラセン暗文を施し、底部外面をヘラケズリする。80は、口縁部片と底部片を同一個体と考え、球形の器形をもつ甕とした。残存が悪く摩滅も激しいが、調整は、体部外面下半をヘラケズリ、他をハケメである。81は、体部外面上部をカキメで、その下方を格子風のタタキの後カキメである。内面のあて具痕や指による押圧痕は、雑にナデ消される。

C　ＳＨ2出土遺物（第20図）

82･83は、小型の土師器の甕で、外面下半をヘラケズリ、他をナデで調整している。82の外面上半には、ハケメや指による押圧の痕跡が残る。

D　ＳＨ43出土遺物（第20図）

84は土師器の椀、85は須恵器の杯、86･87は土師器の長胴甕である。86･87は、内弯気味の口縁部をもち、体部外面下半をヘラケズリ、他をハケで調整する。87には、体部から口縁部の屈曲部外面に棒状工具による強いヨコナデがみられる。

E　ＳＫ27出土遺物（第21図）

88と89は、粗製の土師器の椀である。89の口縁部には黒斑がつく。

F　ＳＨ31出土遺物（第21図）

90･91は土師器の椀である。92は土師器の甕、93は須恵器の蓋である。90･91はどちらも直立する口縁をもち、体部外面には指圧痕を残す。91の底部外面にはヘラケズリが確認できる。92は、体部から口縁部の屈曲が比較的緩い。93は、口縁端部が強く外方に屈曲し、天井部外面一部をロクロケズリする。

G　ＳＫ32出土遺物（第21図）

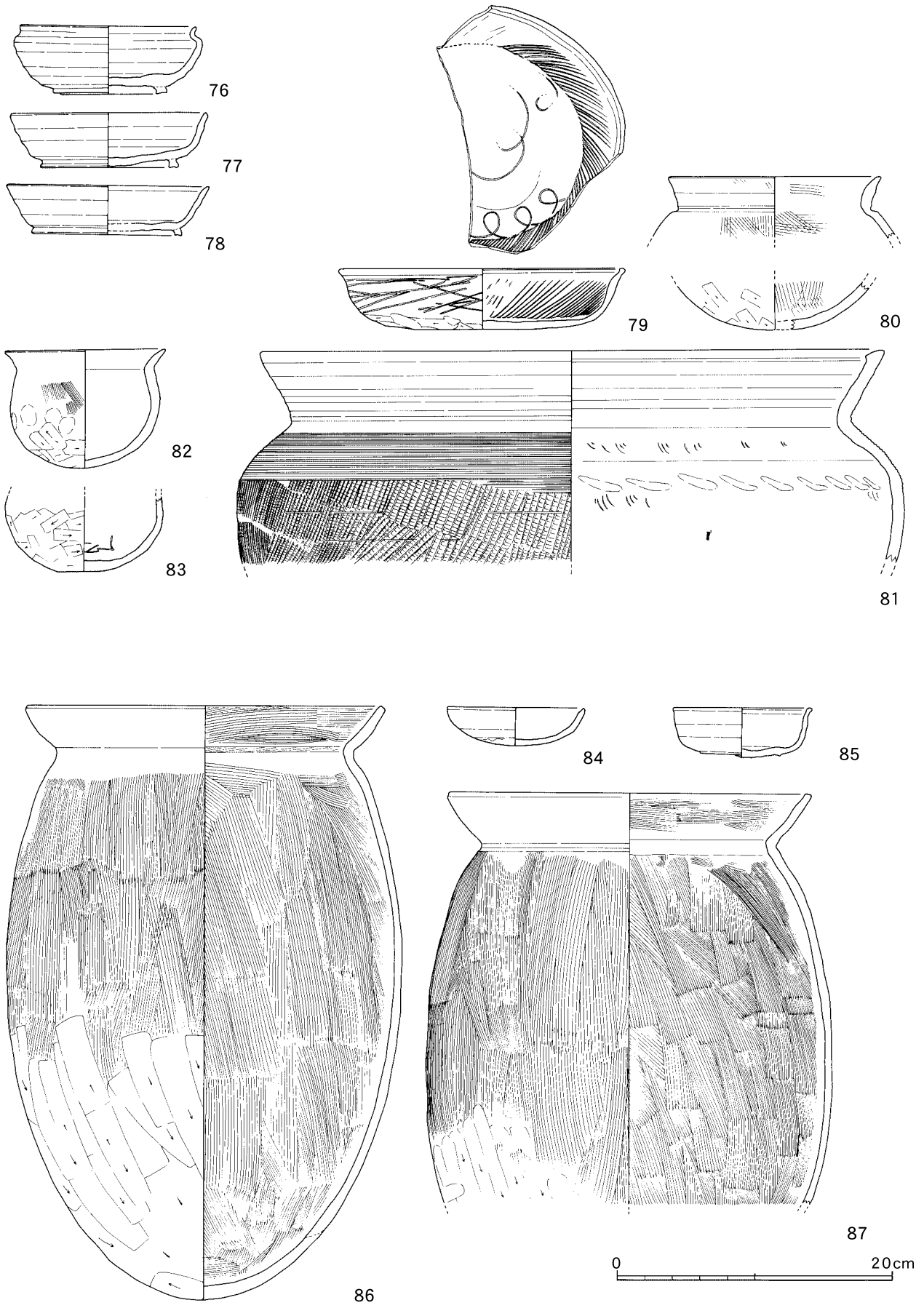
94は、土師器の短脚の高杯である。柱状部は9面に面取りされる。

H　ＳＨ9出土遺物（第21図）

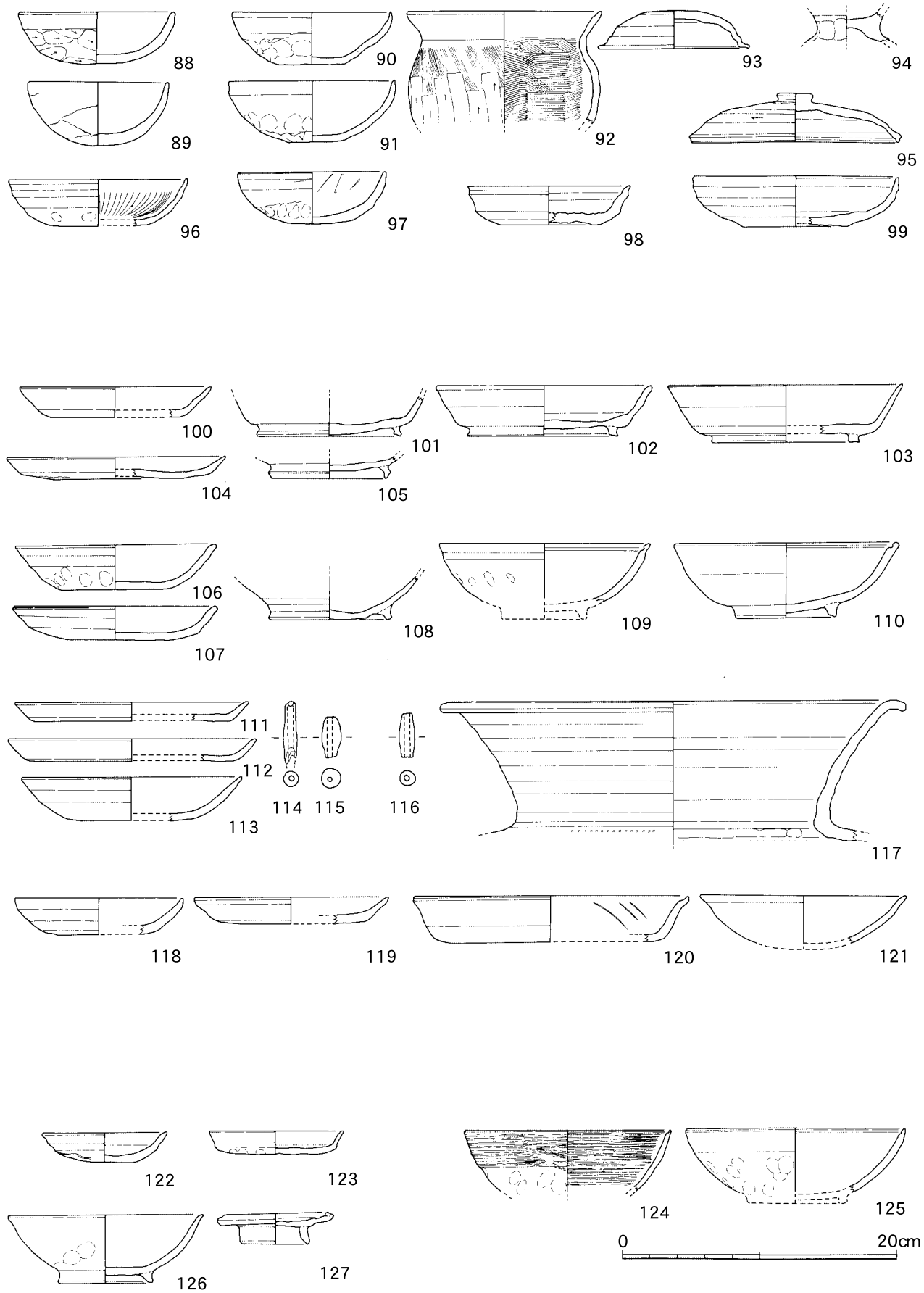
95は、宝珠つまみが付く須恵器の杯蓋である。つまみは扁平である。

I　ＳＨ29出土遺物（第21図）

96は、精製の土師器の杯で、口縁部内面に放射暗文を１段残す。



第20図　ＳＥ35・38・ＳＨ2・43出土遺物　実測図（１：４）



第21図　ＳＢ48・49・51・52・54・ＳＤ10・12・13・22・ＳＨ29・31・ＳＫ7・14・27・32・58・59
出土遺物　実測図（１：４）

Ｊ　ＳＫ５９出土遺物（第21図）

９７は土師器の椀である。調整は外面をナデ、内面を工具ナデとしたが、底部外面のナデは弱く、口縁部外面下方には指押さえ痕も明瞭で粘土接合痕もみられる。

Ｋ　ＳＢ４９出土遺物（第20図）

９８は須恵器の杯である。外面にロクロケズリによる調整は見られず、口縁部は非常に強いロクロナデを施し、端部は外反する。

Ｌ　ＳＤ１３出土遺物（第20図）

９９は須恵器の杯である。内弯する口縁部をもち、底部外面は未調整のままである。

3　平安時代前期の遺物（第21図）

後述するSZ19出土遺物も時代的にはここに含まれるが、それを除くと、量的にはそれほど多くはない。

Ａ　ＳＤ１０出土遺物（第21図）

100は土師器の杯、104は皿、101~103は須恵器の杯、105は灰釉陶器の椀である。101~103は、高台が底部のやや内側に貼付され、これらはやや古相を示すことから混入と考えられる。103は、底部に厚みをもつ。105は、底部のみの残存のため、釉は内面一部に確認できるにとどまるが，刷毛塗りと思われる。比較的高い高台を貼り付け、左回転のロクロによる調整である。

Ｂ　ＳＢ５４出土遺物（第21図）

106・107は土師器の杯、108~110は黒色土器の椀である。これらは、柱穴内に埋納されたものと考えられ、一括性が高い。106は、口縁部外面上半のナデが比較的強い。107は、口縁端部外面に一条の弱い沈線がみられる。108はB類であるが、109・110はA類で、口縁端部内面に１条の沈線を施す。

Ｃ　ＳＤ１２出土遺物（第21図）

111・112は土師器の皿、113は黒色土器の杯、114と115は土錘である。111・112は残存が悪いものの、平らな底部から直線的に外方へ立ち上がる口縁部をもち、器高は低いが大型のものである。113は、摩滅が激しく調整は不明確であるが、A類の杯である。

Ｄ　ＳＤ２２出土遺物（第21図）

図示できたものは１16のみで、紡錘形の土錘であり、重さは3.9ｇ、孔の径は４㎜である。

Ｅ　ＳＢ４８出土遺物（第21図）

図示できたのは117のみである。須恵器の甕で、口縁端部が肥厚せずに大きく外反しする。

Ｆ　ＳＢ５２出土遺物（第21図）

土師器の椀（118）と皿（119）である。118は、器高の低い椀と考えたが、小片からの復元のため、もう少し器高が高い可能性がある。口縁部は内弯し、弱いヨコナデで調整する。外面に粘土紐接合痕が残る。

Ｇ　ＳＢ５１出土遺物（第21図）

土師器の杯（120･121）である。120は大型のもので、強いヨコナデが施された口縁端部は屈曲し、外面は凹線状になる。口縁部内面には、斜放射暗文が１段施されるが、乾燥が不十分であったためか、沈線状を呈する。121は底部を欠くが、高台を貼り付ける可能性がある。

4　平安時代後期の遺物（第21図）

土坑から出土した６点のみを図示できた。

Ａ　ＳＫ７出土遺物（第21図）

土師器の皿（122）と瓦器の皿（123）である。122は、小さな底部から内弯して立ち上がる口縁部をもち、椀にちかい器体を呈する。123は、伊賀の瓦器山田編年案（註1）のⅠ段階にあたると見られるが、摩滅が激しく内面にヘラミガキを確認できなかった。

Ｂ　ＳＫ１４出土遺物（第21図）

瓦器の椀（124･125）である。両者とも内弯する口縁部をもつ。124は、器形･器壁の厚さや口縁端部内面の沈線の位置などから11世後葉から12世紀初頭のものと考えられる。125は、沈線の位置が山田編年案Ⅰ段階の特徴をもつものの、摩滅が激しく内外面にヘラミガキは確認できなかった。かろうじて口縁端部内面に沈線の痕跡が残る。

Ｃ　ＳＫ５８出土遺物（第21図）

126は黒色土器のA類椀、127は土師器の皿である。126は「く」の字に屈曲する口縁部をもつ。127は、高い高台を貼り付ける台付皿で、口縁端部は内側に折り返される。

5　ＳＺ19出土遺物（第22図）

土師器は、杯（128~156）・皿（157~168）と甕（171~177）・壺（178・179）、黒色土器は杯（180～183・186）・椀（184・185）と皿（187）、須恵器は、蓋（188～190）・杯（191）・甕（192）、灰釉陶器は椀（193~195）が出土している。自然流路のよどみに礫石とともに破損したものが投棄された可能性があり、小片や残存が悪いものが多い。

〈土師器〉（第22図）

杯（128~156）　残存が悪く、口径、器高に疑問を残すものもあるが、口径にはそれほど明確な差はみられない。器高もすべて2.1cm～3.1cmの間と思われる。口縁部は、外方へ直線的に立ち上がるものが多いが、底部から内弯して立ち上がりそのまま丸く収めるもの（131・144）や、やや外反するもの（129）もある。口縁の端部は、強いヨコナデのため内面に沈線状の凹線の残るもの（128・130・132・134～136・138・139・141～143・146）が多い。ほとんどのものは底部外面が未調整で他をナデるが、ナデのみのもの（129・135・138・141・146・150・152）や底部外面をヘラケズリして他をナデのもの（137・148・153）もある。ただ摩滅が激しく、観察にも疑問が残る。

皿（157～168）　口縁部が内弯するもの（158・161・162・164）、直線的に外方へ立ち上がるもの（160・162・167・168）、外反するもの（157・166）がある。163・165は、強いヨコナデのため口縁端部内面に沈線状の凹線をのこす。底部外面は未調整、他をナデのものが大半を占めるが、ナデのみのもの（157・161）や、底部外面をヘラケズリするもの（162）もある。

高杯（169・170）　169は高杯の杯部としたが、残存が悪いため皿の可能性もある。170は短脚の高杯で、筒部外面をハケ状の工具により８面に面取りする。

甕（171~177）　171~175は、体部から「く」字に屈曲する口縁部をもち、172～174の口縁端部外面には強いヨコナデが見られる。176・177の口縁部は大きく外反する。173は、口縁部作成後に内面に粘土を充填して器壁の厚さを確保している。175は体部内外面を板状工具によるナデで調整するが、172も体部の調整に工具を用いているのかもしれない。

壺（178・179）　ともに残存が悪く、全体の形体は不明確である。179は、底部外面をヘラケズリする。

〈黒色土器〉（第22図）

杯（180～183・186）　すべてＡ類で外面未調整、内面をヘラミガキで調整する。ただ180は、摩耗のため非常に不明瞭ではあるが、口縁部内面にラセン暗文がみられる。また、181・182のヘラミガキは雑で、183は摩滅のためヘラミガキの有無も不明である。

椀（184・185）　両者ともにA類である。184は比較的高い高台を持つ。摩滅が激しいものの、内面はヘラミガキ、外面は未調整と思われる。185も高台を貼り付ける大型の椀であると考えた。外面は未調整で内面をヘラミガキであるが、ヘラミガキは口縁部外面上半にも及ぶかもしれない。

皿（187）　Ａ類の皿で高台を貼り付ける。

〈須恵器〉（第22図）

蓋（188～190）　すべて口縁端部にかえりはなく屈曲し、188と189の天井部は比較的平らである。190の口縁部には自然釉がかかり、製作時に別個体を重ねたためか内外面に癒着物が残る。

杯（191）　直線的に外方へ立ち上がる口縁部をもつ器高の高い杯である。

甕（192）　口縁部を肥厚させており、端面にもロクロナデを施している。

〈灰釉陶器〉（第22図）

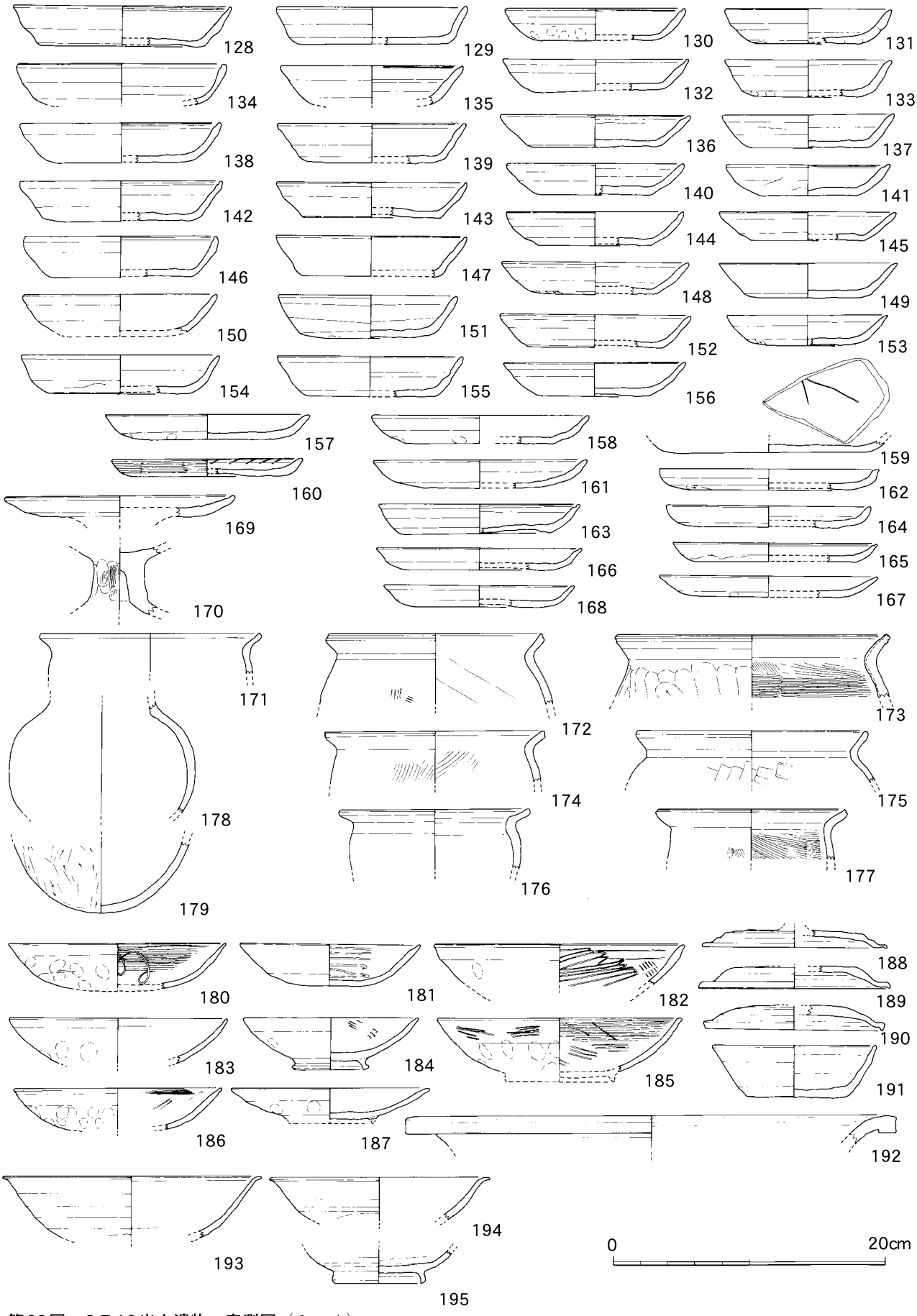
椀（193～195）　193・194は口縁部が内弯し、その端部は外反する。底部が残存する195は外面をロクロケズリし、やや内弯する比較的高い高台を貼り付ける。すべて釉は刷毛塗りである。

6　包含層出土遺物（第23図）

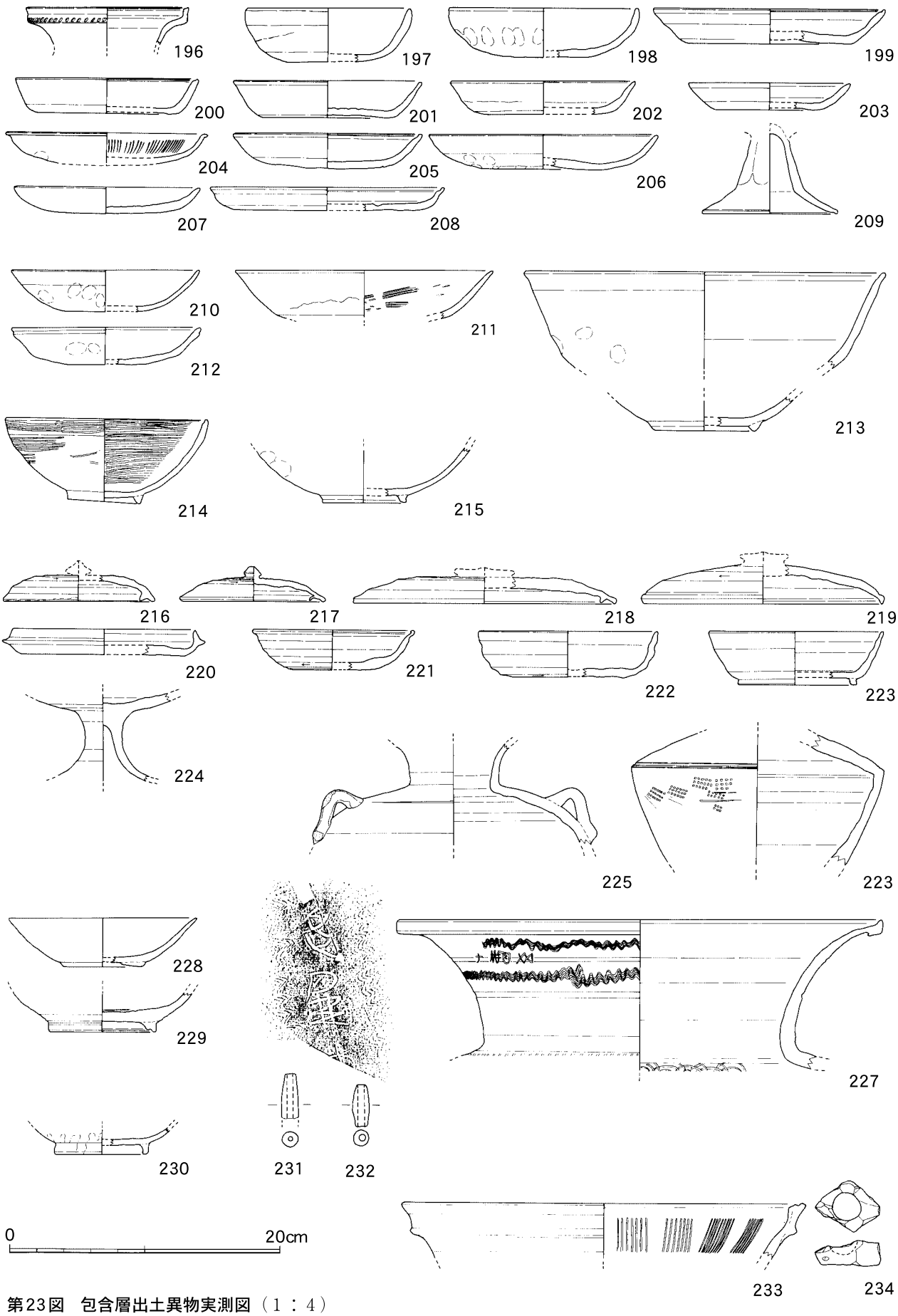
〈土師器〉（第23図）

壺（196）　口径12.0cmの小型の壺で、摩耗が激しく調整は不明確であるが、あるいは弥生土器かと考えられる。口縁端部外面に刺突文を施す。

椀（197・198）　197は粗製で、外面には粘土接合痕が残る。



第22図　ＳＺ19出土遺物　実測図（１：４）



第23図　包含層出土異物実測図（１：４）

杯（199～203・205）　199と203は、口径はかなり異なるが、どちらも口縁部は直線的に大きく外方へ立ち上がる。200は口縁部が厚みをもち、底部から屈曲して立ち上がる。201は、底部内面に棒状工具による弱いラセン状の沈線がみられる。200・205の口縁端部内面は、強いヨコナデで仕上げられたため沈線状の凹線が残る。

皿（204・206～208）　204は口縁端部が外反し、口縁部内面に放射暗文を施す。206は底部外面を未調整であるが、一部にヘラケズリがみられる。208は、強いヨコナデのために口縁端部の内面が凹線状になる。また、摩滅のために暗文の有無は不明であるが、底部内面にヘラ状工具による掻き取るような痕跡がみられる。

高杯（209）　脚部のみの残存で、全形は不明である。脚部は屈曲気味に外反し、柱状部内面を未調整と工具によるナデ、柱状部外面を面取り風にヘラケズリする。

〈黒色土器〉（第23図）

杯（210～212）　すべてA類である。210と211の口径はかなり異なるが、どちらも底部からほぼ直線的に外方へ立ち上がる口縁部をもつ。212は、口縁端部外面に１条の沈線を施す。

椀（213）　器形の復元はできなかったが、残存する口縁部片と底部を同一個体と考え、高台を貼り付ける大型のA類の椀とした。摩滅が激しくて調整は不明確であるが、口縁部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁端部はやや外反する。

〈瓦器〉（第23図）

椀（214・215）　ともに高台を貼り付ける、半球形の形体を呈する椀である。摩耗が激しいが、調整はどちらもヘラミガキとした。214は口縁端部内面に沈線がのこり、底部内面には摩滅により判然としないが、ジグザグ状のヘラミガキを施す。山田編年案Ⅰ段階のものと思われるが底部のヘラミガキがらせん暗文であるとするとⅡ段階の可能性もある。外面のヘラミガキは確認できなかった。215の口縁部外面には指押さえ痕もみられる。

〈須恵器〉（第23図）

蓋（216～219）　いずれも宝珠つまみが付くものとしたが細部の形態や口径は様々である。216～218は口縁部内面にかえりを持ち、219はかえりが消失する。かえりを持つもののうち216と217は小型、218は大型である。天井部は、219では欠損もみられるが、216・218は平らで、217・219は丸みをもつ。すべてに付くとしたつまみは、216・217のものは高さをもち、218・219は扁平なものと考えた。調整は、すべて天井部外面をロクロケズリ、他をロクロナデである。216は、かえり部分のみに自然釉がかかる。

杯（220～223）　220のみ受部をもち、221は、口縁端部内面に1条の沈線を施す。また、223のみ高台を貼り付ける。調整は、底部外面にロクロケズリするもの（220・222）と未調整のもの（221・223）がある。

高杯（224）　全体の形体は不明であるが、わずかに残る杯部外面をロクロケズリ、他をロクロナデする。

壺（225・226）　どちらも欠損が多く、全形は不明である。225は双耳壺で、頸部は体部から直立気味に立ち上がり、口縁部は外反する。ロクロナデで調整するが、肩上部外面左右には環状の把手を貼り付けた後にヘラ状工具により沈線を1条巡らせる。226は長頸壷である。体部が、底部からやや直線的に外方へ立ち上がり、肩部で深く屈曲して口縁部へとつながっていく。その屈曲部の外面には、１条の沈線を施す。屈曲部より下方の体部外面は、タタキの後にロクロナデで調整する。

甕（227）　体部を欠損し、全体の形体は不明確である。外方へ開く口縁部外面には沈線が２条と雑な櫛描波状文が交互に２条巡る。焼成前にヘラ描された文字みられる。この文字については。次章で詳しく述べる。

〈緑釉陶器〉（第23図）

椀（228・229）　228は、摩滅が激しく釉も大半が剥落しているが、蛇目高台である。229は、底部内面に沈線が巡り、トチンの痕跡もみられる。底部外面には、糸切痕も明瞭である。

〈灰釉陶器〉（第23図）

椀（230）

重ね焼きで作成された、比較的高い高台を貼り付ける椀である。釉は浸けがけされた可能性が高い。

〈土製品〉（第23図）

土錘（231・232）

紡錘状の土錘で重さ4.8g(231)と4.3g(232)の軽いものである。

〈陶器〉（第23図）

擂鉢（233）　残存部は少ないが、内面に7～9本の櫛状具による擂目が密にみられ、口縁部内面には擂目のない無文帯がある。

〈石製品〉（第23図）

234は用途不明の石製品である。中央部に半球型に刳り抜かれた加工の痕が見られる。

（野田有美・小倉　整）

[註]

（1）山田猛『伊賀の瓦器に関する若干の考察』中世土器の基礎研究Ⅱ 1986

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
1	098-1	SD21	B10	土師器 壺	30.4	—	—	頸部外面ハケメ 体部外面ハケメ	赤褐(2.5YR4/6)	2～4mm砂粒含む	良	口縁部1/2残 底部欠損	口縁部外面浮文ハリ付後竹管文 指押圧施文　体部外面クシガキ横線文・波状文・刺突文同一原体による施文
2	077-1	SD21	B10	土師器 壺	13.5	—	—	頸部内外面ヘラミガキ	橙（5YR6/8）	砂粒含む	良	体部欠損	口縁部外面浮文ハリ付後竹管文3つまとまって×4・波状文　頸部外面刺突一条
3	089-3	SD21	D10	土師器 壺	15.3	—	—	体部内面未調整　他ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	2～4mm砂粒含む	良	口縁部1/6残 底部欠損	体部外面ハリ付突帯・クシガキ横線文　摩滅が激しく調整不明確
4	069-1	SD21	B10 NO.g	土師器 壺	14.3～14.5	—	—	外面ハケメ　頸部内面ハケメ　体部内面ヘラケズリ・ハケメ　他ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	小石含む	良	口縁部3/4残 底部欠損	黒斑あり
5	085-1	SD21	B10	土師器 壺	19.4	—	—	ナデ	明赤褐(2.5YR5/4)	1mm砂粒含む	良	口縁部1/10残 底部欠損	口縁部外面クシガキ横線文　頸部外面クシガキ横線文・波状文　摩滅が激しく調整不明確
6	061-1	SD21	A10	土師器 壺	—	—	頸部径6.0	頸部内外面ヘラミガキ 体部内面ヘラケズリ	赤褐(10R4/4)	小石含む	良	口縁部・底部欠損	頸部外面突帯ハリ付後体部外面に斜めにヘラで短沈線・クシガキ横線文・波状文・刺突文　同一原体による施文
7	088-2	SD21	B10	土師器 壺	14.3	—	—	頸部・体部外面ハケメ 頸部内面ヘラミガキか？	明赤褐(2.5YR5/8)	小石含む	良	口縁部1/8残 底部欠損	体部外面突帯ハリ付後斜めにヘラで短沈線
8	091-3	SD21	B10	土師器 壺	11.2	—	—	ナデ	外：赤褐2.5YR(5/8)内：にぶい黄橙(10YR6/3)	小石含む	良	口縁部・頸部完形体部・底部欠損	頸部外面突帯ハリ付後斜めにヘラで押圧
9	072-2	SD21	B10	土師器 壺	—	—	底部径5.5	不明	にぶい橙(7.5YR7/3)	小石・砂粒含む	良	底部のみ完形	摩滅が激しく調整不明
10	079-2	SD21	B10 NO.15	土師器 壺	—	—	底部径2.7	不明	内：明赤褐(2.5YR5/8)外：赤灰(2.5YR4/1)	小石含む	良	底部のみ完形	摩滅が激しく調整不明
11	094-1	SD21	B10	土師器 壺	—	—	底部径4.8	外面ハケメ　内面工具ナデ　他ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	小石含む	良	底部のみ完形	
12	068-1	SD21	A10 NO.6	土師器 高杯	2.4	16.8	脚部径11.4	内外面ヘラミガキ	赤褐(10R4/3)	細砂粒含む	良	口縁部1/2残	
13	096-3	SD21	B10	土師器 高杯	—	—	脚部径14.2	脚部内面ハケメ　他ヘラミガキ	橙（5YR7/8）	密	良	口縁部1/2残・脚部台径1/8残	脚部外面上半分クシガキ横線文・刺突文　焼成前穿孔
14	080-1	SD21	B10 NO.8	土師器 高杯	21.8	19.3	脚部径13.2	外面ヘラミガキ　脚部内面工具ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	小石含む	良	口縁部1/2残 脚部完形	摩滅が激しく調整不明確　焼成前穿孔
15	064-1	SD21	B10 NO.g	土師器 高杯	20.8	17.2	脚部径10.1	脚部内面ハケメ　他ヘラミガキ	にぶい黄橙(10YR7/3)	小石含む	良	口縁部1/2残 脚部完形	焼成前穿孔
16	085-2	SD21	B10	土師器 高杯	24.0	—	—	杯部内外面ヘラミガキ	灰白((2.5Y8/2)	密	良	口縁部1/2脚部欠損	
17	099-1	SD21	B10 NO.p	土師器 高杯	23.4	—	—	杯部内外面ヘラミガキ	にぶい黄橙(10YR7/4)	砂粒含む	良	口縁部1/2残 脚部欠損	
18	103-1	SD21	B10	土師器 高杯	22.8～23.8	—	—	杯部内外面ヘラミガキか？	明赤褐(2.5YR5/6)	砂粒含む	良	口縁部1/3残 脚部欠損	摩滅が激しく調整不明確
19	057-1	SD21	B10	土師器 高杯	24.4	—	—	杯部内外面ヘラミガキか？	赤褐(10R5/4)	砂粒含む	良	口縁部1/4残 脚部欠損	摩滅が激しく調整不明確
20	082-2	SD21	B10 NO.e	土師器 器台	14.4	11.4	脚部径11.4	外面ヘラミガキ　脚部内面工具ナデ	明赤褐(2.5YR3/6)	小石含む	良	ほぼ完形	焼成前穿孔
21	079-1	SD21	C10 NO.4	土師器 器台	16.0	—	—	外面ヘラミガキ	赤褐(5YR4/6)	小石含む	良	口縁部ほぼ完形脚部欠損	摩滅が激しく調整不明確　焼成前穿孔
22	082-1	SD21	B10 NO.n	土師器 器台	16.5	12.8	脚部径12.6	外面ヘラミガキ　脚部内面ハケメか	淡黄(2.5Y8/4)	密	良	口縁部1/2残 脚部欠損	焼成前穿孔
23	094-3	SD21	B10	土師器 器台	17.3	—	—	内外面ハケメ　他ナデ	赤褐(2.5YR4/6)	小石含む	良	口縁部1/8残 脚部欠損	焼成前穿孔
24	067-2	SD21	B10 NO.f	土師器 器台	—	—	脚部径12.3	内外面ハケメ　他ナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	砂粒含む	良	口縁部欠損脚部完形	
25	096-2	SD21	B10 NO.11	土師器 高杯	—	—	脚部径13.9	外面ヘラミガキ　他ナデ	赤褐(2.5YR4/6)	小石含む	良	杯部欠損脚部ほぼ完形	焼成前穿孔
26	102-2	SD21	B10	土師器 高杯	—	—	脚部径12.5	脚部外面ヘラミガキ　他ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	密	良	杯部欠損脚部ほぼ完形	脚部外面上半クシガキ横線文　焼成前穿孔

表1～6　出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
27	092-2	SD21	B10	土師器 高杯	—	—	脚部径 11.2	外面ヘラミガキか？	灰黄(2.5Y6/2)	小石含む	良	杯部欠損脚部径1/6残	摩滅が激しく調整不明確　焼成前穿孔　黒斑あり
28	086-2	SD21	C10 NO.6	土師器 高杯	—	—	脚部径 10.8	脚部外面ヘラミガキ　他ナデ	赤(10R5/6)	砂粒含む	良	杯部欠損脚部径1/2残	脚部外面上半クシガキ横線文　摩滅が激しく調整不明確　焼成前穿孔
29	102-1	SD21	B10 NO.r	土師器 高杯	—	—	脚部径 11.0～11.5	脚部外面ハケメ→ヘラミガキ　脚部内面ハケメ他ナデ	赤褐(2.5YR4/6)	小石含む	良	杯部欠損脚部径3/4残	焼成前穿孔
30	089-1	SD21	B10	土師器 高杯	—	—	脚部径 10.2	ナデ	にぶい赤褐(5YR5/4)	極細砂含む	良	杯部欠損脚部径1/4残	摩滅が激しく調整不明確　焼成前穿孔
31	059-1	SD21	B10 NO.12	土師器 甕	19.8	33.3	底部径 4.4	体部外面ハケメ　体部内面上半分未調整　下半分ハケメ　他ナデ	赤褐(10R4/4)	小石含む	良	口縁部1/2残 体部ほぼ完形	
32	063-1	SD21	B10 NO.9	土師器 甕	19.6	33.8	底部径 5.0	体部外面ハケメ　体部内面上半分未調整　下半分ハケメ　他ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	小石含む	良	口縁部3/4残 底部径1/2欠損	
33	065-1	SD21	B10 NO.e	土師器 甕	15.2	—	—	体部内外面ハケメ　頸部内面ハケメ　他ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	小石含む	良	口縁部ほぼ完形底部欠損	
34	084-1	SD21	B10 NO.p	土師器 甕	14.2	—	—	外面ハケメ　頸部内面ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/3)	小石含む	良	口縁部1/4残 底部欠損	二股工具による短沈線　内面摩滅が激しく調整不明確
35	091-1	SD21	C10	土師器 甕	20.0	—	—	体部外面ハケメ内面未調整他ナデ	明赤褐(5YR5/6)	小石含む	良	口縁部1/6残 底部欠損	
36	092-1	SD21	C10	土師器 甕	18.2	—	—	体部外面ハケメ　頸部内面ハケメ　体部内面未調整　他ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	小石含む	良	口縁部1/6残 底部欠損	
37	095-2	SD21	B10	土師器 甕	16.2	—	—	体部外面ハケメ内面未調整他ナデ	赤褐(2.5YR4/3)	小石含む	良	口縁部1/5残 底部欠損	
38	077-2	SD21	B10 NO.17	土師器 甕	13.6	—	—	体部外面ハケメ　頸部内面ハケメ　体部内面未調整　他ナデ	暗赤褐(2.5YR3/6)	砂粒含む	良	口縁部ほぼ完形底部欠損	
39	072-1	SD21	B10	土師器 甕	15.0	—	—	体部外面タタキの後ハケメ　内面未調整　他ナデ	赤褐(2.5YR4/8)	砂粒含む	良	口縁部1/4残 底部欠損	
40	062-1	SD21	C10 NO.3	土師器 甕	14.0	25.0	底部径 5.0	体部外面上半分タタキ下半分二股工具による調整　頸部内外面ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/3)	極細砂含む	良	口縁部3/4残	内面摩滅が激しく調整不明確
41	078-1	SD21	B10 NO.14	土師器 甕	16.0	—	—	外面ハケメ内面未調整他ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	砂粒含む	良	口縁部1/5残 底部欠損	二股工具による短沈線　内面摩滅が激しく調整不明確
42	088-1	SD21	B10 NO.h	土師器 甕	17.4	—	—	体部外面ハケメ内面未調整他ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	小石含む	良	口縁部1/2残 底部欠損	
43	070-1	SD21	B10 NO.18	土師器 甕	18.4～18.6	—	—	体部外面ハケメ　頸部内面ハケメ　他ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	小石含む	良	口縁部ほぼ完形底部欠損	
44	097-2	SD21	B10 NO.11	土師器 甕	15.8	—	—	体部外面ハケメ内面未調整他ナデ	赤褐(2.5YR4/6)	小石含む	良	口縁部2/5残 底部欠損	
45	067-1	SD21	B10 NO.13	土師器 甕	15.6	—	—	ナデ	外：赤橙(2.5YR7/3)内：オリーブ黒(5Y3/2)	砂粒含む	良	口縁部3/4残 底部欠損	摩滅が激しく調整不明確
46	093-1	SD21	C10	土師器 甕	13.6	—	—	体部外面ハケメ　他ナデ	明赤褐(2.5YR5/6)	小石含む	良	口縁部5/6残 底部欠損	
47	066-1	SD21	C10 NO.2	土師器 甕	13～13.6	—	—	ナデ	にぶい橙(5YR7/4)	小石含む	良	口縁部完形底部欠損	摩滅が激しく調整不明確
48	083-1	SD21	D10 NO.1	土師器 甕	11.2	19.4	底部径 4.2	体部・底部外面ハケメ他ナデ	明赤褐(2.5YR5/6)	小石含む	良	完形	摩滅が激しく調整不明確
49	100-1	SD21	B10 NO.g	土師器 甕	14.2	—	—	体部外面ハケメ　他ナデ	外：明赤褐(2.5YR5/3)内：にぶい黄褐(10YR5/6)	小石含む	良	口縁部1/4残 底部欠損	体部外面斜行短沈線方向交互に3段施文　突帯ハリ付後指押圧施文
50	089-2	SD21	C10 NO.5	土師器 甕	13.2	—	—	ナデ	赤褐(5YR4/6)	砂粒含む	良	口縁部1/2残 底部欠損	摩滅が激しく調整不明確
51	073-2	SD21	B10 NO.k	土師器 甕	9.5	5.2	—	ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	砂粒含む	良	口縁部1/4残	摩滅が激しく調整不明確
52	097-1	SD21	B10	土師器 手焙型	13.5	—	底部径 14.9	口縁部・体部・底部外面ハケメによる施文　他ナデ	明赤褐(5YR5/6)	砂粒含む	良	口縁部1/2残 底部1/4欠損	口縁部・体部外面にハリ付突帯
53	086-1	SD21	A10	土師器 甕	11.3	—	—	外面ヘラミガキ　他ナデ	赤褐(2.5YR4/6)	砂粒含む	良	口縁部1/4残 底部欠損	体部外面最上部にカキメ・刺突列
54	091-2	SD21	B10	土師器 鉢	10.8	—	底部径 3.3	内外面ヘラミガキ	外：にぶい褐(7.5YR5/3)内：橙(10YR5/8)	砂粒含む	良	口縁部1/6残 底部完形	内面に赤色顔料付着
55	094-2	SD21	B10	土師器 鉢	—	—	底部径 4.3	体部外面ハケメ底部ヘラケズリ　他ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	砂粒含む	良	口縁部欠損底部完形	底部焼成前穿孔径ゆがみあり穿孔後外面粘土を埋めて径調整か
56	084-2	SD21	B10	石包丁	—	—	4.2×9.1	—	—	—	良	—	
57	101-1	SD21	B10 NO.14	土師器 甕	15.2	—	—	体部外面ハケメ内面未調整他ナデ	外：赤褐(2.5YR4/6)内：灰黄褐(10YR6/2)	小石含む	良	口縁部3/8残 底部欠損	
58	095-1	SD21	B10	土師器 甕	13.4	—	—	体部外面ハケメ内面未調整他ナデ	赤褐(2.5YR4/6)	小石含む	良	口縁部1/2残 底部欠損	摩滅が激しく調整不明確
59	090-1	SD21	B10	土師器 甕	15.2	—	—	体部外面ハケメ内面未調整他ナデ	明赤褐(5YR5/8)	砂粒含む	良	口縁部1/4残 底部欠損	
60	058-1	SD21	B10 NO.18	土師器 甕	13.8	—	—	体部外面ハケメ内面未調整他ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	小石含む	良	口縁部1/2残 底部欠損	
61	074-1	SD21	B10 NO.m	土師器 甕	13.6～13.8	—	—	体部外面ハケメ内面未調整他ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	小石含む	良	口縁部完形底部欠損	
62	089-4	SD21	B10	土師器 甕	15.4	—	—	体部外面ハケメ内面未調整他ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	小石含む	良	口縁部2/5残 底部欠損	
63	076-1	SD21	B10 NO.o	土師器 甕	14.0	—	—	体部外面ハケメ内面未調整他ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	小石含む	良	口縁部1/2残 底部欠損	
64	096-1	SD21	A10	土師器 甕	11.3	—	—	外面ハケメ　頸部内面ハケメ　内面体部未調整　他ナデ	赤褐(2.5YR4/6)	砂粒含む	良	口縁部1/4残 底部欠損	
65	073-1	SD21	B10 NO.g	土師器 甕	11.6～11.8	—	—	体部外面ハケメ　他ナデ	外：極暗赤褐(10R2/2)内：赤褐(10R4/4)	小石含む	良	口縁部3/4残 底部欠損	体部外面斜行短沈線・沈線一条・波状文・沈線二条
66	075-1	SD21	B10 NO.g	土師器 甕	17.3	—	—	体部外面ハケメ　他ナデ	にぶい黄橙(2.5Y6/4)	小石含む	良	口縁部1/4残 底部欠損	外面斜行短沈線・横線2本×3・波状文　同一原体による施文か
67	097-3	SD21	A10 NO.6	土師器 甕	14.5	—	—	外面ハケメ　頸部内面ハケメ　他未調整	明赤褐(5YR5/6)	砂粒含む	良	口縁部1/5残 底部欠損	口縁部外面に刺突列　体部外面にクシガキ横線文・刺突列

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
68	087-1	SD21	B10 NO.c	土師器甕	16.8	—	—	外面ハケメ 内面未調整	にぶい黄橙(10YR7/4)	小石含む	良	口縁部1/2残 底部欠損	口縁部外面に刺突列 体部外面にクシガキ横線文・刺突列
69	060-1	SD21	B10 NO.12	土師器甕	18.7	—	—	体部外面ハケメ 他ナデ	赤褐(10R4/4)	小石含む	良	口縁部完形底部欠損	口縁部外面に刺突列 体部外面にクシガキ横線文・刺突列
70	095-3	SD21	B11	土師器甕	16.0	—	—	体部外面ハケメ内面未調整他ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	小石含む	良	口縁部1/4残 底部欠損	突帯ハリ付後指押圧施文
71	090-2	SD21	B10	土師器甕	15.8～17.2	—	—	体部外面ハケメ内面未調整他ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	砂粒含む	良	口縁部1/3残 底部欠損	摩滅が激しく調整不明確だが頸部に刺突あり
72	071-1	SD21	A10 NO.6	土師器甕	14.6	—	—	体部内外面ともハケメ他ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	砂粒含む	良	口縁部完形底部欠損	摩滅が激しく調整不明確
73	081-1	SD21	B10 NO.18	土師器甕	13.0	15.4	底部径4.2	体部外面ハケメ内面未調整他ナデ	明赤褐(2.5YR5/6)	小石含む	良	口縁部4/5残 底部完形	頸部外面板状工具による刺突あり
74	073-3	SD21	B10 NO.L	土師器甕	—	—	底部径5.0	体部外面タタキ 体部内面未調整 他はハケメ	外：にぶい赤橙(10R6/4)内：灰白(7.5Y7/2)に灰(10Y4/1)混じる	小石含む	良	底部1/4残	黒斑あり
75	077-3	SD21	B10 NO.14	土師器甕	—	—	底部径5.1	不明	にぶい赤褐(2.5Y4/4)	砂粒含む	良	底部のみ完形	摩滅が激しく調整不明
76	16-2	SE38	B12	須恵器杯	12.6	5.1	高台径6.9	底部外面未調整他はロクロナデ	灰 (7.5Y6/1)	2㎜の砂粒若干含	良	ほぼ完形	ハリ付高台 底部内面に工具痕（ハケメ？）+付着物（炭かウルシか）
77	15-1	SE38	B12	須恵器杯	14.0	4.0	高台径9.9	底部外面未調整他はロクロナデ	灰 (N6/)	小石含	良	ほぼ完形	ハリ付高台
78	15-3	SE38	B12	須恵器杯	14.6	3.6	高台径10.8	底部外面未調整他はロクロナデ	灰白 (10Y7/)	2㎜の砂粒若干含	良	口縁部小片 底部1/4残	ハリ付高台
79	19-2	SE35	A9	土師器杯	20.4～20.6	4.5		口縁部外面ヘラミガキ・底部ヘラミガキ、内面に放射暗文・らせん暗文	にぶい黄橙 (10YR7/4)	密	良	完形	口縁部：放射暗文 底部：ラセン暗文
80	19-1	SE35	A9	土師器甕	15.4	—		外面下半ヘラケズリか他はハケメ	外：灰オリーブ (5Y6/2) 内：灰 (7.5Y6/1)	密	良	底部片 口縁部1/11残	摩滅が激しく調整不明
81	20-1	SE35	A9	須恵器甕	44.9	—	体部径48.3	体部外面タタキ 他はロクロナデ	灰 (N6/) +灰白 (N7/)	密	良	口縁部小片 体部1/4残	体部外面上部にクシガキ横線文 体部内面に工具痕
82	7-3	SH2	C19	土師器甕	11.6	8.6		外面下半分ヘラケズリ他はナデ	淡赤橙 (2.5YR7/4)	小石含	良	口縁部1/4残 底部残存	体部外面上部に一部ハケメ
83	7-1	SH2	C18	土師器甕	—	—		外面下半分ヘラケズリ他はナデ	外：灰褐 (7.5YR6/2) 内：灰黄 (2.5Y7/2)	小石若干含	良	口縁部欠損 底部残存	
84	2-1	SH43	C20	土師器皿	10.0	2.8		底部外面未調整他はナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1㎜の砂粒含	良	口縁部1/2残	底部外面に粘土ひも接合痕
85	2-2	SH43	C20	須恵器杯	10.0	3.5		底部外面未調整他はロクデナデ	灰 (N5/)	1㎜の砂粒含	良	口縁部1/2残	蓋の可能性もあり
86	1-1	SH43	C19	土師器甕	26.0	43.5		外面下半分ヘラケズリ他はハケメ	浅黄橙(10YR8/4)	密	良	口縁部3/4残	
87	3-1	SH43	C20	土師器甕	26.1	—		外面下半分ヘラケズリ他はハケメ	外：灰白(7.5YR8/2) 内：にぶい黄褐(10YR5/3)	2㎜の砂粒含	良	口縁部1/3残	
88	13-3	SK27	D15	土師器椀	11.1	3.8		外面ヘラケズリ 内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)	1～2㎜の砂粒含	良	口縁部2/5残	
89	13-2	SK27	D15	土師器椀	10.0	4.7～4.6		外面未調整 内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)	2㎜の砂粒含	良	完形	口縁部に黒斑 外面に粘土ひも接合痕
90	21-1	SH31	B5	土師器椀	11.6	3.8		外面未調整 内面ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	やや密	良	口縁部5/6残	
91	22-2	SH31	B6	土師器椀	12.1	4.5		底部外面ヘラケズリ他はナデ（外面一部未調整）	外：灰白 (10YR8/2) 内：灰白 (2.5Y8/2)	やや密	良	口縁部1/4残	
92	21-4	SH31	B6	土師器甕	14.0	—		外面下半分ヘラケズリ他はハケメ	外：灰褐(7.5YR4/2) 内：にぶい橙(7.5YR7/3)	やや密	良	口縁部1/4残	
93	22-3	SH31	C5	須恵器蓋	11.0	2.9		天井部外面未調整+ロクロケズリ他はロクロナデ	灰 (N6/)	やや密	良	口縁部1/4残	
94	23-2	SK32	C2	土師器高杯	—	—	筒部径4.5	外面ヘラケズリ 内面ナデ	灰白 (10YR8/2)	やや密	良	脚部完存	面取り９面
95	11-1	SH9	B16	須恵器蓋	15.2	3.6		天井部外面ロクロケズリ	灰白 (N7/)	密	良	口縁部1/6残	
96	21-2	SH29	B5	土師器皿	12.9	3.5		外面下半分未調整 内面暗文	橙 (5YR6/8)	やや密	良	口縁部1/3残	周溝から出土 口縁部放射暗文
97	18-3	SK59	C8－P2	土師器椀	10.6～10.7	3.8		外面ナデ（一部未調整） 内面工具ナデ	浅黄 (2.5Y7/3)	小石含	良	完形	外面に粘土ひも接合痕
98	18-1	SB49	B8－P4	須恵器杯	11.6	2.9		底部外面未調整他はロクロナデ	灰(N6/)	密	良	口縁部小片 底部1/4残	蓋の可能性もあり
99	2-3	SD13	C15	須恵器杯	15.0	3.6		天井部外面未調整他はロクロナデ	青灰 (5PB6/1)	1～3㎜の砂粒若干含	良	口縁部1/12残	
100	8-4	SD10	C14	土師器皿	14.0	2.3		底部外面未調整他はナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	密	良	口縁部1/7残	
101	8-2	SD10	C14	須恵器杯	—	—	高台径10.2	底部外面未調整他はロクロナデ	灰色 (N8/)	密	良	底部1/2残	ハリ付高台
102	8-1	SD10	C14	須恵器杯	15.2	3.7	高台径10.8	底部外面未調整他はロクロナデ	灰白(N8/)	密	良	口縁部2/5残 底部1/2残	ハリ付高台
103	9-2	SD10	C14	須恵器杯	17.0	4.2	高台径10.5	底部外面未調整他はロクロナデ	灰白(N6/)	密	良	口縁部1/6残 底部1/4残	ハリ付高台
104	8-3	SD10	C14	土師器皿	16.0	1.6		底部外面未調整他はナデ	淡橙(5YR8/3)	密	良	口縁部1/5残	
105	9-1	SD10	C14	灰釉陶器椀	—	—	高台径8.4	底部外面ロクロケズリ 内面ロクロナデ	灰白(2.5Y8/1)	密	良	底部1/5残	ハリ付高台 灰釉刷毛塗り ロクロ左回転
106	4-2	SB54	B4－P3	土師器杯	14.5～14.7	3.5		外面下半分未調整 他はナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	小石含	良	完形	
107	4-1	SB54	B4－P3	土師器皿	14.8	2.5		ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	小石含	良	口縁部1/2残	
108	4-4	SB54	B4－P3	黒色土器椀	—	—	高台径8.7	底部外面未調整他はよわいナデ？	オリーブ黒(5Y3/1)	小石若干含	良	口縁部欠損 底部完存	ハリ付高台 B類
109	5-1	SB54	B4－P3	黒色土器椀	15.1～15.4	—		外面未調整 内面ナデ	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：オリーブ黒 (5Y3/1)	小石若干含	良	口縁部1/2残	ハリ付高台 口縁端部内面に沈線一条 A類

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
110	4-3	SB54	B4-P3	黒色土器 椀	16.0	5.6	高台径 7.3	外面未調整 内面ナデ	外：にぶい黄褐(10YR7/3) 内：黒褐 (2.5Y3/1)	小石若干含	良	口縁部1/4残	ハリ付高台 口縁端部内面に沈線一条 A類
111	11-3	SD12	B15	土師器 皿	17.0	1.4		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(10YR8/3)	密	良	口縁部1/4残	
112	11-4	SD12	B15	土師器 皿	18.0	1.7		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(10YR8/3)	密	良	口縁部1/12残	
113	10-4	SD12	B15	黒色土器 杯	15.8	3.2		外面未調整	外：浅黄橙 (7.5YR8/3) 内：黒褐(2.5Y3/1)	密	良	口縁部1/11残	摩滅が激しく調整不明 A類
114	12-3	SD12	C15	土錘	1.1	4.8	重 4.0g	未調整	灰白(2.5Y8/1)	砂粒含	良	ほぼ完形	孔径4mm
115	12-2	SD12	B15	土錘	1.5	3.0	重 6.2g	未調整	灰黄褐(10YR6/2)	砂粒含	良	完形	孔径3mm
116	23-4	SD22	D7	土錘	1.2	3.2	重 3.9g	未調整	赤褐(2. 5YR4/6)	密	良	完形	孔径4mm
117	17-1	SB48	B13	須恵器 甕	32.4	—		体部外面タタキ 体部内面未調整 他はロクロナデ	灰白(N7/)	3mmの砂粒若干含	良	口縁部1/8残	
118	6-2	SB52	C3-P4	土師器 皿	12.2	2.7		口縁部ナデ	淡橙(5YR8/4)	小石若干含	良	口縁部1/4残	外面に粘土ひも接合痕
119	23-1	SB52	C3-P4	土師器 皿	14.0	2.0		ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	やや密	良	口縁部1/7残	
120	6-1	SB51	B5-P3	土師器 杯	20.1	3.4		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	密	良	口縁部小片 底部1/4残	
121	22-4	SB51	C4-P1	土師器 皿	15.0	—		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	やや密	良	口縁部1/6残	
122	10-1	SK7	C15	土師器 皿	8.8	2.2		底部外面未調整 他はナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	密	良	ほぼ完形	
123	10-2	SK7	C15	瓦器 皿	9.6	1.7		底部外面未調整	灰(N4/)	密	良	口縁部1/4残 底部ほぼ完存	摩滅が激しく調整不明確
124	10-3	SK14	B15	瓦器 椀	14.8	—		外面下半分未調整 他はヘラミガキ	灰(N5/)	密	良	口縁部1/6残	口縁端部内面に沈線一条
125	12-1	SK14	B15	瓦器 椀	15.8	—		外面下半分未調整 他はヘラミガキ？	灰白(2.5Y8/1)+ 黄灰(2.5Y4/1)	密	良	口縁部1/4残	口縁端部内面に沈線一条 摩滅が激しく調整不明確
126	13-1	SK58	D15	黒色土器 椀	12.0	5.0	高台径 6.4	外面未調整 内面ナデ	外：暗灰黄(2.5Y5/2) 内：黒褐(2.5Y3/1)	3mmの砂粒含	良	口縁部1/4残 底部3/4残	ハリ付高台 A類
127	14-1	SK58	D15	土師器 皿	7.5	2.3	高台径 4.7	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	やや密	良	口縁部1/2残 底部完存	ハリ付高台
128	35-3	SZ19	B15	土師器 杯	16.0	3.0		底部外面未調整 他はナデ	淡橙(5YR8/3)	砂粒含	良	口縁部1/8残	
129	42-1	SZ19	B15	土師器 杯	13.8	2.7		ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	やや密	良	口縁部1/5残	
130	36-3	SZ19	B15	土師器 杯	13.2	2.4		外面未調整	淡橙(5YR8/3)	砂粒若干含	良	口縁部1/3残	磨耗が激しく調整不明確
131	29-3	SZ19	B15	土師器 杯	12.1	2.6		底部外面未調整 他はナデ	外：口縁部橙(5YR7/6)、底部にぶい黄橙(10YR7/4) 内：灰白(10YR8/2)	2mmの砂粒含	良	口縁部1/4残 底部1/4残	外面に粘土接合痕 摩滅が激しく調整不明
132	42-4	SZ19	B15	土師器 杯	13.6	2.3		底部外面未調整 他はナデ	灰白 (10YR8/2)	やや密	良	口縁部2/3残	
133	40-4	SZ19	B15	土師器 杯	12.1	2.7		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(10YR8/3)	小石若干含	良	口縁部1/4残	
134	39-4	SZ19	B15	土師器 杯	15.4	3.1		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	小石若干含	良	口縁部1/6残	
135	41-2	SZ19	B15	土師器 杯	13.5	—		ナデ	外：淡橙(5YR8/3) 内：浅黄橙(7.5YR8/3)	小石若干含	良	口縁部1/6残	
136	35-2	SZ19	B15	土師器 杯	13.8	2.4		底部外面未調整 他はナデ	灰白(10YR8/2)	砂粒含	良	口縁部1/3残	
137	38-2	SZ19	B15	土師器 杯	12.6 ～ 12.7	2.5		底部外面ヘラケズリ？ 他はナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)	小石若干含	良	口縁部1/5残	底部内面にラセン暗文？ 摩滅が激しく調整不明
138	32-3	SZ19	B15	土師器 杯	15.0	3.0		ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mmの砂粒含	良	口縁部1/8残	
139	34-2	SZ19	B15	土師器 杯	13.6	3.0		底部外面未調整 他はナデ	灰白 (10YR8/2)	1mmの砂粒若干含	良	口縁部1/6残	
140	30-1	SZ19	B15	土師器 杯	12.8	2.3		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	2mmの砂粒含	良	口縁部1/6残	
141	43-3	SZ19	B15	土師器 杯	11.8	2.3		ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	やや密		口縁部1/3残	底部外面に粘土接合痕 摩滅が激しく調整不明
142	32-2	SZ19	B15	土師器 杯	15.0	3.0		底部外面未調整 他はナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	密	良	口縁部1/3残	
143	28-2	SZ19	B15	土師器 杯	13.9	2.6		底部外面未調整 他はナデ	外：浅黄橙(7.5YR8/4) 内：灰白(10YR8/2)	2mmの砂粒若干含	良	口縁部1/8残	
144	28-1	SZ19	B15	土師器 杯	12.8	2.5		底部外面未調整 他はナデ	灰白(2.5Y8/2)	2mmの砂粒若干含	良	口縁部1/4残	
145	28-3	SZ19	B15	土師器 杯	12.9	2.1		底部外面未調整 他はナデ	灰白 (10YR8/2)	2mmの砂粒若干含	良	口縁部1/4残	
146	43-2	SZ19	B15	土師器 杯	14.0	3.0		ナデ	浅黄橙(7.5YR8/3)	やや密		口縁部1/5残	
147	26-1	SZ19	C15	土師器 杯	14.0	3.0		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(7.5YR8/3)	砂粒含	良	口縁部1/8残 底部欠損	
148	40-2	SZ19	B15	土師器 杯	15.1	2.4		底部外面ヘラケズリ？ 他はナデ	灰白(2.5Y8/2)	密	良	口縁部1/2残	
149	26-2	SZ19	C15	土師器 杯	13.0	2.6		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(7.5YR8/3)	砂粒含	良	口縁部1/8残 底部3/4残	
150	34-1	SZ19	B15	土師器 杯	14.3	—		ナデ？	灰褐(7.5YR6/2)	1mmの砂粒若干含	良	口縁部1/4残	摩滅が激しく調整不明
151	38-1	SZ19	B15	土師器 杯	12.5	3.2		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(10YR8/3)	小石若干含	良	口縁部1/3残	摩滅が激しく調整不明
152	29-1	SZ19	B15	土師器 杯	13.8	2.4		ナデ	灰白 (10YR8/2)	2mmの砂粒若干含	良	口縁部1/4残	
153	39-3	SZ19	B15	土師器 杯	11.8	2.3		底部外面ヘラケズリ 他はナデ	灰黄(2.5Y7/2)	小石若干含	良	口縁部1/6残	摩滅が激しく調整不明

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
154	40-1	SZ19	B15	土師器 杯	14.4	2.9		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(10YR8/3)	小石若干含	良	口縁部1/4残	外面に粘土接合痕？
155	35-4	SZ19	B15	土師器 杯	13.6	3.0		底部外面未調整 他はナデ	灰白 (10YR8/2)	砂粒含	良	口縁部1/4残	
156	35-1	SZ19	B15	土師器 杯	13.4	2.5		底部外面未調整 他はナデ	灰白(7.5YR8/2)	砂粒含	良	口縁部1/4残 底部2/3残	磨耗が激しく調整不明確
157	43-1	SZ19	B15	土師器 皿	14.8	1.8		ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	やや密		口縁部1/3残	底部外面に粘土接合痕
158	42-2	SZ19	B15	土師器 皿	15.2	2.1		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙10YR8/3	やや密		口縁部1/6残	
159	44-2	SZ19	B15	土師器 皿	—	—		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(7.5YR8/3)	やや密		底部片	底部内面に1線刻2条
160	36-1	SZ19	B15	土師器 皿	13.8	1.3		外：口縁部工具ナデ 底部未調整 内：ナデ	淡黄(2.5Y8/3)	砂粒含	良	口縁部1/5残	口縁端部内面に鋭利な工具による線刻（？）
161	33-1	SZ19	B15	土師器 皿	15.7	2.2		ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	密	良	口縁部1/9残	
162	39-1	SZ19	B15	土師器 皿	15.8	1.6		底部外面ヘラケズリ 他はナデ	外：灰黄(2.5YR7/2) 内：浅黄橙(10YR8/4)	小石若干含	良	口縁部1/6残	
163	38-5	SZ19	B15	土師器 皿	14.6	2.3		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(10YR8/4)	小石若干含	良	口縁部小片 底部1/4残	摩滅が激しく調整不明
164	29-2	SZ19	B15	土師器 皿	14.9	1.6		底部外面未調整 他はナデ	灰白 (10YR8/2)	2mmの砂粒若干含	良	口縁部1/11残	
165	25-4	SZ19	C15	土師器 皿	15.0	1.4		底部外面未調整 他はナデ	淡橙(5YR8/3)	密	良	口縁部1/12残	
166	36-2	SZ19	B15	土師器 皿	15.0	1.6		底部外面未調整 他はナデ	淡橙(5YR8/4)	砂粒含	良	口縁部1/6残	磨耗が激しく調整不明確
167	43-4	SZ19	B15	土師器 皿	16.0	1.6		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	やや密	良	口縁部1/6残	
168	25-3	SZ19	C15	土師器 皿	14.0	1.6		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(10YR8/3)	密	良	口縁部1/8残	
169	34-3	SZ19	B15	土師器 高杯	16.4	—		杯部外面未調整 他はナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	2mmの砂粒若干含	良	口縁部1/3残	皿の可能性もあり
170	33-2	SZ19	B15	土師器 高杯	—	—	筒部径 3.8	筒部外面ハケメあるいは工具ナデ 他はナデ	橙(7.5YR6/6)	2mmの砂粒含	良	筒部完存	面取り８面 筒部外面に鋭利な工具による線刻（傷？）
171	45-1	SZ19	B15	土師器 甕	16.0	—		口縁部ナデ	外：灰赤(2.5YR6/2) 内：淡橙(5YR8/3)	やや密	良	口縁部1/8残	摩滅が激しく調整不明
172	41-3	SZ19	B15	土師器 甕	15.6	—		ナデ？ （内面工具ナデ？）	浅黄橙(10YR8/3)	小石若干含	良	口縁部1/11残 底部欠損	外面に工具痕？ 摩滅が激しく調整不明
173	33-3	SZ19	B15	土師器 甕	19.6	—		外面ヘラケズリ 内面ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/3)	4mmの砂粒若干含	良	口縁部1/4残	外面作成後、内面に粘土充てん
174	44-1	SZ19	B15	土師器 甕	16.0	—		ハケメ	外：にぶい黄橙(10YR) 内：淡橙(5YR8/4)	やや密	良	口縁部1/8残	摩滅が激しく調整不明
175	25-1	SZ19	C15	土師器 甕	16.8	—		板ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	密	良	口縁部1/6残	
176	31-1	SZ19	B15	土師器 甕	13.8	—		—	淡橙(5YR8/3)	2mmの砂粒含	良	口縁部1/5残	摩滅が激しく調整不明
177	25-2	SZ19	B15	土師器 甕	15.6	—		ハケメ？	外：淡赤橙(2.5YR7/3) 内：浅黄橙(10YR8/3)	密	良	口縁部1/4残	摩滅が激しく調整不明
178	46-1	SZ19	B15	土師器 壺	—	—		ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：黒(N1.5/)	やや密	良	体部1/6残	
179	46-2	SZ19	B15	土師器 壺	—	—		外面ヘラケズリ 内面ナデ	外：褐灰(5YR5/1) 内：浅黄橙(7.5YR8/3)	やや密	良	口縁部欠損 底部片	
180	27-1	SZ19	C15	黒色土器 杯	16.0	—		外面未調整 内面ヘラミガキ	外：にぶい黄橙(10YR7/2) 内：黒(5Y2/1)	砂粒若干含	良	口縁部1/4残	A類
181	42-3	SZ19	B15	黒色土器 杯	13.0	3.1		外面ナデ 内面雑なヘラミガキ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：黒(2.5Y2/1)	やや密	良	口縁部1/3残	A類
182	38-4	SZ19	B15	黒色土器 杯	18.3	—		外面未調整 内面ヘラミガキ	外：にぶい黄(2.5Y6/3) 内：オリーブ黒(5Y3/1)	密	良	口縁部1/6残	A類
183	31-2	SZ19	B15	黒色土器 杯	15.9	—		外面未調整 内面ヘラミガキ？	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：黄灰(2.5Y4/1)	2mmの砂粒若干含	良	口縁部1/5残	A類　磨耗が激しく調整不明確
184	39-2	SZ19	B15	黒色土器 椀	12.6	3.8	高台径 5.4	外面未調整 内面ヘラミガキ？	外：淡黄(2.5Y8/4) 内：黒褐(2.5Y3/1)	小石若干含	良	口縁部小片 底部完存	A類　磨耗が激しく調整不明確 ハリ付高台
185	36-4	SZ19	C15	黒色土器 椀	18.0	4.7 推定	高台径 8.0 推定	外面未調整 内面ヘラミガキ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：黒褐(2.5Y3/1)	密	良	口縁部2/9残	A類　ハリ付高台か
186	41-1	SZ19	B15	黒色土器 杯	15.2	—		外面未調整 内面ヘラミガキ	外：にぶい黄橙(10YR7/4)+明オリーブ灰(2.5GY7/1) 内：オリーブ黒(5Y3/1)	小石若干含	良	口縁部1/4残	A類
187	31-3	SZ19	B15	黒色土器 皿	14.5	2.6 推定	高台径 6.1 推定	外面未調整 内面ヘラミガキ？	外：灰黄(2.5Y7/2) 内：黒褐(2.5Y3/1)	2mmの砂粒若干含	良	口縁部1/4残 底部3/4残	A類　ハリ付高台 磨耗が激しく調整不明確
188	38-3	SZ19	B15	須恵器 蓋	13.6	1.3		天井部外面未調整 他はロクロナデ	灰(6N6/)	密	良	口縁部1/4残	
189	30-2	SZ19	B15	須恵器 蓋	13.9	—		天井部外面未調整 他はロクロナデ	灰白(N7/)	小石若干含	良	口縁部1/7残 天井部1/6残	
190	30-3	SZ19	B15	須恵器 蓋	13.0	—		天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	灰色(N7/)	1mmの砂粒若干含	良	口縁部1/4残 天井部1/4残	口縁部に自然釉かかる 内外面に別固体の癒着物あり
191	32-1	SZ19	B15	須恵器 杯	11.8	3.9		底部外面未調整 他はロクロナデ	灰(N6/)	密	良	口縁部1/2残	
192	37-1	SZ19	B15	須恵器 甕	34.6	—		ロクロナデ	外：灰(N5/) 内：灰(N6/)	小石若干含	良	口縁部1/15残	
193	26-4	SZ19	C15	灰釉陶器 椀	19.0	—		ロクロナデ	底部内面灰白(7.5Y7/1) 灰白(7.5Y7/2)	密	良	口縁部1/9残	灰釉刷毛塗り
194	45-2	SZ19	B15	灰釉陶器 椀	15.6	—		外面ロクロケズリ 内面ロクロナデ	外：浅黄(7.5Y7/3) 内：灰白(10Y7/1)	密	良	口縁部1/8残	灰釉刷毛塗り
195	26-3	SZ19	C15	灰釉陶器 椀	—	—	高台径 6.4	外面ロクロケズリ 内面ロクロナデ	灰白(SY8/1) 口縁部内面灰オリーブ(7.5Y6/2)	密	良	底部3/5残	灰釉刷毛塗り ハリ付高台 ロクロ左回転

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
196	55-1	包含層	B10 包含層	土師器 甕	12.0	—		ナデ?	灰白(2.5Y8/2)	砂粒含	良	口縁部1/7残	磨耗が激しく調整不明確
197	51-1	包含層	B15 包含層	土師器 椀	12.0	4.0		外面未調整 内面ナデ	浅黄橙(7.5YR8/3)	3mmの砂粒若干含	良	口縁部1/3残	外面に粘土接合痕
198	22-1	包含層	B5-P6 包含層	土師器 皿	14.1	3.7		ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	やや密	やや良	口縁部1/6残	
199	16-3	包含層	B14-P8 包含層	土師器 皿	17.0	2.6		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	2mmの砂粒含	良	口縁部1/6残 底部1/4残	
200	50-3	包含層	C18 包含層	土師器 杯	13.6	2.6		底部外面未調整 他はナデ	灰白(10YR8/2)	砂粒含	良	口縁部1/4残 底部欠損	
201	55-3	包含層	B14 包含層	土師器 杯	14.0	2.8		底部外面未調整 他はナデ	灰白(10YR8/2)	砂粒含	良	口縁部2/9残 底部3/4残	底部内面に棒状工具によるよわい沈線 底部外面に焼成後に入れたと思われる線刻
202	51-3	包含層	B15 包含層	土師器 杯	13.6	2.5		ナデ	淡橙(5YR8/4)	3mmの砂粒若干含	良	口縁部1/5残	摩滅が激しく調整不明
203	40-3	包含層	B15 包含層	土師器 杯	11.8	2.0		ナデ	灰白(2.5Y8/2)	小石若干含	良	口縁部1/6残	
204	14-2	包含層	D14-P2 包含層	土師器 皿	15.0	2.3		外面未調整 内面放射暗文	橙(5YR7/6)	密	良	口縁部1/10残	精製品
205	52-3	包含層	B15 包含層	土師器 皿	13.7	2.6		底部外面未調整 他はナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	2mmの砂粒若干含	良	口縁部1/3残	外面に粘土接合痕
206	50-2	包含層	C18 包含層	土師器 皿	17.0	2.6		外面未調整（一部ヘラケズリ） 他はナデ	橙(5YR6/6)	細砂粒含	良	口縁部1/16残 底部1/3残	磨耗が激しく調整不明確
207	51-2	包含層	B15 包含層	土師器 皿	13.6	2.0		ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	2mmの砂粒若干含	良	口縁部1/8残	摩滅が激しく調整不明
208	16-1	包含層	B14-P9 包含層	土師器 皿	17.2	1.7		外面未調整 内面ナデ	外：浅黄橙(7.5YR8/3) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	2mmの砂粒若干含	良	口縁部1/6残 底部1/6残	底部内面ヘラ状工具による窪み 外面に粘土ひも接合痕 摩滅のため暗文の有無不明
209	49-2	包含層	C15 包含層	土師器 高杯	—	—	脚部 10.0	脚部外面ヘラケズリ 脚部内面未調整→工具ナデ	橙(5YR7/6)	密	良	脚部1/4残	
210	56-2	包含層	B14 包含層	黒色土器 杯	14.0	3.1		外面未調整 内面ナデ	外：浅黄橙(7.5YR8/3) 内：	小石若干含	良	口縁部1/4残	A類 磨耗が激しく調整不明確
211	53-2	包含層	B15 包含層	黒色土器 杯	18.8	—		外面未調整 内面ヘラミガキ	外：浅黄(2.5Y7/3) 内：黒褐(2.5Y3/1)	密（1mmの砂粒若干含）	良	口縁部1/7残	A類 外面に粘土接合痕
212	52-2	包含層	B15 包含層	黒色土器 杯	13.9	2.8		外面未調整 内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/2) 内：褐灰(7.5YR4/1)	2mmの砂粒若干含	良	口縁部1/3残	A類 口縁端部外面に沈線一条
213	54-2	包含層	B15 包含層	黒色土器 椀	26.5	—	高台径 7.2	外面未調整	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：オリーブ黒(7.5Y3/1)	1mmの砂粒若干含	良	口縁部1/7残 底部2/9残	A類 摩滅が激しく調整不明 ハリ付高台
214	56-1	包含層	C14 包含層	瓦器 椀	14.8	6.1	高台径 5.2	ヘラミガキ	暗灰(N3/)	密	良	口縁部1/3残	磨耗が激しく調整不明確 内面にラセン暗文か？ ハリ付高台
215	53-1	包含層	B15-C15 包含層	瓦器 椀	—	—	高台径 7.0	ヘラミガキ？	外：灰(N4/) 内：暗灰(N3/)	密（1mmの砂粒若干含）	良	底部1/4残	磨耗が激しく調整不明 ハリ付高台
216	53-4	包含層	C6 包含層	須恵器 蓋	11.2	2.9		天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	灰(N6/)	1mmの砂粒若干含	良	口縁部1/8残	かえり部分に自然釉かかる
217	48-2	包含層	C19 包含層	須恵器 蓋	10.4	2.6		天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	灰白(N7/1)	密	良	完形	
218	14-3	包含層	C14 包含層	須恵器 蓋	19.4	—		天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	灰(N6/)	密	良	口縁部1/15残	ロクロ右回転
219	11-2	包含層	C15 包含層	須恵器 蓋	17.6	—		天井部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	灰(N6/)	密	良	口縁部1/4残	
220	7-2	包含層	A17-P2 包含層	須恵器 杯	13.5	1.9		底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	灰(N6/)	2mmの砂粒若干含	良	口縁部1/5残	ロクロ右回転
221	55-2	包含層	C5 包含層	須恵器 杯	11.8	3.0		底部外面未調整 他はロクロナデ（一部ロクロケズリ）	灰(7.5Y6/1)	密	良	口縁部1/5残	
222	15-2	包含層	B14-P2 包含層	須恵器 杯	13.1	3.4		底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	灰白(N7/)	2mmの砂粒若干含	良	口縁部1/5残 底部1/6残	
223	52-1	包含層	B15 包含層	須恵器 杯	12.8	4.0	高台径 8.5	底部外面未調整 他はロクロナデ	青灰(5PB6/1)	密	良	口縁部1/6残 底部1/4残	ハリ付高台
224	49-1	包含層	C19 包含層	須恵器 高杯	—	—	筒部径 2.8	杯部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	灰白(N7/)	小石若干含	良	脚部上部	ロクロ左回転
225	54-1	包含層	C16 包含層	須恵器 双耳壺	—	—		ロクロナデ	灰(N5/)	2mmの砂粒若干含	良	体部1/8残	体部外面上部にヘラ状工具による沈線一条
226	48-1	包含層	D17 包含層	須恵器 壺	—	—		外面タタキ後ナデ 他はロクロナデ	灰(7.5Y6/1)	密	良	口縁部底部欠損 体部1/4残	
227	47-1	包含層	C18 包含層	須恵器 甕	31.8	—		体部内外面タタキ 他はロクロナデ	灰(7.5Y6/1)	小石若干含	良	口縁部1/12残	口縁部外面に波状文＋ヘラ書き文字
228	53-3	包含層	B15 包含層	緑釉陶器 椀	13.8	3.6	高台径 5.8	—	浅黄(2.5Y8/4)	密	良	口縁部1/9残 底部1/4残	摩滅が激しく調整不明 緑釉削り落としわずかに残
229	50-1	包含層	C17 包含層	緑釉陶器 椀	—	—	高台径 7.8	ロクロナデ	暗オリーブ(7.5Y4/3)	密	良	口縁部欠損 底部完存	底部外面に糸切痕 ハリ付高台　トチンユ ロクロ左回転
230	52-4	包含層	B15 包含層	灰釉陶器 椀	—	—	高台径 6.7	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	灰白(2.5Y8/1)	密	良	底部1/4残	直接重ね焼き ハリ付高台
231	23-3	包含層	D7-P1 包含層	土錘	1.2	3.2	重 4.8g	未調整	桃(2.5YR6/6)	やや密	良	3/4残	孔径4mm
232	55-4	包含層	C13 包含層	土錘	0.7	3.2	重 4.3g	未調整	にぶい褐(7.5YR6/3)	砂粒含	良	ほぼ完形	孔径5mm
233	24-1	包含層	C1-P8 包含層	陶器 擂鉢	30.0	—		ロクロナデ	暗紫灰(5RP4/1)	密	良	口縁部1/12残	
234	18-2	包含層	B10-P1 包含層	石製品			重 31.3g	—	灰黄褐(10YR4/2)		—	—	

Ⅴ　自然科学分析

はじめに

今回の分析調査は、弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられる環濠内から出土した炭化物について放射性炭素年代測定を行い、年代に関する資料を得ることにある。また、炭化物の同定を行い、その種類を明らかにする。

1　試　料

試料は、弥生時代後期～古墳時代初頭とされる環濠埋積物より出土した炭化物２点（資料Ａ，Ｂ）である。環濠埋積物は上位より１～３層に区分されており、１層が黒褐色粘土、２層が明黄褐色粘土、３層が灰色粘土からなる。今回の試料は２層上部から出土したもので、壺・甕などの土器に接して出土している。炭化物試料は、いずれも土壌ごと取り上げられ、室内での観察に供した。

資料Ａの炭化物は、全て繊維組織が認められる炭化物である。資料Ｂの炭化物は、繊維方向が認められる炭化物と、組織が全く観察できない炭化物とが認められる。資料Aについては放射性炭素年代測定･炭化材同定、資料Ｂについては炭化材同定を実施する。なお、資料Ｂの繊維方向が認められない炭化物についても、実体顕微鏡による観察を行う。

2　方　法

（１）放射性炭素年代測定

測定は、加速器質量分析法（AMS法）で行い、放射性炭素の半減期はLIBBYの5568年を使用する。なお、測定は、株式会社加速器分析研究所（IAA）が行った。

（２）炭化材・炭化物の同定

繊維組織が見られる炭化物は、木口（横断面）･柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて組織の特徴を観察し、種類を同定する。繊維方向が見られない炭化物については実体顕微鏡で外観や断面の観察を行う。

3　結　果

表７　放射性炭素年代測定および同定結果

番号遺構など	繊維　質（種類）	測定年代	δ13C	補正年代	Code　No.
A　SD21　No.1　有	炭化材 マツ属複維管束亜属	1870±50BP	−23.44±1.01‰	1890±50BP	IAAA−30196
B　SD21　No.3　有	炭化材 マツ属複維管束亜属	−	−	−	−
B　SD21　No.3　無	炭化物材 イネの胚乳と籾殻？	−	−	−	−

１）年代測定は、加速器質量分析法（ＡＮＳ法による。）
２）測定年代は1950年を基点とした年数で、補正年代はδ13Cの値に基に同位体効果による年代誤差を補正した値。
３）放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

放射性炭素年代測定結果および同定結果を表１に示す。

資料Aの炭化物の年代は、1870±50BP（補正年代1890±50BPであった。繊維組織が認められた炭化物は、資料A,B共に炭化材であった。樹種は、以下に示す形質から針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）

マツ科

試料はいずれも年輪界で割れている。軸方向組織は仮道管を主とし、晩材部に近い場所には垂直樹脂道も認められる。放射組織は柔細胞と仮道管で構成される。分野壁孔は窓状となり、１分野に１個。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。本来であれば、水平樹脂道も有しているはずであるが、観察した範囲では認められなかった。

資料Bの繊維組織が見られない炭化物は、粒状の炭化物と薄い膜状の炭化物とがあり、イネの胚乳や籾殻に似るが、いずれも破損が激しく、種類の同定には至らなかった。

4　考　察

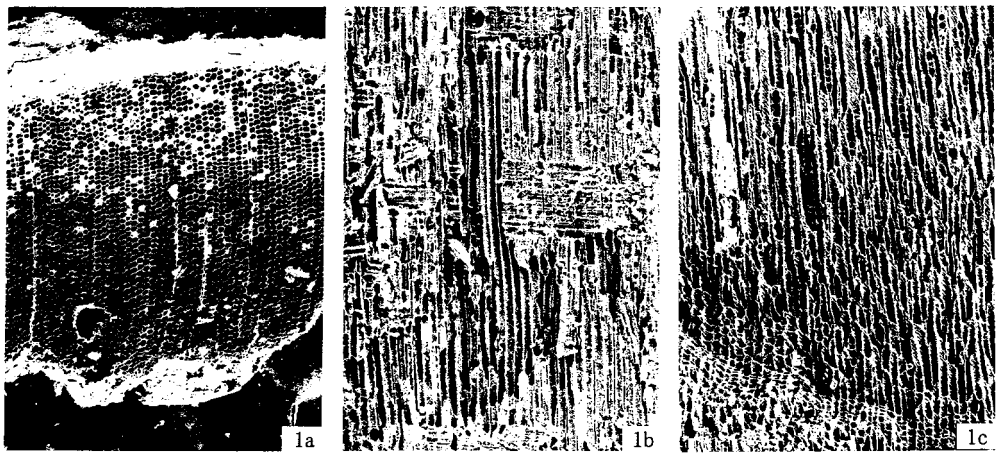
今回の環濠埋積物2層上部から出土した炭化物は、資料Aが炭化材、資料Bが炭化材とイネの胚乳や籾殻の可能性がある炭化物に同定された。資料Aの炭化材の14C年代測定値は1870BP、同位体効果による補正年代が1890ＢＰであった。また、INTCAL98（Stuiver et al，1998）による補正年代の暦年較正結果は、ＡＤ90,100,125となり、誤差範囲を含めるとＡＤ70～210となった。今回の結果は、本環濠の時期が、出土遺物から弥生時代後期～古墳時代初頭と推定されていることと同調的な結果となっている。

炭化材の樹種は、資料Ａ・Ｂとも針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。マツ属複維管束亜属は、日当たりの良い場所に生育し、関西地方では二次林の主要な構成種であり、人間活動とも関連性の強い樹木である。当時の遺跡周辺に分布していた可能性があるが、この点に関しては周辺での植生史研究成果をもって再評価するようにしたい。また、資料Ｂの繊維組織をもたない炭化物は、イネの胚乳や籾殻に由来する可能性があるが保存状態が悪いため、種類の特定はできなかった。このように今回の環濠埋積物中には当時の人間活動を推定する上で有効な情報が含まれている可能性が高く、今後、環濠埋積物について水洗選別を行うことが、当時の植物相や栽培植物に関する情報を得る上で有効と考えられる。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

引用文献

Stuiver,M.,Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W.,Burr,G.S.,Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac,G., van der Plincht, J.and Spurk,
M.(1998)INTCAL98 radiocarbou age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40, p.1041-1083.



１．マツ属複雑管束亜属（資料Ａ）
ａ：木口，ｂ：柾目，ｃ：板目

30 200μｍ：ａ
46 200μｍ：ｂ，ｃ

第24図　炭化材組織図

Ⅵ　結　　語

北門遺跡第３次調査では、古墳時代初頭から平安時代後期にかけての遺構・遺物を確認することができた。そのなかでいくつかの盛行期が推定される。まず、これらを時代別に概観してみる。

古墳時代初頭　　ＳＤ21は、後述するようにその形状から環濠の可能性が高く、出土遺物も充実した内容を示している。このことから、当遺跡の盛行期のひとつとして考えてよいが、ＳＤ21の他は、溝２条が散在的に検出されたのみであり、集落跡は確認されていない。ＳＤ21の性格や全貌とともに今後の発掘調査に期待したい。

飛鳥時代から奈良時代前半　　竪穴住居８棟、掘立柱建物４棟、井戸２基などが確認された当遺跡の盛行期である。特に竪穴住居は建て替えが見られ、この時期を代表する遺構と言えよう。また、包含層から出土したヘラ書文字のある須恵器もこの時期の遺物である。

平安時代前期　　飛鳥時代から奈良時代前半の竪穴住居と掘立柱建物が混在する集落跡から、住居跡の中心が掘立柱建物群となる時期である。確認された掘立柱建物６棟のうち４棟が、ほぼ真北に棟をもつ方位のそろった建物であり、同様に方位のそろった柱列とともに併存したものと考えられる。この時期にはＳＺ19も含まれ、遺構・遺物から見て飛鳥時代から奈良時代前半と並ぶ当遺跡の盛行期と位置づけられるであろう。

平安時代後期　　平安時代中期の遺構は検出されず、この時期になって再び、掘立柱建物が１棟の他中世墓や土坑などが出現する。遺物としては瓦器や黒色土器などがある。ただ、前３時期と比較すると、その成果は質量ともに少ない。

ここでは、上に挙げた今回の調査成果の中で注目できる事項を中心に検討し、本報告書における結語とする。　　（小倉　整）

１　ＳＤ２１について

ＳＤ21はその形状から、自然流路ではなく、何らかの意図を持って構築されたと考えられる。その場合、防御あるいは一定の区画を意図して構築された可能性が高い。削平のためか濠と併存する生活関連の遺構が全く検出されなかった。このことから全体像を求めるには判断材料が乏しいが、いくつかの仮説を提示しておく。

その一つは、集落を取り巻く環濠として構築されたとするものである。東端に位置するSD42との関連性が注目される。このSD42は、緩い弧を描き幅・深さともに数十ｃｍ程度の溝であるが、その埋土はSD21の最下層と同じ褐灰色土である。上部削平により、底面のみが残存して検出され、本来はSD21と同様の規模・形状をしていた可能性がある。その場合、両溝は調査区外で合流する同一の濠として集落をめぐる場合や、２重環濠となる可能性がある。また、環濠の内外の位置関係を検討する必要がある。SD21･42ともに西側を外にするようなゆるやかな弧を描く。しかし、調査区西端から検出面が緩慢に降下し、SD21を境に調査区外東側の谷に向けて傾斜が増す。このことから、東側を外とし、西側に向けて中枢的施設を擁するものの可能性がある。

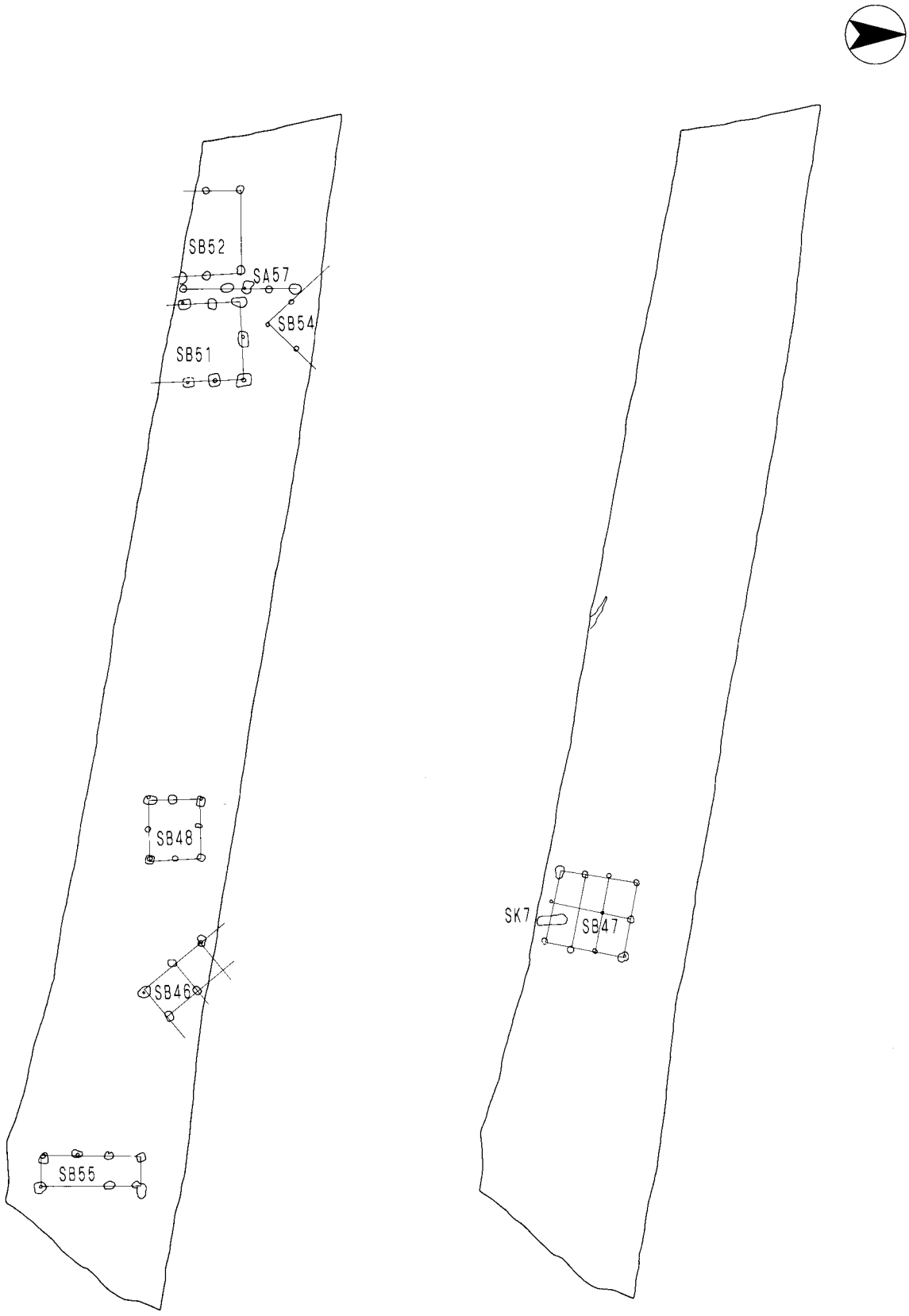
参考資料として、隣接地を調査した北門遺跡第２次調査の成果があるが、SD21の隣接部分は未調査で、隣接部分以外の調査区にもSD21につながるような溝は確認されていない。ただこのことは、ＳＤ21の南へ伸びた先が急に西側に曲折することのみが否定できるにとどまる。

またSD21の出土状況は、遺構編でも触れた通り溝の底付近からはほとんど遺物が出土していない。よって、当然ながら遺物は遺構の存在した下限の目安を示すにすぎず、環豪の構築期は、これよりもさかのぼる可能性も考慮すべきである。ただ、出土遺物のほとんどが古式土師器であり、弥生以前の時期を示す遺物が石製品１点のみであることから古墳時代初頭を中心とする遺構として位置づけた。

（水谷隆広）

古墳時代初頭　　飛鳥～奈良時代前半

第25図　時代別遺構変遷図１（１：400）



平安時代前期　　平安時代後期

第26図　時代別遺構変遷図２（１：400）

2　文字資料について

以下では包含層出土の須恵器（第23図－227）に確認されたヘラ書文字について述べる。

ヘラ書文字の判読について　まず文字そのものについて検討する。文字の判読については、奈良大学図書館館長東野治之氏にご教示を得た。出土した文字資料は、判読が困難ではあるがほぼ間違いなく漢字である。それも文字を知らない者が漢字を真似て書いたのではなく、漢字を意図的に書いている可能性が高い。

１文字目の「 」は「又」の異体字と考えられる。「交」（こう）に通ずる「×」を二つ重ねた「 」という字ともとれるが、「又」の方が有力である。

２文字目の「 」の「 」の部は「皿」もしくは「」という部首であろう。こういったくずし方は日本では７世紀に見られる古いくずし方である。（註１）「」の「 」の部は現時点では判読が不可能である。今後も調査したい。くずし方だけで考えると「林」のくずし方に「 」というものがある。ただこの場合は上の部首とあわせて「 」（ふしづけの木）という字となる。「」の可能性がないではないが、まず使用されることのない漢字となってしまう。（註2）また、地名や人名とも考えにくい文字であることも重要な点であろう。（註３）

須恵器の産地と実年代　次に実年代と産地について須恵器そのものの検討を行ってみる。

ヘラ書きされた須恵器は、当遺跡出土遺物のなかでは１点のみで、甕の口縁部片である。口縁端部を肥厚させ、頸部から口縁端部にかけての外面上半に施文されている。焼成は良好で灰色を呈する。胎土は密で小石が混じる。

北門遺跡周辺から出土した須恵器としては、御墓山窯跡（註４）が充実している。そこで当該須恵器甕が御墓山窯跡出土の製品と共通点を持つか否かを検討した。その結果、本遺跡出土のヘラ書された須恵器甕と、御墓山窯跡出土の須恵器甕（註５）との形態的特徴に共通点が確認され、当該須恵器甕は御墓山２号窯灰原（７世紀後半～末）の製品（註６）との可能性が高まった。よって産地・実年代もこれによると考えるのが妥当であろう。この実年代は、文字のくずし方が７世紀に多く見られるという点とも矛盾しないことも付け加えておく。

類例と考察　ここでは上の２点に加え、伊賀・伊勢湾岸の文字資料の類例も併せて考察を行う。

この時期の須恵器のヘラ書文字は、伊賀・伊勢両地方に類例はあるが、いずれも文字の判読は容易ではない。伊賀地方では須恵器に文字が刻書されている例として、上野市唐木谷遺跡（註7）・伊賀国府跡、青山町中出向遺跡（註８）などがあげられる。いずれも「安」と刻書されたもので、実年代は７～８世紀と推定されている。伊勢湾岸では四日市市の西ヶ広遺跡、愛知県の尾張元興寺、片絶里（註９）などの資料がある。いずれも藤原京併行期の陰刻であるが、前者の陰刻は「尾治出寸□」（尾張国春部郡山村里となるか？）とされ生産地の可能性が指摘されている。また、尾張元興寺では「瓮」（ほとぎ）とヘラ書きされた例がある。「ほとぎ」は一般的には水や酒を入れる容器をさす。尾張元興寺出土の土器はまさに「ほとぎ」にあたる器形であり、「ほとぎ」は器種名の可能性が指摘されている。また類例に、飛鳥石神遺跡に「瓮五十戸」と短頸壺の底部外面に記されたものがあり、「五十戸」が「里」の意味であることから地名との考えもある（註10）。このように伊勢湾岸の須恵器のヘラ書の例は、生産地ないし生産者であるらしく、祭祀にかかわる可能性は低いとされている。

こういったことを考慮し、当該須恵器のヘラ書文字を考察してみる。産地を御墓山窯と考えると、当ヘラ書文字には伊賀地方に該当する郡郷名などの地名はなく、地名とするには無理がある。また、工人などの人名の可能性も考えられるが、その場合、文字そのものから判断すると地名・人名とは考えにくいという点と齟齬が生じるなど、未解決の部分が多い。今後の類例の発掘調査の成果に期待したい。

（小倉　整）

3　掘立柱建物群について

建物間隔の計測では、長距離の場合、当時の尺数との誤差が大きくなる危険を承知の上で、30cmを１尺として検討した。

飛鳥時代から奈良前半及び平安時代後期の掘立柱建物は、建物自体は大型のものであるが、棟方向に統一性がなく、柱筋や間隔等にも規則性は見られない。唯一、ＳＢ49とＳＢ50が棟方向を揃えた可能性が考えられる。その場合ＳＢ49の西側柱列とＳＢ50の東側柱列の間隔は3.3mで11尺となる。

当遺跡において、掘立柱建物群として構成されていた可能性があるのは平安前期のＳＢ48･51･52･55、ＳＡ57である。これらは棟方向がほぼ真北で、そのうちＳＢ51･52は北側を揃えて配置されている。両者の間隔は1.8ｍ（6尺）で、この2棟が同時存在だとすると、同規模の建物が北側を揃えて列のように配置されていると考えることができる。両者の間にあるＳＡ57は、双方から0.9ｍ（3尺）の等距離にあり、非常に接近はしているものの方向がそろっているため同時存在の可能性がある。

次にＳＢ51とＳＢ48、ＳＢ52とＳＢ48との間隔であるが、前者が28ｍ後者は35.2ｍで両者とも尺では完数にならず規則性は見られない。ＳＢ48とＳＢ55との間隔も同様に20ｍとなり、1尺を30cmと考えると端数となる。ＳＢ51とＳＢ55との隔は51.60ｍとなり172尺であるが、これも尺による10の倍数値を得られない。

このように当遺跡において、掘立柱建物群が最も盛行する時期において、部分的にではあるが規則的な配置が認められた。調査区内の４棟のみではまとまりに欠ける印象は拭えないが、棟方向をほぼ真北に揃えた建物群が存在することは事実であり、調査区外の建物のありようも含めて、今後の発掘調査が何らかの知見を与えてくれるかもしれない。

（小倉　整）

（註）

（1）　文字の判読については、奈良大学図書館館長東野治之氏にご教示を得た。

（2）同上

（3）同上

「非」と考えると「罪」という字になるが、「非」場合のくずし方は「 」となり、左右が別のかたまりでくずされることが多い。ただ、まれに「 」となるものもある。「隹」の場合は「 」とくずされるため可能性は低い。

（4）笠井賢治『御墓山窯跡発掘調査報告書』上野市教育委員会1994

（5）同上

報告書番号620～647の須恵器甕

（6）当該須恵器甕と御墓山窯跡２号窯灰原出土の（５）の須恵器甕との比較検討は上野市史編さん室の笠井賢治氏にご教示を得た。この須恵器甕について、①口縁端部を肥厚のさせる際のナデ、つまみあげかたの技法がほぼ共通である。②頸部に施される施文は沈線で区画した後，２段に波状文を施し、後に沈線をナデ消している。③胎土・焼成が非常に似通っている。の３点から、御墓山窯２号窯灰原で生産された可能性が高いとの見解を示した。

（7）山本雅靖『唐木谷遺跡発掘調査報告書』上野市教育委員会1979、福田典明『上野市埋蔵文化財年報９』上野市教育委員会2003

（8）濱辺一機『中出向遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター2000

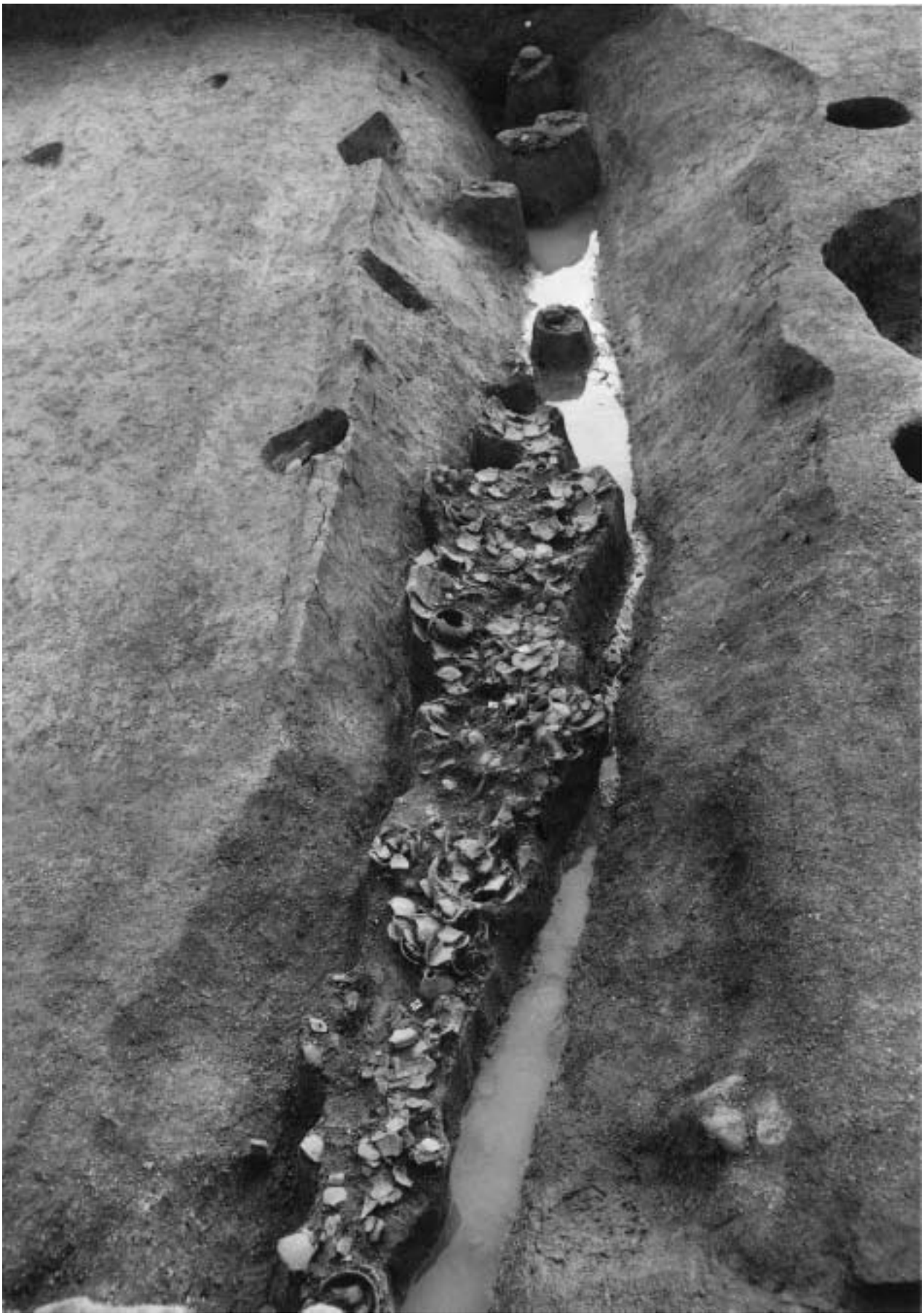
（9）福岡猛志「尾張元興寺と片絶里」『伊勢湾と古代の東海－古代王権と交流４－』名著出版

（10）服部哲也『尾張元興寺跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会1994

写　真　図　版

調査前風景（北西から）

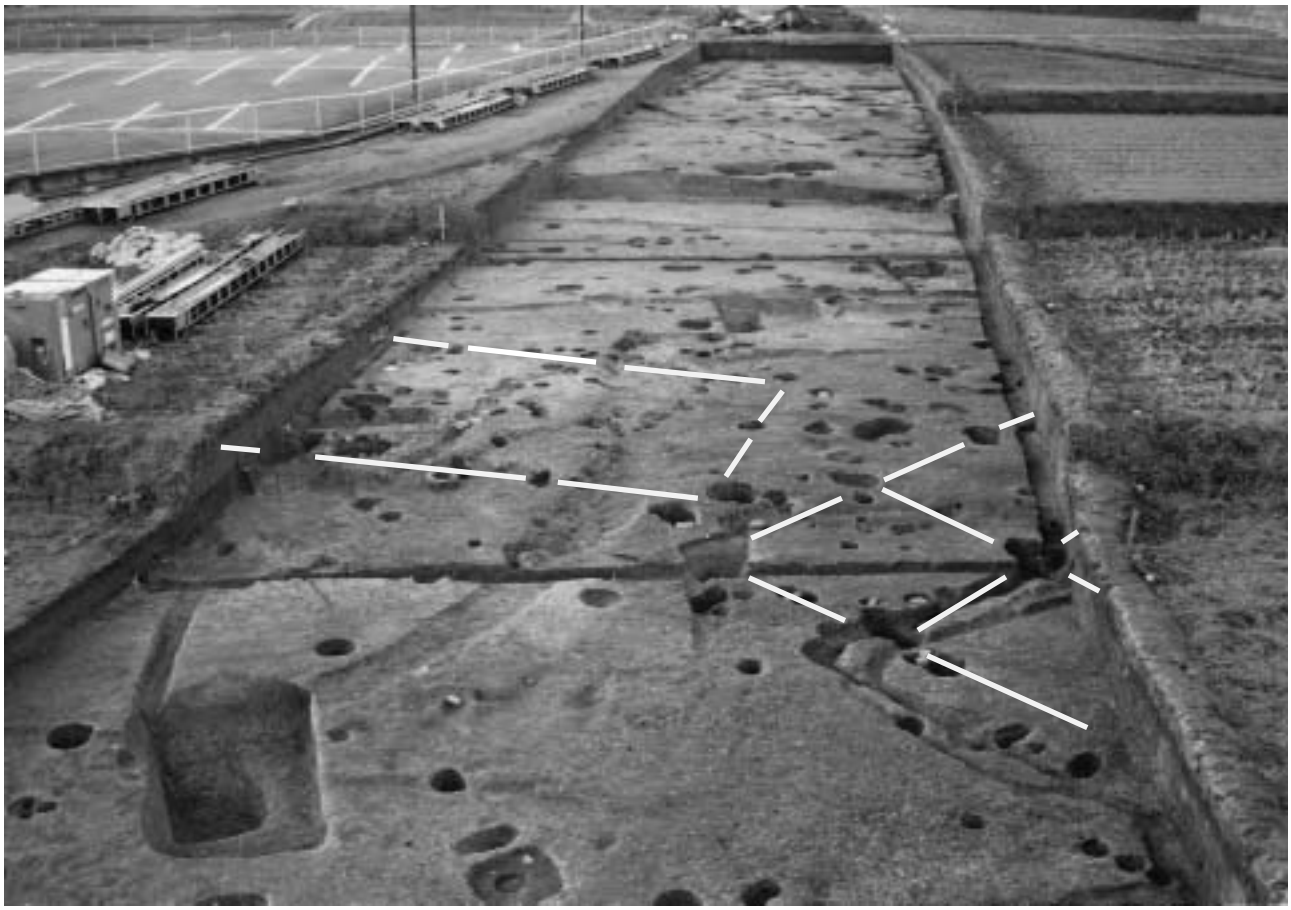
調査区全景（西から）



ＳＤ２１　出土状況（北から）

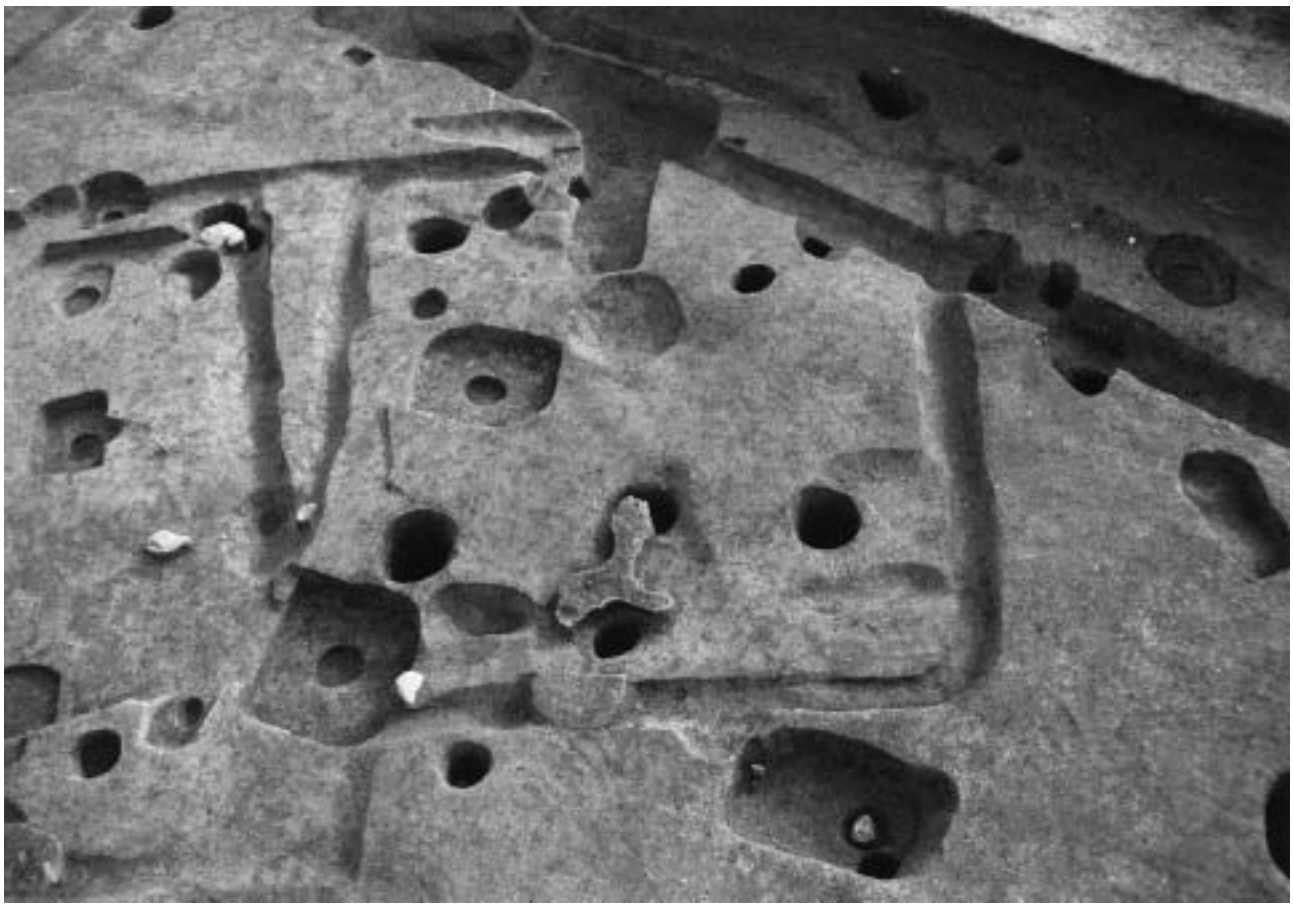
ＳＤ21　出土状況（北から）

ＳＤ21　出土状況（西から）

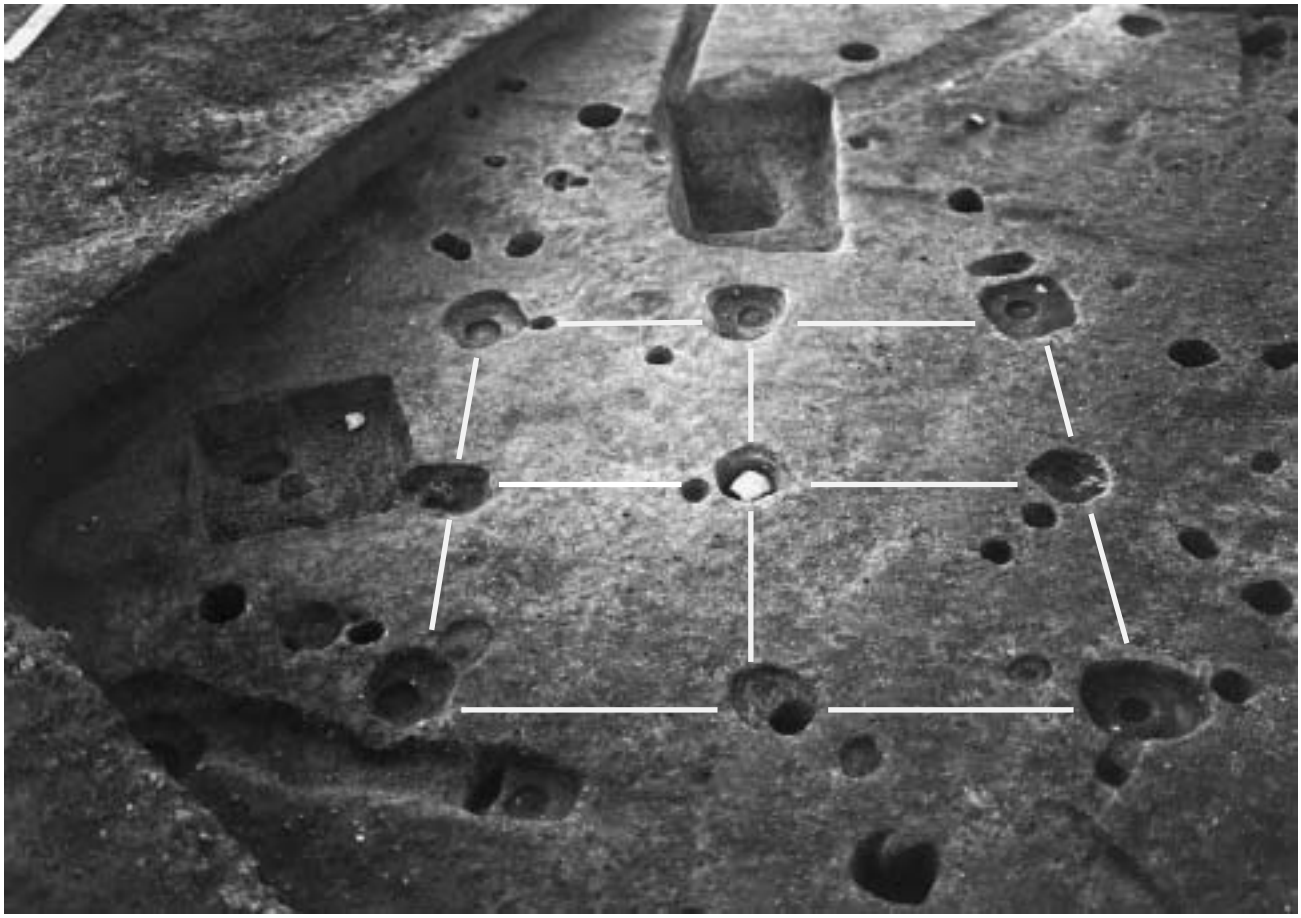


ＳＢ46・47　ＳＨ9・11（東から）

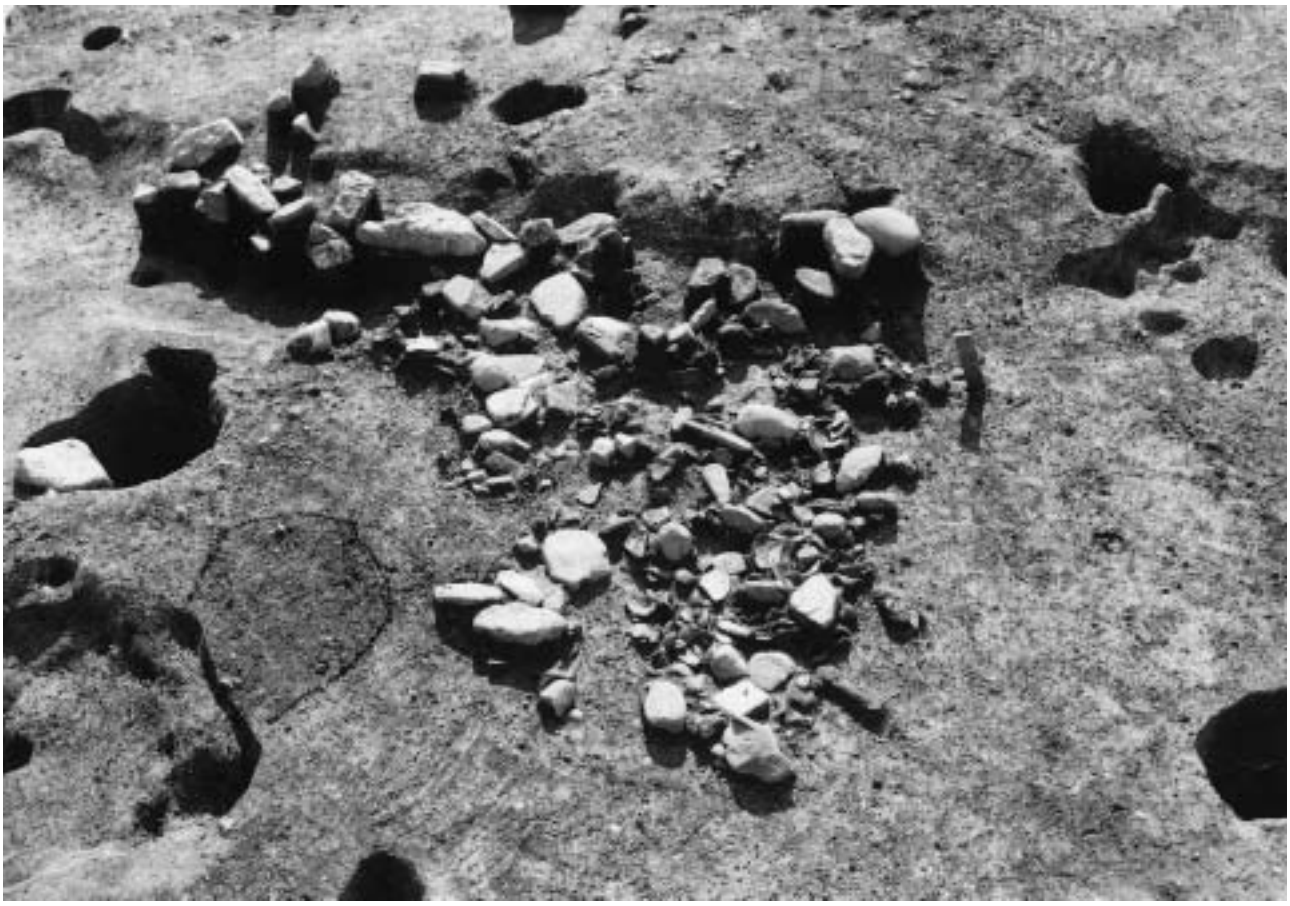
ＳＢ50・ＳＡ56・ＳＨ26・29・31（西から）



ＳＨ29（北西から）



ＳＢ45（北東から）



ＳＺ１９（北から）

ＳＫ７（北から）

1

2

8

4

12

6

13

出土遺物（１：３）

14

15

21

20

28

22

25

29

24

26

27

出土遺物（１：３）

出土遺物（１：３）

31

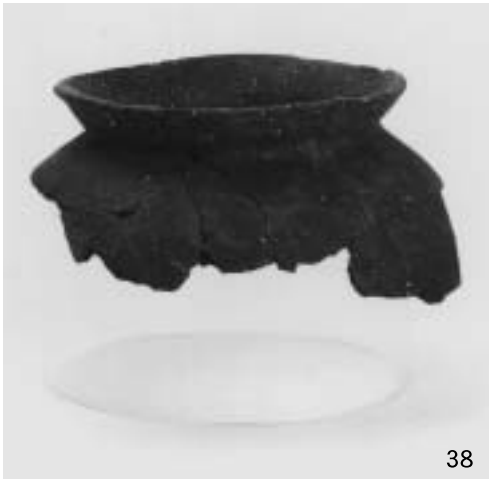
32

33

40

34

41


38

42

出土遺物（1：3）

43

48

45

49

46

52

54

47

53

55

56

出土遺物（１：３）

67

63

65

69

66

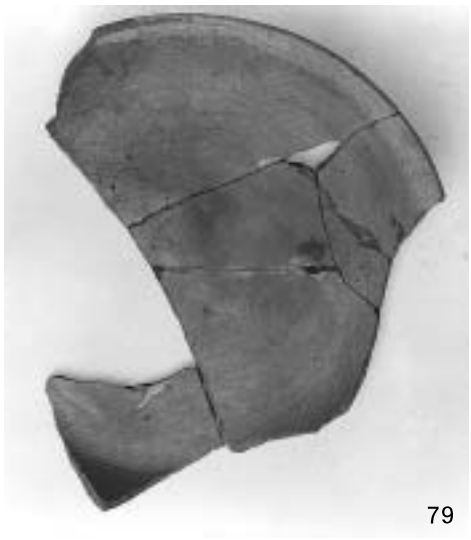
73

72

出土遺物（1：3）

76

89


79

77

97

82

107

106

126

108

191

123

127

110

109

122

127

229

出土遺物（１：３）

報 告 書 抄 録

ふりがな	きたかどいせきはっくつちょうさほうこく
書名	北門遺跡（第3次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２３７
編著者名	森川常厚・五十棲孝子・水谷隆広・野田有美・小倉整
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515−0325　三重県多気郡明和町竹川503　℡ 0596−52−1732
発行年月日	西暦　2004年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
きたかどいせき 北門遺跡	うえのしおおたに 上野市大谷	206	952	34° 46′ 56″	136° 8′ 42″	2002年11月6日 ～ 2002年12月27日	736	国道422号(三田坂バイパス)国補道路改築事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北門遺跡	集落跡	古墳時代初頭 飛鳥~奈良時代前半	溝(環濠) 竪穴住居 掘立柱建物	古式土師器(壺･甕･高杯･器台･手焙) 土師器(長胴甕･杯･椀･皿) 須恵器(杯蓋･甕)	
		平安時代前期	掘立柱建物	須恵器(杯蓋･椀) 灰釉陶器･黒色土器(椀)	
		平安時代後期	掘立柱建物土坑墓	黒色土器(椀)瓦器(椀)	

三重県埋蔵文化財調査報告 ２３７
北門遺跡（第３次）発掘調査報告
２００４．３発行
編集
発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　東海印刷株式会社